

Adobe® LiveCycle® ES4 の インストールおよびデプロイ (WebLogic® 版)

法律上の注意

法律上の注意については、http://help.adobe.com/ja_JP/legalnotices/index.html を参照してください。

目次

第1章：このドキュメントの内容

1.1 このドキュメントの対象読者	1
1.2 このガイドで使用する表記	1
1.3 追加情報	2

第2章：インストール、設定およびデプロイメントプロセスの概要

2.1 インストール、設定およびデプロイメントの概要	3
2.2 設定およびデプロイのためのタスクの選択	3
2.3 自動設定と手動設定の比較	4
2.4 LiveCycle のインストール、設定およびデプロイメントリスト	4

第3章：LiveCycle モジュールのインストール

3.1 事前準備	6
3.2 インストールに関する考慮事項	7
3.3 LiveCycle のインストール	8
3.4 ログファイルの表示	9
3.5 次の手順	10

第4章：LiveCycle をデプロイするための設定

4.1 LiveCycle の設定およびデプロイにおける考慮事項	11
4.2 LiveCycle の事前設定タスク	13
4.3 LiveCycle の構成およびデプロイ	13

第5章：デプロイメント後のタスク

5.1 一般的なタスク	20
5.2 モジュールの Web アプリケーションへのアクセス	22
5.3 Correspondence Management Solution の設定	25
5.4 PDF Generator の設定	31
5.5 Rights Management の最終設定	39
5.6 LDAP アクセスの設定	39
5.7 FIPS モードの有効化	40
5.8 HTML 電子署名の設定	41
5.9 Connector for EMC Documentum の設定	41
5.10 Documentum リポジトリでの XDP MIME 形式の作成	46
5.11 Connector for IBM Content Manager の設定	47
5.12 Connector for IBM FileNet の設定	50
5.13 UNIX および Linux 用の追加インストール	54

第 6 章：高度な実稼働環境の設定

6.1 Output および Forms のプールサイズの設定	55
6.2 PDF Generator	55
6.3 Windows での CIFS の有効化	56

第 7 章：付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール

7.1 概要	58
7.2 LiveCycle のインストール	58
7.3 エラーログ	59
7.4 コンソールモードでの LiveCycle のアンインストール	60

第 8 章：付録 - Configuration Manager コマンドラインインターフェイス

8.1 操作の順序	61
8.2 コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル	61
8.3 一般的な設定プロパティ	62
8.4 使用例	75
8.5 Configuration Manager CLI のログ	76
8.6 次の手順	76

第 9 章：付録 - WebLogic Server の手動設定

9.1 サーブレットコンテナ用の認証資格情報の設定	77
9.2 クラスパスおよびサーバー起動引数の変更	77
9.3 WebLogic Server スタックスレッドタイムアウトの増加	78
9.4 Solaris の管理対象サーバーの開始引数の設定	79
9.5 JVM 引数の設定	79
9.6 データベース接続の設定	80
9.7 データソースのセキュリティ保護	88
9.8 次の手順	88

第 10 章：WebLogic への手動デプロイ

10.1 LiveCycle モジュールのデプロイについて	89
10.2 WebLogic Server へのデプロイ	89
10.3 WebLogic Server の再起動	90
10.4 次の手順	91

第 11 章：付録 - SharePoint サーバーでの Connector for Microsoft SharePoint の設定

11.1 インストールと設定	92
11.2 SharePoint Server 2007 でのインストールと設定	92
11.3 SharePoint Server 2010 および SharePoint server 2013 でのインストールと設定	94

第 1 章：このドキュメントの内容

LiveCycle は、ビジネスプロセスの自動化と効率化を支援するエンタープライズサーバープラットフォームです。LiveCycle は次のコンポーネントから構成されます。

- J2EE ベースの Foundation。サーバー機能とランタイム環境を提供します。
- LiveCycle アプリケーションの設計、開発およびテストを行うためのツール。
- LiveCycle サーバーにデプロイされるモジュールとサービス。機能的なサービスを提供します。

LiveCycle のアーキテクチャと機能について詳しくは、「[LiveCycle の概要](#)」を参照してください。

このドキュメントは、[LiveCycle ドキュメントのページ](#)から入手できる大きなドキュメントセットの一部です。新規インストール（シングルサーバーまたはクラスターセットアップ）か、または既存の LiveCycle デプロイメントのアップグレードかに応じて、準備ガイドから始めて、インストールおよび設定ガイドに進むことをお勧めします。自動デプロイメント（評価目的のみ）の場合は、「[LiveCycle の自動インストールおよびデプロイ \(JBoss 版\)](#)」を参照してください。

1.1 このドキュメントの対象読者

このドキュメントは、LiveCycle コンポーネントのインストール、アップグレード、設定、管理またはデプロイを担当する管理者や開発者を対象にしています。このドキュメントで扱う内容は、J2EE アプリケーションサーバー、オペレーティングシステム、データベースサーバーおよび Web 環境に関する十分な知識がある読者を想定しています。

1.2 このガイドで使用する表記

LiveCycle のインストールおよび設定に関するドキュメントでは、共通のファイルパスについて次の命名規則を使用します。

名前	デフォルト値	説明
[LiveCycle root]	Windows : C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES4 Linux および Solaris : /opt/adobe/adobe_livecycle_es4	すべての LiveCycle モジュールで使用するインストールディレクトリ。インストールディレクトリには、LiveCycle Configuration Manager 用のサブディレクトリが含まれます。このディレクトリには、サードパーティ製品に関連したディレクトリも含まれます。
[appserver root]	Windows 上の WebLogic Server : C:\Oracle\Middleware\wlserver_<version>\ WebLogic Server (Linux および Solaris) : /opt/Oracle/Middleware/wlserver_<バージョン>/	LiveCycle に含まれるサービスを実行するアプリケーションサーバーのホームディレクトリ。
[server name]	Server1 (WebLogic Server の場合)	アプリケーションサーバーで設定されているサーバーの名前。
WL_HOME	WebLogic Server (Windows) : C:\Oracle\Middleware\ WebLogic Server (Linux および Solaris) : /opt/Oracle/Middleware/	WL_HOME 環境変数に指定されている、WebLogic Server のインストールディレクトリ。

名前	デフォルト値	説明
[appserverdomain]	WebLogic Server (Windows) : C:\Oracle\Middleware\user_projects\domains\base_domain\ WebLogic Server (Linux および UNIX) : /opt/Oracle/Middleware/user_projects/ domains/base_domain/	WebLogic Server で設定したドメイン。
[dbserver root]	データベースタイプとインストール時の設定によって異なります。	LiveCycle データベースサーバーがインストールされている場所。
[lc_temp_dir]	Windows の場合 : C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES4\tmp Linux、UNIX、AIX の場合 : /opt/adobe/adobe_lifecycle_es4/tmp	LiveCycle サーバーの一時ディレクトリ。
[CRX_home]	Windows の場合 : C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES4\crx-repository Linux、UNIX、AIX の場合 : /opt/adobe/adobe_lifecycle_es4/crx-repository	CRX レポジトリをインストールするために使用するディレクトリ。

このガイドに記述されているディレクトリの場所に関するほとんどの情報は、すべてのプラットフォームに当てはまります (Windows 以外のオペレーティングシステムでは、すべてのファイル名とパスにおいて大文字と小文字が区別されます)。プラットフォーム固有の情報は、必要に応じて特記します。

1.3 追加情報

次の表に、LiveCycle の詳細について参照できる情報を示します。

情報	参照先
LiveCycle およびモジュールに関する一般的な情報	LiveCycle の概要
LiveCycle モジュール	LiveCycle モジュール
LiveCycle に統合できる他のサービスや製品	Adobe Developer Connection
Adobe® LiveCycle® Workbench 11 のインストール	Adobe LiveCycle - Workbench 11 のインストール
LiveCycle のインストールの準備	LiveCycle のインストールの準備 (シングルサーバー)
LiveCycle ES4 のアップグレードのチェックリストと計画	LiveCycle ES4 のアップグレードのチェックリストと計画
LiveCycle のトラブルシューティング	LiveCycle のトラブルシューティング
LiveCycle の管理タスクの実行	LiveCycle 管理ヘルプ
LiveCycle に使用できるすべてのマニュアル	LiveCycle ドキュメント
現在のバージョンに関するパッチアップデート、テクニカルノート、および追加情報	アドビエンタープライズサポート

第2章：インストール、設定およびデプロイメントプロセスの概要

2.1 インストール、設定およびデプロイメントの概要

LiveCycle のインストール、設定およびデプロイには、次のプロセスが含まれます。

- **インストール**：インストールプログラムを実行して LiveCycle をインストールします。LiveCycle をインストールすると、必要なすべてのファイルが、使用するコンピューター上の 1 つのインストールディレクトリ構造内に配置されます。デフォルトのインストールディレクトリは C:\¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES4 (Windows) または /opt/adobe/adobe_lifecycle_es4 (Windows 以外) ですが、これ以外のディレクトリにファイルをインストールすることもできます。
- **設定**：LiveCycle の設定では、LiveCycle の動作方法を決定する様々な設定を変更します。製品のアセンブリでは、設定の指示に従って、すべてのインストール済みコンポーネントがデプロイ可能な EAR および JAR ファイルに配置されます。コンポーネントに対してデプロイメントのための設定とアセンブリを行うには、Configuration Manager を実行します。複数の LiveCycle モジュールに対して同時に設定およびアセンブリを行うこともできます。
- **デプロイ**：製品のデプロイでは、アセンブリされた複数の EAR ファイルといくつかの補助ファイルを、LiveCycle を実行する予定のアプリケーションサーバーにデプロイします。複数のモジュールを設定した場合は、デプロイ可能なコンポーネントがデプロイ可能な EAR ファイル内にパッケージ化されます。また、コンポーネントおよび LiveCycle アーカイブファイルは、JAR ファイルとしてパッケージ化されています。
注意：LiveCycle アーカイブファイルは、ファイル拡張子 .lca を使用します。
- **LiveCycle データベースの初期化**：LiveCycle で使用されるデータベースを初期化すると、User Management および他のコンポーネントで使用するためのテーブルが作成されます。LiveCycle データベースに接続するモジュールをデプロイする場合は、デプロイメントプロセスの完了後に LiveCycle データベースを初期化する必要があります。

LiveCycle のインストールと設定を開始する前に、該当する準備ガイドで説明されているように環境の準備が整っていることを確認します。

2.2 設定およびデプロイのためのタスクの選択

LiveCycle のインストール後は、Configuration Manager を実行して次のタスクを実行できます。

- アプリケーションサーバーまたはアプリケーションサーバーのクラスターにデプロイするために EAR ファイルの LiveCycle モジュールを設定
- LiveCycle をサポートするようにアプリケーションサーバーまたはアプリケーションサーバーのクラスターのプロパティを設定
- JDBC モジュールを LiveCycle EAR (保護されたデータソース) にパッケージ
- アプリケーションサーバーまたはクラスターの設定を検証
- LiveCycle EAR ファイルのデプロイ
- LiveCycle データベースの初期化
- LiveCycle コンポーネントのデプロイ
- LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証

- LiveCycle コンポーネントの設定

2.3 自動設定と手動設定の比較

アプリケーションサーバーまたはクラスターの設定およびデータベースに対するデータソースの設定は Configuration Manager を使用して実行できますが、これらの手順は、次の理由により手動で実行した方が望ましい場合もあります。

- アプリケーションサーバーまたはクラスターで他のアプリケーションを実行しており、設定が競合する可能性がある場合
- 設定管理に関する会社のセキュリティ手順により、より細かい制御が求められている場合
- 自動設定が使用できないデプロイメントの場合

手動で設定する場合は、次のタスクを実行します。

- Configuration Manager を使用して、LiveCycle コンポーネントを設定し、必要なフォント、一時ディレクトリおよび GDS ディレクトリを設定します。
- アプリケーションサーバーの設定、データソースの設定および LiveCycle EAR ファイルのデプロイを手動で行います。
- Configuration Manager を実行してデータベースを初期化します。
- Configuration Manager を実行して LiveCycle コンポーネントをデプロイし、LiveCycle コンポーネントのデプロイメントを検証します。
- LiveCycle コンポーネントを設定します。

2.4 LiveCycle のインストール、設定およびデプロイメントリスト

この節では、インストールおよび設定プロセスを進めていく際に使用できるリストを用意しました。インストールと設定のためのリストには、自動オプション用のものと手動オプション用のものがあります。

- **自動オプション**：Configuration Manager を使用して、アプリケーションサーバーの設定、LiveCycle EAR ファイルの設定とデプロイ、データベースの初期化、およびサーバーへのモジュールのデプロイを行う方法です。自動オプションは、LiveCycle のインストール、設定およびデプロイメントのための入力処理を少なくしたい場合に使用します。
- **手動オプション**：Configuration Manager を、LiveCycle EAR ファイルの設定、データベースの初期化、サーバーへのモジュールのデプロイだけに使用する方法です。アプリケーションサーバーの設定、データベースへの接続および LiveCycle EAR ファイルのサーバーへのデプロイは、このマニュアルで後述する手順に従って、管理者が手動で実行します。手動オプションは、LiveCycle のインストール、設定およびデプロイメントのために厳密な入力を行う場合に使用します。例えば、このオプションは、ロックダウンされたサーバー環境で使用できます。

2.4.1 自動インストールおよびデプロイメントリスト

次のリストに、自動オプションを使用して LiveCycle モジュールをインストールするために必要な手順を示します。インストールを実行する前に、アプリケーションサーバーまたはクラスターをインストールしておく必要があります。

- 必要なソフトウェアがインストール先の環境にあらかじめインストールされていることを確認します。該当する準備ガイドを http://www.adobe.com/go/learn_lc_documentation_11_jp から参照してください。
- インストールプログラムを実行します（『8 ページの「3.3 LiveCycle のインストール」』を参照）。
- Configuration Manager を実行し、タスク選択画面のすべてのタスクを選択します。LiveCycle EAR ファイルの設定、アプリケーションサーバーの設定、アプリケーションサーバーへの EAR ファイルおよびその他のコンポーネントのデプ

ロイ、LiveCycle データベースの初期化およびデプロイメントの検証が行われます (このガイドの「LiveCycle をデプロイするための設定」の章を参照)。

- 管理コンソールおよび User Management にアクセスします (20 ページの「[5.1.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス](#)」を参照)。
- (オプション) LDAP アクセスを設定します (39 ページの「[5.6 LDAP アクセスの設定](#)」を参照)。

2.4.2 手動インストールおよびデプロイメントリスト

次のリストに、手動オプションを使用して LiveCycle をインストールする場合に必要な手順を示します。インストールを実行する前に、アプリケーションサーバーまたはクラスターをインストールおよび設定しておく必要があります。

- 必要なソフトウェアがインストール先の環境にあらかじめインストールおよび設定されていることを確認します。
- インストール先の環境でアプリケーションサーバーが作成および設定されていることを確認します。
- インストールプログラムを実行します。
- Configuration Manager を実行し、「LiveCycle EAR を設定」タスクを選択します。このタスクで LiveCycle を設定します。
- アプリケーションサーバー設定を指定します。
- EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイします。これは、手動で行うか、Configuration Manager を使用して行うことができます。

注意：(クラスターのみ) クラスターのすべてのノードで、アプリケーションサーバーに EAR ファイルをデプロイしていることを確認します。EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイするときは、デプロイメント範囲がクラスターであることを確認してください。

- Configuration Manager を実行して、LiveCycle データベースを初期設定し、LiveCycle コンポーネントファイルをデプロイします。
- Administration Console および User Management にアクセスします。
- (オプション) LDAP アクセスを設定します。

第3章：LiveCycle モジュールのインストール

3.1 事前準備

3.1.1 インストールの概要

モジュールをインストールする前に、LiveCycle の実行に必要なソフトウェアとハードウェアが使用環境に含まれていることを確認してください。また、各インストールオプションについて理解し、必要に応じて環境を整えておく必要があります。詳しくは、インストールの準備（シングルサーバーまたはサーバークラスター）、アップグレードの準備に関する各ガイドを参照してください。LiveCycle のドキュメント一式は http://www.adobe.com/go/learn_lc_documentation_11_jp から入手できます。

LiveCycle には、インストールプログラム用にコマンドラインインターフェイス（CLI）も用意されています。CLI の使用に関する説明については、58 ページの「[付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール](#)」を参照してください。Configuration Manager 用の CLI もあります。61 ページの「[付録 - Configuration Manager コマンドラインインターフェイス](#)」を参照してください。これらの CLI は、LiveCycle の上級ユーザーが使用したり、インストールプログラムや Configuration Manager でグラフィカルユーザーインターフェイスがサポートされていないサーバー環境で使用したり、ユーザーがバッチ（非インタラクティブ）インストール機能を実装したりする場合を想定しています。

3.1.2 インストーラーの確認

インストールプロセスを開始する前に、インストーラーファイルについて、次のベストプラクティスを確認してください。

DVD インストールメディアの確認

入手したインストールメディアが破損していないことを確認します。LiveCycle をインストールするコンピューターのハードディスクにインストーラーのメディアコンテンツをコピーする場合は、必ず、すべての DVD コンテンツをハードディスクにコピーしてください。インストールエラーを避けるには、Windows のパスの最大長を超えるディレクトリパスに DVD インストールイメージをコピーしないでください。

インストールファイルのローカルコピーを使用するか DVD から直接 LiveCycle をインストールします。LiveCycle をネットワークを介してインストールすると、インストールが失敗する場合があります。また、ローカルパスに特殊文字（例えば、文字「#」）は使用しないでください。

ダウンロードしたファイルの確認

アドビの Web サイトからインストーラーをダウンロードした場合は、MD5 チェックサムを使用してインストーラーファイルの整合性を検証してください。次のいずれかを実行し、ダウンロードファイルの MD5 チェックサムを計算して、アドビのダウンロード用 Web ページで公開されているチェックサムと比較します。

- **Linux** : md5sum コマンドを実行します。
- **Solaris** : digest コマンドを実行します。
- **Windows** : WinMD5 などのツールを実行します。
- **AIX** : md5sum コマンドを実行します。

ダウンロードしたアーカイブファイルの展開

アドビの Web サイトから ESD をダウンロードした場合は、lces_server_11_0_0_weblogic_all_win.zip（Windows）または lces_server_11_0_0_weblogic_all_unix.tar.gz（Linux または Solaris）アーカイブファイル全体をコンピューターに展開します。Solaris の場合は、gunzip コマンドを使用して .gz ファイルを展開します。

注意: 元の ESD ファイルのディレクトリ階層は変更しないようにしてください。

3.2 インストールに関する考慮事項

3.2.1 インストールパス

正常にインストールするには、インストールディレクトリに対する読み取り、書き込みおよび実行権限が必要です。デフォルトのインストールディレクトリは以下のとおりですが、必要に応じて、別のディレクトリを指定することもできます。

- (Windows) C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES4
- (Linux または Solaris) /opt/adobe/adobe_lifecycle_es4

重要: LiveCycle をインストールするときに、インストールパスに 2 バイト文字または拡張ラテン文字 (åçéèëñöùÀÖÛ など) を使用しないでください。

モジュールを UNIX 系のシステムにインストールする際に、デフォルトのインストール先である /opt/adobe/adobe_lifecycle_es4 に正常にインストールするには、ルートユーザーでログインする必要があります。ルートユーザー以外でログインした場合は、権限 (読み取り、書き込み、実行権限) を持っている別のディレクトリにインストール先を変更してください。例えば、ディレクトリを /home/[username]/adobe/adobe_lifecycle_es4 に変更します。

注意: UNIX 系のシステムでは、ソース (インストールメディア) からファイルをコピーまたはダウンロードすると、install.bin で実行権限が失われる場合があります。ファイルをコピーまたはダウンロードした後で、書き込み、実行権限を復元してください。

Windows では、LiveCycle のインストールには管理者権限が必要です。

3.2.2 一時ディレクトリ

一時ファイルは、一時ディレクトリに生成されます。生成された一時ファイルが、インストーラーの終了後も残る場合があります。これらのファイルは手動で削除することができます。

Linux でのインストールでは、インストールプログラムにより、ログインしているユーザーのホームディレクトリがファイルを格納するための一時ディレクトリとして使用されます。そのため、次のようなメッセージがコンソールに表示される場合があります。

```
WARNING: could not delete temporary file /home/<username>/ismp001/1556006
```

インストールが完了したら、次のディレクトリから一時ファイルを手動で削除する必要があります。

- (Windows) 環境変数で設定されている TMP または TEMP パス
- (Linux または Solaris) ログインユーザーのホームディレクトリ

UNIX 系のシステムでは、root 以外のユーザーは次のディレクトリを一時ディレクトリとして使用できます。

- (Linux) /var/tmp or /usr/tmp
- (Solaris) /var/tmp または /usr/tmp

3.2.3 Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール

Linux または UNIX プラットフォームにデプロイするために、LiveCycle を Windows にインストールして設定することができます。この機能を使用して、ロックダウンされた Linux または UNIX 環境にインストールできます。ロックダウンされた環境にはグラフィカルユーザーインターフェイスはインストールされていません。Linux または UNIX プラットフォームの場合、インストールプログラムにより、Configuration Manager で製品を設定するために使用されるバイナリがインストールされます。

その後、Windows を実行するコンピューターを、デプロイ可能なオブジェクトのステージング場所として使用できます。これらのオブジェクトは、アプリケーションサーバーへのデプロイメント用に Linux または UNIX コンピューターにコピーできます。Windows ベースのコンピューター上のアプリケーションサーバーと、LiveCycle をインストールする Linux または UNIX ターゲットコンピューターは、同じである必要があります。

3.2.4 JAVA_HOME 環境変数の設定

JAVA_HOME 環境変数は、準備ガイドに説明されているように、アプリケーションサーバーの Java SDK を指している必要があります。詳しくは、『[LiveCycle のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』または『[LiveCycle のインストールの準備 \(サーバークラスター\)](#)』を参照してください。

3.2.5 インストールに関する一般的な注意

- Windows の場合は、インストール中にオンアクセスウイルススキャンソフトウェアを無効にすることにより、インストールに要する時間が短縮されます。
- UNIX 系のシステムにインストールするが、リリース DVD からは直接インストールしない場合は、インストールファイルに実行権限を設定します。
- デプロイメントの際に権限の問題を回避するため、アプリケーションサーバーを実行する場合と同じユーザーで、LiveCycle インストーラーおよび Configuration Manager を実行してください。
- UNIX 系コンピューターにインストールする場合は、指定するインストールディレクトリ名にスペースを含めないでください。
- インストール中にエラーが発生した場合は、install.log ファイルが作成され、エラーメッセージが記録されます。このログファイルは、[LiveCycle root]/log ディレクトリに作成されます。
- JAVA_HOME 環境変数が互換性のある JDK を含むディレクトリを指していることを確認します。詳しくは、[サポートされているプラットフォームの組み合わせ](#)を参照してください。

3.3 LiveCycle のインストール

1 インストールプログラムを起動します。

- (Windows) インストールメディア上、またはインストーラーをコピーしたハードディスク上のフォルダーの %server%\Disk1\InstData\Windows_64\VM ディレクトリに移動します。install.exe ファイルを右クリックし、「管理者として実行」を選択します。
- (Windows 以外) 適切なディレクトリに移動して、コマンドプロンプトで ./install.bin と入力します。
 - (Linux) /server/Disk1/InstData/Linux/NoVM
 - (Solaris) /server/Disk1/InstData/Solaris/NoVM

2 プロンプトが表示されたら、インストールプログラムで使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。

- 3 ようこそ画面で「次へ」をクリックします。
- 4 インストーラーを実行するコンピューターに、LiveCycle ES 2、ADEP、または LiveCycle ES3 の以前のバージョンがインストールされている場合は、アップグレードの準備画面が表示されます。

注意：新しいコンピューターでアウトオブプレースアップグレードを実行する場合は、この画面は表示されません。

 - **既存のインストールを Adobe LiveCycle ES4 にアップグレードする準備**
新規インストールを行う場合は、このオプションを選択しないでください。
 - **Adobe LiveCycle ES4 をインストール：**LiveCycle を新規にインストールします。「次へ」を選択して、続行します。
- 5 インストールフォルダーを選択画面で、デフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、「**選択**」をクリックして LiveCycle のインストール先ディレクトリを選択してから、「次へ」をクリックします。存在しないディレクトリの名前を入力すると、そのディレクトリが作成されます。

「デフォルトのフォルダーに戻す」をクリックすると、デフォルトのディレクトリパスに戻すことができます。
- 6 (**Windows のみ**) 手動インストールオプション画面で、目的のデプロイメントオプションを選択し、「次へ」をクリックします。
 - **Windows (ローカル)：**ローカルサーバーに LiveCycle をインストールおよびデプロイする場合は、このオプションを選択してください。
 - **リモート (下記のリモートオペレーティングシステムを対象とする)：**デプロイメント用のステージングプラットフォームとして Windows を使用する場合は、このオプションを選択します。その後で、リモートサーバー上のターゲットオペレーティングシステムを選択します。Windows 上でインストールを行っている場合でも、デプロイメント対象として UNIX オペレーティングシステムを選択できます (8 ページの「[3.2.3 Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール](#)」を参照)。

注意：保護されたデータソースが WebLogic で使用されている場合、adobe-livecycle-weblogic.ear ファイルは、リモートマシンにデプロイできません。詳しくは、この [Technote](#) を参照してください。
- 7 Adobe LiveCycle ES4 の使用許諾契約書を読み、「**同意します**」を選択して使用許諾契約書の条件に同意し、「次へ」をクリックします。使用許諾契約書に同意しない場合は、操作を継続することはできません。
- 8 プリインストールの概要画面で、詳細を確認して「**インストール**」をクリックします。インストールプログラムによりインストールの進行状況が表示されます。
- 9 リリースノートを確認して「次へ」をクリックします。
- 10 インストール完了画面の詳細情報を確認します。
- 11 「**LiveCycle Configuration Manager を起動**」チェックボックスはデフォルトで選択されています。「完了」をクリックして Configuration Manager を実行します。

注意： Configuration Manager を後で実行するには、「完了」をクリックする前に、「**LiveCycle Configuration Manager を起動**」オプションの選択を解除します。[LiveCycle root]/configurationManager/bin ディレクトリにある該当するスクリプトを使用して、Configuration Manager を後で起動することができます。このガイドの「LiveCycle をデプロイするための設定」の章を参照してください。

3.4 ログファイルの表示

インストール中にエラーが発生した場合は、ログファイルが作成され、エラーメッセージが記録されます。ログファイルは、[LiveCycle root]/log ディレクトリに作成されます。

3.5 次の手順

デプロイする LiveCycle を設定する必要があります。[LiveCycle root]¥configurationManager¥bin にある ConfigurationManager.bat ファイルまたは ConfigurationManager.sh ファイルを使用して、Configuration Manager を後で実行することもできます。

第 4 章：LiveCycle をデプロイするための設定

4.1 LiveCycle の設定およびデプロイにおける考慮事項

4.1.1 一般的な考慮事項

- IPv6 の場合は、IPv6 LiveCycle Configuration Manager を実行します。詳しくは、[インストール準備ガイド](#) の LiveCycle IPv6 サポートの項を参照してください。
- Configuration Manager のデフォルトのフォントを上書きできます。これを行うには、[LiveCycle root]¥ConfigurationManager¥Bin¥ConfigurationManager.bat (Windows) または [LiveCycle root]/ConfigurationManager/Bin/ConfigurationManager.sh (Linux、UNIX) に、次の JVM 引数を追加します。

```
-Dlcm.font.override=<FONT_FAMILY_NAME>
```

次に例を示します。

```
-Dlcm.font.override=SansSerif
```

JVM 引数を追加したら、Configuration Manager を再起動します。

- 設定中に、「Reset to Default」オプションを使用して Configuration Manager 内のデータをリセットする必要がある場合は、Configuration Manager を必ず再起動してください。再起動しない場合、一部の設定画面が表示されない場合があります。
- 設定では、データベースの JDBC ドライバーの場所を指定する必要があります。Oracle、SQL Server および DB2 のドライバは、[LiveCycle root]/lib/db/[database] ディレクトリにあります。
- グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリ：インストールの準備 (シングルサーバーまたはサーバークラスター) ガイドで説明されている要件を満たす GDS ディレクトリを指定してください。最新のドキュメントについては、http://www.adobe.com/go/learn_lc_documentation_11_jp を参照してください。

4.1.2 Configuration Manager の CLI バージョンと GUI バージョンの比較

この項では、Configuration Manager の GUI バージョンについて説明します。Configuration Manager のコマンドラインインターフェイス (CLI) バージョンの使用については、61 ページの「[付録 - Configuration Manager コマンドラインインターフェイス](#)」を参照してください。

LiveCycle の設定のタスク	Configuration Manager GUI	Configuration Manager CLI	手動
LiveCycle を設定	○	○	×
アプリケーションサーバーを設定 WebLogic および WebSphere アプリケーションサーバーのみが、Configuration Manager を使用して設定できます。	○	○	○
(WebLogic のみ) JDBC モジュールを LiveCycle EAR にパッケージ	○	×	○
アプリケーションサーバーの設定を検証 WebLogic および WebSphere アプリケーションサーバーのみが、Configuration Manager を使用して検証できます。	○	○	○

LiveCycle の設定のタスク	Configuration Manager GUI	Configuration Manager CLI	手動
LiveCycle EAR のデプロイ LiveCycle EAR は、WebLogic および WebSphere アプリケーションサーバーでのみ、Configuration Manager を使用してデプロイできます。	○	○	○
LiveCycle データベースの初期化	○	○	×
LiveCycle サーバー接続を検証	○	○	×
LiveCycle コンポーネントのデプロイ	○	○	×
LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証	○	○	○
LiveCycle コンポーネントの設定	○	○	○

4.1.3 WebLogic アプリケーションサーバーの考慮事項

- Configuration Manager を使用して、アプリケーションサーバーの設定またはアプリケーションサーバーへのデプロイを行う場合は、Configuration Manager を実行する前に、そのアプリケーションサーバーを手動で起動して実行しておく必要があります。別のコンピューターにインストールされているアプリケーションサーバーを設定することもできます。
- デュアルスタックマシン (IPV6 と IPV4 をサポート) 上で Configuration Manager を実行する前に、Administration Server、Node Manager および管理対象サーバーのリスンアドレスの割り当てが完了していることを確認します。この操作を行っていない場合は、リスンアドレスを割り当てた後、それぞれを再起動します。詳しくは、『LiveCycle のインストールの準備』ガイドの「WebLogic Server の設定」を参照してください。
- データソースを保護するには、「JDBC モジュールを LiveCycle EAR にパッケージ (データソースをセキュリティで保護)」を選択します。

注意: XML フォームを処理するために LiveCycle の実装が必要な場合は、このタスクを選択しないでください。代わりに、Technote (http://kb2.adobe.com/jp/cps/844/cpsid_84435.html) の手順を実行して、WebLogic アプリケーションサーバーの JNDI アーティファクトへのアクセスを保護します。

- Configuration Manager では、カスタムファイル名を持つ EAR ファイルのデプロイまたはデプロイ解除をサポートしていません。EAR ファイルがカスタムファイル名を使用している場合は、アプリケーションサーバーに対して手動でデプロイまたはデプロイ解除する必要があります。
- リモートアプリケーションサーバーを設定する場合は、そのアプリケーションサーバーのライブラリファイルを Configuration Manager で使用できるようにするために、Configuration Manager のコンピューターにもアプリケーションサーバーがインストールされていることを確認してください。

4.1.4 日付、時刻およびタイムゾーンの設定

LiveCycle 環境に接続するすべてのサーバーで正しい日付、時刻およびタイムゾーンを設定することで、時間に依存するモジュール (Adobe® LiveCycle® Digital Signatures 11 や Reader Extensions 11 など) が正常に機能するようになります。例えば、未来の時間に作成された署名は、有効になりません。

時間同期を必要とするサーバーは、データベースサーバー、LDAP サーバー、HTTP サーバーおよび J2EE サーバーです (アプリケーションサーバー)。

4.2 LiveCycle の事前設定タスク

注意： Configuration Manager の実行中に **F1** キーを押すと、現在表示されている画面に関するヘルプ情報が表示されます。「進行状況ログを表示」をクリックすると、いつでも設定の進行状況を確認できます。

- 1 インストールプログラムで Configuration Manager が自動的に起動しなかった場合は、**[LiveCycle root]/configurationManager/bin** ディレクトリに移動し、**ConfigurationManager.bat/sh** スクリプトを実行します。
- 2 プロンプトが表示されたら、Configuration Manager で使用する言語を選択して、「**OK**」をクリックします。
- 3 ようこそ画面で「**次へ**」をクリックします。
- 4 アップグレードタスクの選択画面では、どのオプションも選択しないで、「**次へ**」をクリックします。
- 5 モジュール画面で、設定する Adobe LiveCycle ES4 モジュールを選択し、「**次へ**」をクリックします。

注意： 適切な設定と機能のために、一部のモジュールは他のモジュールとのテクニカルな依存関係をもちます。相互依存するモジュールが選択されていない場合、Configuration Manager はダイアログを表示し、それより先の操作はできなくなります。例えば、Correspondence Management Solution を設定する際には、Adobe LiveCycle Forms、Adobe LiveCycle Output、コンテンツリポジトリモジュールを選択する必要があります。

- 6 タスク選択画面で、実行するすべてのタスクを選択し、「**次へ**」をクリックします。

4.3 LiveCycle の構成およびデプロイ

注意： Configuration Manager の実行中に **F1** キーを押すと、現在表示されている画面に関するヘルプ情報が表示されます。

LiveCycle の設定

- 1 LiveCycle ES4 を設定 (1/5) 画面で、「**設定**」をクリックし、完了後に「**次へ**」をクリックします。
- 2 LiveCycle ES4 を設定 (2/5) 画面で、「**次へ**」をクリックしてデフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、「**参照**」をクリックして LiveCycle がフォントへのアクセスに使用するディレクトリに移動して選択します。その後で「**次へ**」をクリックします。



この画面上の値を変更するには、「**設定を編集**」をクリックします。このボタンは、Configuration Manager を最初に実行したときには使用できませんが、2 回目およびそれ以降の実行では使用できるようになります。

- (オプション) 「**Adobe サーバーフォントディレクトリ**」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。
- 「**カスタマーフォントディレクトリ**」のデフォルトの場所を変更するには、「**参照**」をクリックするか、カスタマーフォントの新しい場所を指定します。

注意： アドビ システムズ社以外が提供しているフォントを使用するユーザーの権利は、それらのフォントを所有する会社が提供する使用許諾契約書に拘束されるもので、アドビソフトウェアを使用するための使用許諾契約書は適用されません。アドビ システムズ社以外が提供しているフォントをアドビソフトウェアで使用する前に、適用されるアドビ システムズ社以外の使用許諾契約書すべてに準拠していることを確認してください。特に、サーバー環境でフォントを使用する際は注意が必要です。

- (オプション) 「**システムフォントディレクトリ**」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。リストにさらにディレクトリを追加するには、「**追加**」をクリックします。
 - (オプション) FIPS を有効にするには、「**FIPS を有効にする**」を選択します。このオプションは、連邦情報処理規格 (FIPS) を適用する場合にのみ選択してください。
- 3 LiveCycle ES4 を設定 (3/5) 画面で、「**参照**」をクリックし、「**一時ディレクトリの場所**」を指定します。

注意：一時ディレクトリを指定しない場合は、システム設定のデフォルトの一時ディレクトリが使用されます。

- 4 LiveCycle ES4 を設定 (4/5) 画面で、「参照」をクリックして、グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリのパスを指定し、「次」をクリックします。

注意：GDS ディレクトリのフィールドを空白のままにすると、LiveCycle によって、アプリケーションサーバーのディレクトリツリーにあるデフォルトの場所にディレクトリが作成されます。設定手順の完了後、Administration Console / 設定 / コアシステム設定 / 設定からその場所にアクセスできます。

- 5 永続的なドキュメントストレージを設定 (5/5) 画面で、GDS ディレクトリのほかに、永続的なドキュメントストレージのオプションを選択します。次のいずれかを選択します。
 - **GDS を使用：**すべての永続的なドキュメントストレージにファイルシステムベースの GDS を使用します。このオプションでは、最高のパフォーマンスを実現し、ストレージの場所として GDS だけを使用します。
 - **データベースを使用：**永続的なドキュメントや長期間有効な成果物の保存に、LiveCycle データベースを使用します。ただし、ファイルシステムベースの GDS も必要です。データベースを使用することにより、バックアップと復元の手順が簡単になります。

「設定」をクリックし、LiveCycle EAR にこのディレクトリ情報を設定します。設定が完了したら、「次へ」をクリックします。

PDF Generator 用の Acrobat の設定

- ❖ Acrobat を LiveCycle PDF Generator に合わせて設定画面で、「設定」をクリックして、Adobe Acrobat および必要な環境設定を設定するスクリプトを実行します。完了したら「次へ」をクリックします。

注意：この画面では、Configuration Manager がローカルで実行されている場合にのみ、必要な設定が実行されます。Adobe Acrobat XI Pro が既にインストールされている必要があります。インストールされていないと、この手順は失敗します。

LiveCycle の設定の概要

- ❖ LiveCycle ES4 の概要を設定画面で、「次へ」をクリックします。設定したアーカイブは [LiveCycle root]/configurationManager/export ディレクトリに配置されます。

CRX の設定

- ❖ CRX 設定画面では、CRX レポジトリを設定し、それを LiveCycle Core EAR ファイルにインストールすることができます。この画面で、レポジトリへのパスを指定し、「設定」をクリックして、指定した場所に必要なレポジトリを作成します。レポジトリに対してカスタムパスを使用する場合は、ファイルシステムにすでにカスタムディレクトリが含まれていることを確認してください。

注意：(自動以外のみ) LiveCycle サーバーをリモートで実行している場合、「Server is running on remote host」を選択し、リモートホスト上のレポジトリへのパスを指定します。

「Next」をクリックして、続行します。

注意：パッケージが構成済みになると、Configuration Manager を再実行して削除することはできません。デプロイ済みパッケージをアンインストールするには、Package Manager を使用してアンインストールおよび削除する必要があります。

(リモートホストのみ) CRX 設定サマリー

- ❖ リモートでデプロイする場合は、[LiveCycle root]/configurationManager/export/crx-quickstart/ ディレクトリの内容を、CRX 設定画面で指定したリモートホストの場所へコピーします。

注意：クラスター化されたデプロイメントの場合、[LiveCycle root]/configurationManager/export/crx-quickstart/ ディレクトリの内容を、すべてのクラスターノードホスト上の指定した場所にコピーする必要があります。

アプリケーションサーバーおよびデータベースの設定

- 1 アプリケーションサーバーの設定の詳細画面で、各フィールドの情報を指定して (すべてのフィールドが必須です)、「**サーバー接続を検証**」をクリックします。検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注意: Administration Server および管理対象サーバーのリスンアドレスは、Weblogic Administration Console で指定された値に一致する必要があります。

注意: WebLogic アプリケーションサーバーのサーバーインスタンス名には完全修飾ホスト名を入力する必要があります。ホスト名では大文字と小文字が区別されます。デフォルト値の localhost では動作しません。

- 2 アプリケーションサーバーの設定の選択画面で、Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「次へ」をクリックします。
- 3 サーバー設定の設定画面 (「サーバー設定を設定」を選択した場合のみ表示) で、フィールドの情報を入力し、「次へ」をクリックします。

注意: LCM では、-Dadobe.cache.multicast-address 引数および -Dadobe.cache.bind-address jvm 引数を設定しません。場合によっては、これらの引数を手動で設定する必要があります。詳しくは、サーバーの開始引数の設定を参照してください。

- 4 データソース JDBC ドライバーのクラスパスを設定画面 (「パッケージ化された JDBC モジュール」を指定して「データソースを設定」オプションを選択した場合のみ表示) で、JDBC ドライバーのパスを入力し、「次へ」をクリックします。
- 5 データソース設定画面 (グローバルスコープのデータソースを指定して「データソースを設定」オプションを選択した場合のみ表示) で、フィールドの情報を指定し、「**データベース接続をテスト**」をクリックします。接続のテストが正常に終了したら、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、F1 キーを押してください。

データソースは、Configuration Manager で自動的に設定する代わりに、手動で設定することもできます。自動データソース設定を上書きするには、画面の下で「**続行する前に今すぐ手動でデータソースを設定してください**」を選択します。

Configuration Manager を実行したまま、アプリケーションサーバーの管理コンソールにアクセスし、『LiveCycle のインストールおよびデプロイ (WebLogic 版)』ガイドの「80 ページの「[9.6 データベース接続の設定](#)」の説明に従ってデータソースを設定します。

- 6 アプリケーションサーバーの設定画面で、「**設定**」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。
- 7 JDBC モジュールを LiveCycle EAR にパッケージ (1/2) 画面 (「パッケージされた JDBC モジュール」オプションを指定して「データソースを設定」を選択した場合のみ表示) で、JDBC 設定の詳細情報を指定して、「**データベース接続をテスト**」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 8 JDBC モジュールを LiveCycle EAR にパッケージ (2/2) 画面 (「パッケージされた JDBC モジュール」オプションを指定して「データソースを設定」を選択した場合のみ表示) で、WebLogic 用の暗号化されたデータベースパスワードを生成するための詳細情報を指定します。次のいずれかのオプションを使用します。

既存の WebLogic で暗号化されたパスワードを使用 データベース用に暗号化されたパスワードが既にある場合は、このオプションを選択します。WebLogic の暗号化ユーティリティを使用して、データベース接続のテスト用に前の画面で入力したパスワードを暗号化することができます。

WebLogic で暗号化されたパスワードを生成 データベース用に暗号化されたパスワードを生成し、必要な詳細を指定する場合は、このオプションを選択します。データベース接続のテスト用に前の画面で入力したプレーンテキストのパスワードが、「パスワード」フィールドに自動的に入力されます。「**パスワードを暗号化**」をクリックして、暗号化されたデータベースパスワードを生成します。

重要: これは、WebLogic アプリケーションサーバーによって暗号化されたデータベースパスワードであり、アプリケーションサーバーのパスワードではありません。

「設定」をクリックして、JDBC モジュールを LiveCycle EAR にパッケージし、完了したら、「次へ」をクリックします。

- 9 アプリケーションサーバーの設定の検証画面で、検証するタスクを選択し、「検証」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：JDBC モジュールが LiveCycle EAR ファイルにパッケージされていると、**Configuration Manager** によって、アプリケーションサーバーの設定の検証中にデータソースの検証に失敗したことが報告されます。このメッセージは無視できます。

注意：グローバル範囲のデータソースを使用している場合は、データソースの検証に失敗する場合があります。この場合は、WebLogic サーバーを再起動し、データソースを再び検証してください。

インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイルの選択

- ❖ (Forms、Output、Mobile Forms、および Assembler のみ) LiveCycle ES4 インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイル画面では、サービス用の 3 つのサンプルアプリケーションをインストールできます。これらのサンプルファイルをインストールするには、「**IVS EAR をデプロイメントセットに含めます**」を選択し、「次へ」をクリックします。

EAR ファイルが表示されます (モジュール画面で各モジュールを選択した場合のみ)。

注意：IVS EAR ファイルは実稼働環境にデプロイしないでください。

LiveCycle EAR のデプロイ

- ❖ LiveCycle ES4 EAR をデプロイ画面で、デプロイする EAR ファイルを選択し、「デプロイ」をクリックします。デプロイには数分かかる場合があります。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：この手順の後で、必ず、管理対象サーバー、ノードマネージャー、管理サーバーを停止し、この逆の順序でそれらを起動してください。再起動した後、adobe という名前のディレクトリが [appserverdomain] に作成されていることを確認します。このことは、実行時の問題を引き起こす可能性のある [appserverdomain]/null ディレクトリが作成されないようにするために必要です。[appserverdomain]/null ディレクトリが作成された場合は、削除してください。

LiveCycle データベースの初期化

- 1 LiveCycle ES4 データベースの初期化画面で、アプリケーションサーバーに指定したホスト名とポート番号が正しいことを確認してから、「初期化」をクリックします。データベースの初期化タスクによって、データベースにテーブルが作成され、デフォルトのデータがテーブルに追加されて、データベースに基本的なロールが作成されます。初期化が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。指示があったら、アプリケーションサーバーを手動で再起動します。

- 2 LiveCycle ES4 情報画面で、「LiveCycle ES4 ユーザー ID」と「パスワード」(デフォルト値はそれぞれ、administrator と password) を入力します。

「サーバー接続を検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：この画面に表示されるサーバー情報はデプロイメントの既定値です。

サーバー接続の検証は、デプロイメントや検証でエラーが発生した場合に、トラブルシューティングの対象を絞り込むのに役立ちます。接続テストが正常に終了しても以降の段階でデプロイメントや検証のエラーが発生する場合は、接続の問題をトラブルシューティングのプロセスから除外できます。

Central Migration Bridge Service のデプロイ

- ❖ Central Migration Bridge Service デプロイメント設定画面が表示される場合は、この画面で「**Central Migration Bridge Service をデプロイメントに含める**」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。

LiveCycle コンポーネントのデプロイ

- 1 LiveCycle ES4 コンポーネントのデプロイメント画面で、「デプロイ」をクリックします。ここでデプロイされるコンポーネントは、サービスのデプロイ、統合および実行を目的として LiveCycle に含まれるサービスコンテナにプラグイン

ンされている Java アーカイブファイルです。デプロイメントの進行状況を確認するには、「**進行状況ログを表示**」をクリックします。デプロイメントが正常に完了したら、「**次へ**」をクリックします。

- 2 LiveCycle ES4 コンポーネントのデプロイメントの検証画面で、「**検証**」をクリックします。検証の進行状況を確認するには、「**進行状況ログを表示**」をクリックします。検証が正常に完了したら、「**次へ**」をクリックします。

LiveCycle コンポーネントの設定

- ❖ LiveCycle コンポーネントを設定画面で、Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「**次へ**」をクリックします。

LiveCycle サーバー JNDI 情報

- ❖ LiveCycle サーバー JNDI 情報画面で、JNDI サーバーのホスト名およびポート番号を入力します。「**サーバー接続を検証**」をクリックし、Configuration Manager が JNDI サーバーに接続できることを確認します。「**次へ**」をクリックして、続行します。

Adobe® LiveCycle® 11 Connector for EMC® Documentum® の設定

注意: リモート LiveCycle デプロイメントの場合は、Configuration Manager を使って EMC ドキュメンタムのコネクターを設定することはできません。

- 1 EMC Documentum のクライアントを指定画面で、「**Connector for EMC Documentum コンテンツサーバーを設定します**」を選択して、次の情報を指定します。詳細情報を入力して、「**確認**」をクリックし、完了したら、「**次へ**」をクリックして次に進みます。

- **EMC Documentum クライアントバージョンを選択:** EMC Documentum コンテンツサーバーで使用するクライアントバージョンを選択します。
- **EMC Documentum クライアントのインストールディレクトリのパス:**「**参照**」をクリックしてディレクトリパスを選択します。

注意: Documentum 6.7 については手動で設定してください。LCM では Documentum 6.7 はサポートされません。

- 2 EMC Documentum Content Server 設定を指定画面で、EMC Documentum Server の詳細情報を入力し、「**次へ**」をクリックします。入力する必要がある情報について詳しくは、F1 キーを押してください。
- 3 Connector for EMC Documentum を設定画面で、「**Documentum Connector を設定**」をクリックします。完了したら、「**次へ**」をクリックします。
- 4 Connector for EMC Documentum に必要な手動設定画面で、一覧の手動による手順を確認および実行し、「**次へ**」をクリックします。

Adobe® LiveCycle® 11 Connector for IBM® Content Manager の設定

注意: リモート LiveCycle デプロイメントの場合は、Configuration Manager を使って IBM Content Manager のコネクターを設定することはできません。

- 1 IBM Content Manager のクライアントを指定画面で、「**Connector for IBM Content Manager を設定**」を選択し、「**IBM Content Manager クライアントのインストールディレクトリのパス**」を入力します。「**確認**」をクリックし、完了したら、「**次へ**」をクリックして次に進みます。
- 2 IBM Content Manager サーバーの設定を指定画面で、IBM Content Manager Server の詳細情報を入力し、「**次へ**」をクリックします。
- 3 Connector for IBM Content Manager を設定画面で「**IBM Content Manager Connector を設定**」をクリックします。完了したら、「**次へ**」をクリックします。

- 4 Connector for IBM Content Manager に必要な手動設定画面で、一覧の手動による手順を確認および実行し、「次へ」をクリックします。

Adobe® LiveCycle® 11 Connector for IBM® FileNet の設定

注意：リモート LiveCycle デプロイメントの場合は、Configuration Manager を使って IBM FileNet のコネクタを設定することはできません。

- 1 IBM FileNet のクライアントを指定画面で、「IBM FileNet のクライアントを指定」を選択し、次の設定を指定します。
 - **IBM FileNet クライアントのバージョンを選択：**IBM FileNet Content Server で使用するクライアントバージョンを選択します。
 - **IBM FileNet クライアントのインストールディレクトリのパス：**「参照」をクリックしてディレクトリパスを選択します。

注意：IBM FileNet クライアントを含むディレクトリ名に、ハイフン (-)、下線 (_)、カンマ (,)、ドット (.) などの特殊文字がある場合は、IBM FileNet の検証に失敗する場合があります。

「確認」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
- 2 IBM FileNet Content Server の設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
- 3 IBM FileNet Process Engine のクライアントを指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「確認」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 4 IBM FileNet Process Engine サーバーの設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
- 5 Connector for IBM FileNet を設定画面で、「FileNet Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 6 Connector for IBM FileNet に必要な手動設定画面で、一覧の手動による手順を確認および実行し、「次へ」をクリックします。

注意：jass.conf.WSI ファイルへのパスに空白が含まれていると、サーバーは開始できません。この場合は、このファイルを別の場所にコピーして、パスに空白が含まれないようにしてください。

Adobe® LiveCycle® 11 Connector for Microsoft® SharePoint® の設定

注意：リモート LiveCycle デプロイメントの場合は、Configuration Manager を使って Microsoft SharePoint のコネクタを設定することはできません。

Adobe LiveCycle ES4 Connector for Microsoft SharePoint を設定画面で、次のいずれかのタスクを実行します。

- 後で Microsoft Sharepoint を手動設定するには、「Adobe LiveCycle ES4 Connector for Microsoft SharePoint を設定」オプションの選択を解除し、「次へ」をクリックします。
- 「Adobe LiveCycle ES4 Connector for Microsoft SharePoint を設定」オプションを選択したままにします。必要な値を入力し、「SharePoint Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：Administration Console を使用して後で Connector for Microsoft SharePoint を設定する場合は、この手順をスキップできます。

ネイティブファイル変換のための LiveCycle サーバーの設定

- ❖ (PDF Generator のみ) PDF のネイティブ変換に必要な管理者のユーザー資格情報画面で、サーバーコンピューターの管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力して、「ユーザーを追加」をクリックします。

注意：Windows Server 2008 の場合は、管理ユーザーを 1 人以上追加する必要があります。Windows Server 2008 では、追加するユーザーのユーザーアカウント制御 (UAC) を無効にする必要があります。UAC を無効にするには、**コントロールパネル/ユーザーアカウント/ユーザーアカウント制御の有効化または無効化**を順にクリックし、「ユーザーアカウント制御 (UAC) を使ってコンピューターの保護に役立たせる」の選択を解除し、「**OK**」をクリックします。変更を適用するには、コンピューターを再起動します。

PDF Generator の System Readiness Test

- ❖ **Document Services PDF Generator System Readiness Test** 画面で、「**開始**」をクリックして、システムが適切に PDF Generator を設定しているかを検証します。System Readiness Tool レポートを確認し、「**次へ**」をクリックします。LiveCycle がリモートマシンにデプロイされている場合は、System Readiness Test が失敗します。

Reader Extensions の設定

- ❖ LiveCycle Reader Extensions の秘密鍵証明書の設定画面で、モジュールサービスをアクティブにする Reader Extensions 秘密鍵証明書に関連付けられている以下の詳細を指定します。

注意：「**Administration Console を使用して後から設定**」を選択して、さしあたり、この手順をスキップすることもできます。デプロイメントを完了した後で、Administration Console を使用して Reader Extensions 秘密鍵証明書を設定できます (Administration Console にログインしたら、**ホーム/設定/Trust Store の管理/ローカル秘密鍵証明書**をクリックします)。

「**設定**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。

サマリー、および次の手順

- ❖ Configuration Manager のタスクの概要リストを確認し、適切なオプションを選択します。
 - 「次の手順を開始」を選択して、LiveCycle ユーザーと管理インターフェイスに関する情報を表示し、LiveCycle の起動と使用に関する手順を説明した html ページを開きます。
- 「**完了**」をクリックして Configuration Manager を終了します。

第5章：デプロイメント後のタスク

5.1 一般的なタスク

5.1.1 システムイメージバックアップの実行

実稼働環境に LiveCycle をインストールおよびデプロイした後、このシステムを稼働する前に、LiveCycle を実装したサーバーのシステムイメージバックアップを実行することをお勧めします。CRX レポジトリのバックアップもとってください。

このバックアップには、LiveCycle のデータベース、GDS ディレクトリおよびアプリケーションサーバーを含める必要があります。これは、ハードドライブまたはコンピューター全体が動作しなくなった場合に、コンピューターの内容の復元に使用できる完全なシステムバックアップです。[管理ヘルプ](#)の「LiveCycle のバックアップと回復」トピックを参照してください。

5.1.2 アプリケーションサーバーの再起動

LiveCycle を初めてデプロイする際、サーバーはデプロイメントモードになっています。このモードでは、ほとんどのモジュールがメモリ内に置かれます。このため、メモリの消費量が大きく、サーバーは実稼働に適した状態ではありません。アプリケーションサーバーを再起動して、サーバーをクリーンな状態に戻す必要があります。

5.1.3 デプロイメントの確認

Administration Console にログインして、デプロイメントを確認できます。正常にログインできる場合は、LiveCycle がアプリケーションサーバーで実行されており、データベースにデフォルトのユーザーが作成されています。CRX レポジトリデプロイメントを検証するには、CRX ようこそページにアクセスします。

アプリケーションサーバーのログファイルを確認して、コンポーネントが正しくデプロイされたことを確認したり、発生する可能性のあるデプロイメントの問題の原因を特定したりすることができます。

5.1.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス

Administration Console は、LiveCycle の各種の設定ページにアクセスするための Web ベースのポータルです。これらの設定ページでは、LiveCycle ES3 の動作を制御する実行時プロパティを設定できます。Administration Console にログインすると、User Management、監視フォルダー、電子メールクライアント設定および他のサービスの管理設定オプションにアクセスできます。また、Administration Console では「アプリケーションおよびサービス」にアクセスすることもできます。これは、管理者がアーカイブの管理や、実稼働環境へのサービスのデプロイに使用します。

ログインする場合のデフォルトのユーザー名とパスワードは、それぞれ administrator と password です。初回のログイン後は、User Management にアクセスしてパスワードを変更してください。

Administration Console にアクセスするには、デプロイ済みの LiveCycle がアプリケーションサーバー上で実行されている必要があります。

Administration Console の使用方法については、[管理ヘルプ](#)を参照してください。

1 Web ブラウザーに次の URL を入力します。

```
http://[hostname]:[port]/adminui
```

例：http://localhost:8001/adminui

注意：WebLogic Server のデフォルトポート番号は 7001 です。新しい管理対象サーバーを作成した場合は、別のポートが設定されている可能性があります。管理対象サーバーはデフォルトのポートである 8001 を使用します。

- 2 LiveCycle にアップグレードした場合、以前の LiveCycle インストールと同じ管理者ユーザー名およびパスワードを入力します。新規インストールの場合は、デフォルトのユーザー名とパスワードを入力します。
- 3 ログイン後、「サービス」をクリックして、サービスの管理ページにアクセスするか、「設定」をクリックして、様々なモジュールの設定を管理できるページにアクセスします。

5.1.3.2 LiveCycle 管理者のデフォルトパスワードの変更

LiveCycle では、インストール時に 1 つ以上のデフォルトのユーザーが作成されます。これらのユーザーのパスワードは製品資料に記載され、公開されています。セキュリティ要件に応じて、このデフォルトのパスワードを変更する必要があります。

LiveCycle 管理者のユーザーパスワードは、デフォルトで「password」に設定されています。Administration Console / 設定 / User Management でパスワードを変更してください。

CRX 管理者のデフォルトパスワードの変更もお勧めします。

詳細については、デフォルト管理者パスワードの変更を参照してください。

5.1.3.3 CQ ようこそページへのアクセス

CQ ようこそページは、さまざまな CQ コンポーネント、管理、デプロイメント、開発ツールにアクセスするための Web ベースのポータルです。ログイン用のデフォルトのユーザー名とパスワードは、administrator と password です (LiveCycle 管理者と同じです)。

次の手順を使用してようこそページにアクセスします。

- 1 Web ブラウザーに次の URL を入力します。

`http://[ホスト名]:[ポート]/lc/welcome`

- 2 上記の管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
- 3 ログインすると、さまざまなコンポーネント、管理、デプロイメント、開発ユーザーインターフェイスにアクセスできます。

5.1.3.4 OSGi Management Console へのアクセス

CQ では、コンポーネントは OSGi バンドルの形式で、Apache Felix OSGi コンテナにデプロイされています。OSGi コンソールは、OSGi バンドルとサービス設定を管理するための手段を提供します。ログイン用のデフォルトのユーザー名とパスワードは、admin と ad,om です (CRX 管理者と同じです)。

次の手順お Windows 使用して OSGi 管理コンソールにアクセスします。

- 1 Web ブラウザーに次の URL を入力します。

`http://[ホスト名]:[ポート]/lc/system/console`

- 2 上記と同じ管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
- 3 ログインすると、さまざまなコンポーネント、サービス、バンドル、その他の設定にアクセスできます。

5.1.3.5 CQ 管理者のデフォルトパスワードの変更

LiveCycle 内に埋め込まれている CQ は、前述のような 2 人の管理者ユーザーを持っています。

- **スーパー管理者 (administrator):** スーパー管理者ユーザーはさまざまな CQ/CRX ユーザーインターフェイスにアクセスでき、admin 操作を実行できます。デフォルトのユーザー名とパスワードは、LiveCycle 管理者と同じ **administrator/password** です。このユーザーは OSGi Management Console へのアクセスを持っていません。このユーザーのデフォルトパスワードは、「デフォルト LiveCycle パスワードの変更」の項で述べたように、LiveCycle 管理者コンソールを使用してのみ変更できます。変更されたパスワードは、LiveCycle と CQ の両方に適用されます。

- 管理者 (admin): このユーザーは、CQ/CRX ユーザーインターフェイスのほかに OSGi コンソールにもアクセスでき、管理者特権を持っています。ユーザーのデフォルトのユーザー名とパスワードは、**admin/admin** です。デフォルトのパスワードを変更するには、以下の手順に従います。

1 Web ブラウザーに次の URL を入力します。

`http://[ホスト名]:[ポート]/lc/libs/granite/security/content/admin.html`

2 次の資格情報を使ってログインします。

ユーザー名: admin

パスワード: admin

3 ユーザー **Administrator** を検索します。

4 左メインでこのユーザーをクリックすると、ユーザーの詳細が右ペインに表示されます。

5 右ペインで**編集**アイコンをクリックします。

6 右ペインの編集ペインで、「**新しいパスワード**」フィールドに新しいパスワードを、「**パスワード**」フィールドに現在のパスワードを入力します。

7 右ペインで**保存**アイコンをクリックします。

8 変更したパスワードを使って再びログインし、検証します。

5.1.3.6 ログファイルの表示

実行時や起動時のエラーなどのイベントは、アプリケーションサーバーのログファイルに記録されます。アプリケーションサーバーへのデプロイ中に何らかの問題が発生した場合には、ログファイルを参照して問題を見つけることができます。ログファイルは、テキストエディターを使用して開くことができます。

次のログファイルが `[appserverdomain]/servers/[managed server name]/logs` ディレクトリにあります。

- `- [managed server name].log`
- `- [managed server name].out`

次の CRX ログファイルは `[CRX_home]/` にあります。

- `error.log`
- `audit.log`
- `access.log`
- `request.log`
- `update.log`

5.2 モジュールの Web アプリケーションへのアクセス

LiveCycle のデプロイ後は、次のモジュールに関連付けられた Web アプリケーションにアクセスできます。

- Reader Extensions
- Adobe® LiveCycle® Workspace 11
- HTML ワークスペース
- ユーザー管理
- コレスポンド管理

- PDF Generator Web アプリケーション
- Adobe® LiveCycle® PDF Generator 11
- Adobe® LiveCycle® Rights Management 11

デフォルトの管理者権限を使用して Web アプリケーションにアクセスし、そのアプリケーションにアクセス可能であることを確認したら、他のユーザーがログインしてアプリケーションを使用できるように追加のユーザーとロールを作成できます (管理ヘルプを参照)。

5.2.1 Reader Extensions Web アプリケーションへのアクセス

注意： Reader Extensions 秘密鍵証明書を適用して、新しいユーザーのユーザーロールを適用する必要があります (LiveCycle 管理ヘルプの「秘密鍵証明書を Reader Extensions で使用するための設定」を参照)。

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[hostname]:[port]/ReaderExtensions`

注意： WebLogic の場合、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

- 2 LiveCycle のユーザー名とパスワードを使用してログインします。

注意： ログインするには、管理者またはスーパーユーザーの権限が必要です。他のユーザーが Reader Extensions Web アプリケーションにアクセスできるようにするには、User Management でユーザーを作成し、そのユーザーに Reader Extensions Web アプリケーションロールを付与する必要があります。

5.2.2 Workspace へのアクセス

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[hostname]:[port]/workspace`

注意： WebLogic の場合、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

- 2 LiveCycle のユーザー名とパスワードを使用してログインします。

5.2.3 HTML ワークスペースへのアクセス

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[ホスト名]:[ポート]/lc/ws`

注意： WebLogic の場合、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

- 2 LiveCycle のユーザー名とパスワードを使用してログインします。

5.2.4 フォームマネージャーへのアクセス

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[ホスト名]:[ポート]/lc/fm`

注意： WebLogic の場合、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

- 2 LiveCycle のユーザー名とパスワードを使用してログインします。

5.2.5 PDF Generator Web アプリケーションへのアクセス

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[ホスト名]:[ポート]/pdfgui`

注意： WebLogic の場合、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

- 2 LiveCycle のユーザー名とパスワードを使用してログインします。

5.2.6 Rights Management へのアクセス

User Management で Rights Management End User ロールのユーザーを作成し、そのユーザーに関連付けられたログイン情報を使用して Rights Management の管理者またはエンドユーザーアプリケーションにログインする必要があります。

注意： デフォルトの管理者ユーザーは、Rights Management エンドユーザー Web アプリケーションにはアクセスできません。ただし、このユーザーのプロファイルに必要なロールを追加できます。新しいユーザーを作成したり、既存のユーザーを修正したりするには、Administration Console を使用します。

Rights Management エンドユーザー Web アプリケーションへのアクセス

- ❖ Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[hostname]:[port]/edc`

注意： WebLogic の場合、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

Rights Management 管理 Web アプリケーションへのアクセス

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[hostname]:[port]/adminui`

注意： WebLogic の場合、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

- 2 サービス / LiveCycle Rights Management 11 をクリックします。

ユーザーおよびロールの設定について詳しくは、管理ヘルプを参照してください。

Rights Management End User ロールのアサイン

- 1 Administration Console にログインします (「20 ページの「5.1.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」」を参照)。
- 2 **設定 / User Management / ユーザーとグループ** をクリックします。
- 3 「キーワード」ボックスに all と入力し、**条件 2** リストで「**グループ**」を選択します。
- 4 「**検索**」をクリックし、該当するドメインについて、表示されるリストの「**すべてのプリンシパル**」をクリックします。
- 5 「**ロールアサイン**」タブをクリックし、「**ロールを検索**」をクリックします。
- 6 ロールのリストで、「**Rights Management End User**」の横にあるチェックボックスを選択します。
- 7 「**OK**」をクリックし、「**保存**」をクリックします。

5.2.7 User Management へのアクセス

User Management を使用すると、管理者は 1 つまたは複数のサードパーティユーザーディレクトリに同期するすべてのユーザーおよびグループのデータベースを管理できます。User Management には、Reader Extensions、Workspace、Rights Management、Adobe® LiveCycle® Process Management 11、Adobe® LiveCycle® Forms Standard 11、PDF Generator などの LiveCycle モジュールの認証、権限付与およびユーザー管理の機能があります。

- 1 Administration Console にログインします。
- 2 ホームページで、**設定 / User Management** をクリックします。

注意：User Management でのユーザー設定について詳しくは、User Management ページの右上隅にある「**User Management ヘルプ**」をクリックしてください。

5.2.8 Correspondence Management Solution テンプレートへのアクセス

http://[ホスト名]:[ポート]/lc/cm に行って LiveCycle 管理者資格情報を使ってログインすることで、Correspondence Management Solution デプロイメントを検証できます。ソリューションテンプレートは、Correspondence Management Solution の参照実装です。

注意：非自動のデプロイメントでは、ソリューションテンプレートにアクセスしたときにエラーが発生した場合は、LiveCycle と Correspondence Management Solution を統合する必要があります。詳細については、このドキュメントの「**パブリッシュノードを設定して LiveCycle と統合する**」の項を参照してください。

5.3 Correspondence Management Solution の設定

次のタスクを実行して Correspondence Management Solution を設定します。

Correspondence Management Solution の推奨設定については、Correspondence Management Solution トポロジーを参照してください。

5.3.1 作成者インスタンスの設定

作成者インスタンスは LiveCycle サーバー内に埋め込まれています。このことは、作成者インスタンスに対して設定アップデートをまったく行う必要がないことを意味しています。このインスタンスは、LiveCycle サーバーからすべての構成設定を継承します。

5.3.2 発行インスタンスの設定

Correspondence Management Solution では、個別の作成者インスタンスと発行インスタンスを実行する必要があります。ただし、この 2 つのインスタンスは、同じマシンに設定することも、それぞれ別のマシンに設定することもできます。作成者インスタンスは、LiveCycle コアアプリケーション内に埋め込まれており、LiveCycle サーバー上で実行します。発行インスタンスの場合は、LCM が発行者 EAR (adobe-livecycle-cq-publish.ear) を設定します。別のサーバーインスタンスに発行 EAR をデプロイします。

注意：発行インスタンスを設定する前に、作成者インスタンスが設定およびデプロイ済みであることを確認します。Correspondence Management Solution 用のソリューションテンプレートにログインできれば、これを確認できたこととなります。詳細については、このドキュメントの「**Correspondence Management Solution テンプレートへのアクセス**」の項を参照してください。

- 1 新しいサーバーインスタンスを別の Weblogic ドメインに作成します。
- 2 作成者インスタンスで、**[LiveCycle root]/configurationManager/export/** ディレクトリに移動します。

- 3 [LiveCycle ルート]/configurationManager/export/crx-repository ディレクトリを発行インスタンスマシンにコピーします。
- 4 発行インスタンスマシン上の crx-repository ディレクトリの場所に行きます。crx-repository/install フォルダーを開きます。次のパッケージを残して、その他すべてのパッケージをインストールフォルダーから削除します。
 - dataservices-pkg.zip
 - platform-common-pkg.zip
 - platform-content-pkg.zip
 - platform-security-pkg.zip
 - solution-correspondencemanagement-pkg.zip

- 5 -Dcom.adobe.livecycle.crx.home=<location for crx-repository> パラメーターを使用して、発行サーバーを起動します。ここで、<location for crx-repository> は発行インスタンス用の crx-repository ディレクトリのコピー元の場所です。

WebSphere および WebLogic のための汎用 JVM 引数を設定する方法については、[WebSphere](#) および [WebLogic](#) の、[JVM 引数の設定](#)の項を参照してください。

- 6 adobe-livecycle-cq-publish.ear をサーバーにデプロイします。

注意：同じコンピューター上に作成者インスタンスと発行インスタンスが両方ある場合には、発行インスタンスを起動する際に必ず別のポートを使用するようにしてください。

発行インスタンスを起動して実行したら、2つのインスタンスが互いに通信できるように設定する必要があります。

5.3.3 発行ノードの「LiveCycle に統合」への設定

すべての発行インスタンスに対して次の手順を実行します。発行インスタンスと LiveCycle サーバーとの間の通信を有効にするには、次の操作を実行します。

- 1 `http://[発行ホスト]:[発行ポート]/lc/system/console/configMgr` に行き、OSGi Management Console ユーザー資格情報を使ってログインします。デフォルトの資格情報は `admin/admin` です。
- 2 「**Adobe LiveCycle Client SDK Configuration**」設定の横にある「**編集**」アイコンをクリックします。
- 3 サーバー URL フィールドで、`http://[lc ホスト]:[lc ポート]` が指定されていることを確認します。

重要：LiveCycle サーバーが、指定されたホストとポートの組み合わせでリスンしていることを確認してください。LiveCycle サーバークラスターの場合、次の3つのシナリオが可能です。

- すべての LiveCycle サーバーインスタンスが **localhost** と同じポート上で実行している。この場合は、**localhost:[ポート]** を使用します。
- すべての LiveCycle サーバーインスタンスが **localhost** の異なるポート上で実行している。この場合は、ロードバランサーホスト名とポートの組み合わせ、すなわち `[ロードバランサーホスト]:[ロードバランサーポート]` を使用します。
- すべての LiveCycle サーバーインスタンスが特定のホスト名 (**localhost** ではない) と異なる / 同じポート上で実行している。この場合は、ロードバランサーホスト名とポート、すなわち `[ロードバランサーホスト]:[ロードバランサーポート]` を使用します。

LiveCycle サーバークラスターにアクセスするためにロードバランサー URL を使用する必要がある場合 (上記参照)、作成者インスタンスとロードバランサー間の必要な通信ポートが開いていることを確認してください。

- 4 LiveCycle の管理者資格情報を、「Username」フィールドと「Password」フィールドにそれぞれ入力します。
- 5 「**Save**」をクリックします。

5.3.4 作成者インスタンスと発行インスタンス間の通信

作成者インスタンスと発行インスタンス間で双方向通信を有効にするには、いくつかの設定変更を行う必要があります。

5.3.4.1 複製エージェントの設定 (発行インスタンス URL の定義)

作成者インスタンスで、各発行インスタンスごとに複製エージェントを設定する必要があります。これらのエージェントは作成者インスタンスのコンテンツをすべての発行インスタンスに複製します。

- 1 `http://<authorHost>:<authorPort>/lc/miscadmin` で Tools UI にログインします。
- 2 「複製」を選択してから、左パネルで「作成者のエージェント」を選択します。
右パネルには、作成者インスタンスのために設定されたさまざまなエージェントがあります
- 3 右パネルで、「新規...」を選択し、「新規ページ」をクリックします。
ページの作成ダイアログが表示されます。
- 4 タイトルと名前を設定し、複製エージェントを選択します。
- 5 「作成」をクリックして、新しいエージェントを作成します。
- 6 新しいエージェントをダブルクリックして設定パネルを開きます。
- 7 「編集」をクリックすると、エージェント設定ダイアログが表示されます。
 - a 設定タブで次の操作をします。
 - 説明を入力します。
 - 「有効」にチェックを付けます。
 - 「シリアライゼーションタイプをデフォルトにする」を選択します。
 - 「試行遅延」を「60000」に設定します。
 - 「ログレベル」を「Info」として設定します。
 - b トランスポートタブで次の操作をします。
 - 発行インスタンスの必要 URI `http://<発行ホスト>:<発行ポート>/lc/bin/receive?sling:authRequestLogin=1` を入力します。
 - ユーザーとパスワードを設定します。デフォルトの資格情報は `admin/admin` です。
- 8 「OK」をクリックして設定を保存します。
- 9 エージェント設定パネルで、「接続のテスト」をクリックします。
接続に成功すると、設定が正しく行われたことがわかります。

注意：場合によっては、発行インスタンスを 1 つだけ持っている場合は、デフォルトの複製エージェントを `publish` という名前を付けて使用できます。手順 b(i) で説明したように、トランスポートタブでそれを編集して、発行 URI を指定してください。この場合は、新しい複製エージェントを作成する必要はありません。

注意：場合によっては、発行ファーム (複数の非クラスター発行インスタンス) を持っている場合は、手順 1 から 9 で説明されているように、各発行インスタンスごとに複製エージェントを作成する必要があります。これらの各複製エージェントに対して、タイトルと名前は重要で一意でなければならず、対応する発行インスタンスの識別を簡単にできるようにする必要があります。これらの各複製エージェントは、特定の発行インスタンスを示す異なる URI をトランスポートタブに持っています。複数の発行インスタンスの場合は、デフォルトのエージェント `publish` をコピーし、作成したエージェントのトランスポートタブで名前と URI を編集することで、複製エージェントを作成することもできます。デフォルトの複製エージェントを使用しない場合は、それを無効にして、不必要な複製が行われないようにできます。

注意：別のクラスターに対しては、1 つの作成者インスタンス (できればマスターインスタンス) でこれらの手順を実行する必要があります。

5.3.4.2 ActivationManagerImpl の発行インスタンス URL の定義

- 1 `http://<authorHost>:<authorPort>/lc/system/console/configMgr` に移動します。OSGi Management Console のユーザー資格情報を使ってログインします。デフォルトの資格情報は `admin/admin` です。
- 2 「`com.adobe.livecycle.content.activate.impl.ActivationManagerImpl.name`」設定の横にある「編集」アイコンをクリックします。
- 3 「ActivationManager Publish URL」フィールドで、発行インスタンス ActivationManager にアクセスするための URL を指定します。次の URL を指定できます。
 - a **ロードバランサー URL (推奨)**: 発行ファーム (複数の非クラスター発行インスタンス) の前にロードバランサーとして機能する Web サーバーを持っている場合は、そのロードバランサーの URL を指定します。
 - b **発行インスタンス URL**: 単一の発行インスタンスのみを持っている場合、あるいは発行ファーム前段の Web サーバーが何らかの理由で作成者完了からアクセスできない場合、任意の発行インスタンス URL を指定します。指定した発行インスタンスがダウンした場合は、フォールバックメカニズムが機能して作成者側で処理します。

URL 設定: `http://<ホスト名>:<ポート>/lc/bin/remoting/lc.content.remote.activate.activationManager`
- 4 「保存」をクリックします。

5.3.4.3 逆複製キューの設定

作成者インスタンスで、各発行インスタンスごとに逆複製エージェントを設定する必要があります。これらのエージェントは発行インスタンスのコンテンツを作成者インスタンスに複製します。

- 1 `http://<authorHost>:<authorPort>/lc/miscadmin` で Tools UI にログインします。
- 2 「複製」を選択してから、左パネルで「作成者のエージェント」を選択します。

右パネルには、作成者インスタンスのために設定されたさまざまなエージェントがあります
- 3 右パネルで、「新規」を選択してから、「新規ページ」をクリックします。

ページの作成ダイアログが表示されます。
- 4 **タイトル** と **名前** を設定し、**逆複製エージェント** を選択します。
- 5 「作成」をクリックして、新しいエージェントを作成します。
- 6 新しいエージェントをダブルクリックして設定パネルを開きます。
- 7 「編集」をクリックすると、**エージェント設定**ダイアログが表示されます。
 - a **設定**タブで次の操作をします。
 - 説明を入力します。
 - 「有効」にチェックを付けます。
 - 「試行遅延」を「60000」に設定します。
 - 「ログレベル」を「Info」として設定します。
 - b **トランスポート**タブで次の操作をします。
 - 発行インスタンスの必要 URI を入力します - `http://<発行ホスト>:<発行ポート>/lc/bin/receive?slings:authRequestLogin=1`
 - ユーザーとパスワードを設定します - `admin/admin`
 - c **拡張**タブで: HTTP メソッドを GET として設定します
- 8 「OK」をクリックして設定を保存します。
- 9 エージェント設定パネルで、「接続のテスト」をクリックします。

接続に成功すると、設定が正しく行われたことがわかります。

注意: 場合によっては、発行インスタンスを 1 つだけ持っている場合は、デフォルトの逆複製エージェントを **publish_reverse** という名前を付けて使用できます。手順 b(i) で説明したように、**トランスポート** タブでそれを編集して、発行 URI を指定してください。この場合は、新しい逆複製エージェントを作成する必要はありません。

注意: 場合によっては、発行ファーム (複数の非クラスター発行インスタンス) を持っている場合は、手順 1 から 9 で説明されているように、各発行インスタンスごとに逆複製エージェントを作成する必要があります。これらの各複製エージェントに対して、**タイトル** と名前は重要で一意でなければならず、対応する発行インスタンスの識別を簡単にできるようにする必要があります。これらの各複製エージェントは、特定の発行インスタンスを示す異なる URI を **トランスポート** タブに持っています。複数の発行エージェントの場合は、デフォルトのエージェント **publish_reverse** をコピーし、作成したエージェントの **トランスポート** タブで **名前** と **URI** を編集することで、逆複製エージェントを作成することもできます。デフォルトの逆複製エージェントを使用しない場合は、それを無効にして、不必要な複製が行われないようにできます。

注意: 別のクラスターに対しては、1 つの作成者インスタンス (できればマスターインスタンス) でこれらの手順を実行する必要があります。

5.3.4.4 VersionRestoreManagerImpl の作成者インスタンス URL の定義

1 `http://<publishHost>:<publishPort>/lc/system/console/configMgr` に移動します。OSGi Management Console のユーザー資格情報を使ってログインします。デフォルトの資格情報は `admin/admin` です。

2 「com.adobe.livecycle.content.activate.impl.VersionRestoreManagerImpl.name」設定の横にある「編集」アイコンをクリックします。

3 「VersionRestoreManager Author URL」フィールドで、作成者インスタンス VersionRestoreManager の URL を指定します。

URL string: `http://<ホスト名>:<ポート>/lc/bin/remoting/lc.content.remote.activate.versionRestoreManager`

注意: ロードバランサーの前に複数の作成者インスタンス (クラスター化) がある場合は、「VersionRestoreManager Author URL」フィールドにその URL を指定します。

4 「Save」をクリックします。

5.3.5 サンプルのユーザーとアセットのインストール

ユーザー権限が事前に定義されたサンプルユーザーをインストールして、ソリューションテンプレートを検索し、独自のソリューションを構築するようカスタマイズすることができます。

1 `http://<作成者ホスト>:<作成者ポート>/lc/crx/explorer/index.jsp` に行きます。

2 LiveCycle 管理者資格情報を使ってログインし、**Package Manager** をクリックします。

3 **Package Manager** で、`samples-correspondencemanagement-pkg-<バージョン>.zip` パッケージを `<LC ホーム>/deploy/crx` からアップロードします。

4 パッケージのアップロードに成功したら、「インストール」をクリックします。

5 確認ダイアログで「インストール」をクリックし、サンプルユーザーとアセットをインストールします。

Correspondence Management サンプルユーザー

Correspondence Management Solution Accelerator には、次のサンプルユーザーが含まれています。これらのユーザーは、対話型カスタマー通信の生成に導かれるアクティビティに参加することを期待されています。

パッケージのインストール時に、次の役割がユーザーに自動的に割り当てられます。

ユーザー名	割り当てられた役割	役割
Todd Goldman	Correspondence Management 管理者	このユーザーは、システム全般の管理者です。このロールを持つユーザーは、すべてのアセットを変更できます。また、カテゴリを定義することもできます。
Heather Douglas	Correspondence Management SME	この人物は、テキストと画像を CRUD できる役割を持っています。
Caleb Lopez	Correspondence Management アプリケーションスペシャリスト	このユーザーは、テキスト、写真、条件、リストの各オブジェクトを慎重に選択してレターテンプレートを定義します。この役割では、ユーザーはレターテンプレート、レイアウト、リスト、条件、テキスト、および画像を CRUD できます。
Gloria Rios	Correspondence Management 要求処理担当者	エージェントユーザーは、ビジネスユーザーによって定義されたレターテンプレートを使用して、カスタマーに配信するレター通信を生成します。
Jocelyn Robinson	Correspondence Management フォーム開発者	このユーザーには、LiveCycle Designer を使用したフォームレイアウトのデザインスキルがあります。このユーザーは、レスポンス管理で使用するためのフォームレイアウトをデザインする必要なノウハウを持っており、LiveCycle Designer を使用して、XDP テンプレートをデザインします。これはレターの雛形として機能します。
Frank Kricfalusi	Correspondence Management 開発者	このユーザーには、XSD スキーマおよびデータモデリングの概念についての知識があり、データディクショナリの作成および管理を行う役割があります。

ソリューションテンプレートを 사용하여ソリューションを実装する場合のサンプルユーザーとガイドラインについて詳しくは、『[Correspondence Management Solution ガイド](#)』を参照してください。

注意: 別のクラスターに対しては、1 つの作成者インスタンス (できればマスターインスタンス) でこれらの手順を実行する必要があります。

5.3.6 IPv6 実装の設定

注意: この手順は、IPv6 アドレスを使用するコンピューター上で Correspondence Management Solution が実行されている場合のみ実行します。

IPv6 アドレスをサーバーおよびクライアントコンピューターにマップするには:

- 1 C:\Windows\System32\drivers\etc ディレクトリを開きます。
- 2 hosts ファイルをテキストエディターで開きます。
- 3 IPv6 アドレスのマッピングをホスト名に追加します。次に例を示します。

```
2001:1890:110b:712b:d1d:9c99:37ef:7281 <ipv6_hostname>
```

- 4 ファイルを保存して閉じます。

Correspondence Management Solution へのアクセスに IPv6 アドレスではなくマップされたホスト名が使用されていることを確認します。

5.3.7 Adobe Reader 用日本語フォントのインストール

Correspondence Management のアセットで日本語フォントを使用する場合は、Adobe Reader 用日本語サポートパッケージをインストールする必要があります。インストールしないと、文字やフォームのレンダリングおよび機能が正常に実行されません。言語パックをインストールするには、Adobe Reader のダウンロードページにアクセスします。

5.4 PDF Generator の設定

PDF Generator を LiveCycle の一部としてインストールしている場合は、次のタスクを実行します。

5.4.1 環境変数

PDF Generator モジュールをインストールして、ファイルを PDF に変換するように設定した場合、一部のファイル形式については、環境変数を手動で設定して、対応するアプリケーションの起動に使用する実行ファイルの絶対パスを含める必要があります。次の表に、インストールされたネイティブアプリケーション用の環境変数の一覧を示します。

注意：すべての環境変数とそれぞれのパスでは、大文字と小文字が区別されます。

アプリケーション	環境変数	例
Adobe Acrobat	Acrobat_PATH	C:\Program Files (x86)\Adobe\Acrobat 11.0\Acrobat\Acrobat.exe
Adobe FrameMaker®	FrameMaker_PATH	C:\Program Files (x86)\Adobe\FrameMaker 8.0\FrameMaker.exe
メモ帳	Notepad_PATH	C:\WINDOWS\notepad.exe Notepad_PATH 変数は空欄でかまいません。
OpenOffice	OpenOffice_PATH	C:\Program Files (x86)\OpenOffice.org 3.3
Adobe PageMaker®	PageMaker_PATH	C:\Program Files (x86)\Adobe\PageMaker 7.0.2\PageMaker.exe
WordPerfect	WordPerfect_PATH	C:\Program Files (x86)\WordPerfect Office 12\Programs\wpwin12.exe
Adobe Photoshop®	Photoshop_PATH	C:\Program Files (x86)\Adobe\Adobe Photoshop CS4\Photoshop.exe

注意：環境変数 OpenOffice_PATH は、実行ファイルではなく、インストールフォルダーのパスに設定します。

Word、PowerPoint、Excel、Visio、Project などの Microsoft Office アプリケーションまたは AutoCAD のパスを設定する必要はありません。これらのアプリケーションがサーバーにインストールされている場合は、Generate PDF サービスが自動的にこれらのアプリケーションを起動します。

新しい Windows 環境変数の作成

- 1 スタート/コントロールパネル/システムを選択します。
- 2 「詳細設定」タブをクリックして、「環境変数」をクリックします。
- 3 「システム環境変数」セクションで、「新規」をクリックします。
- 4 設定が必要な環境変数の名前（例えば、Photoshop_PATH など）を入力します。このフォルダーは、実行ファイルを含むフォルダーです。例えば、次のパスを入力します。

```
D:\Program Files\Adobe\Adobe Photoshop CS4\Photoshop.exe
```

Linux または UNIX での PATH 変数の設定 (OpenOffice のみ)

次のコマンドを実行します。

```
export OpenOffice_PATH=/opt/openoffice.org3.3
```

5.4.2 Adobe PDF プリンターをデフォルトのプリンターとして設定

Adobe PDF プリンターを、サーバーのデフォルトプリンターに設定する必要があります。Adobe PDF プリンターがデフォルトとして設定されていない場合、PDF Generator ではファイルを変換できません。

デフォルトプリンターの設定

- 1 スタート/プリンターと FAX を選択します。
- 2 プリンターと FAX ウィンドウで、「Adobe PDF」を右クリックし、「通常使うプリンターに設定」を選択します。

5.4.3 Acrobat Professional の設定 (Windows ベースのコンピューターのみ)

注意: この手順は、LiveCycle のインストールを完了後に Acrobat へのアップグレードまたは Acrobat のインストールを行った場合にのみ必要です。Acrobat のアップグレードは、Configuration Manager を実行してアプリケーションサーバーに LiveCycle をデプロイした後に実行できます。Acrobat Professional のルートディレクトリは、[Acrobatroot] と表記します。通常、ルートディレクトリは C:\Program Files\Adobe\Acrobat 11.0\Acrobat です。

PDF Generator で使用するための Acrobat の設定

- 1 Acrobat の以前のバージョンがインストールされている場合、Windows コントロールパネルの「プログラムの追加と削除」を使用して Acrobat をアンインストールします。
- 2 インストーラーを実行して Acrobat XI Pro をインストールします。
- 3 LiveCycle インストールメディアの additional\scripts フォルダーに移動します。
- 4 次のバッチファイルを実行します。

```
Acrobat_for_PDFG_Configuration.bat [LiveCycle root]/pdfg_config
```

- 5 LiveCycle Configuration Manager を実行しない他のクラスターノード上で、次の手順を実行します。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\Print に、SplWOW64TimeOut という名前の新しいレジストリ DWORD エントリを追加します。値を 60000 に設定します。
 - LiveCycle がインストールされているノード上の [LiveCycle ルート]/plugins/x86_win32 ディレクトリにある PDFGen.api を、現在設定しているノード上の [Acrobat ルート]/plug_ins ディレクトリにコピーします。
- 6 Acrobat を開き、ヘルプ/アップデートの有無をチェック/環境設定を選択します。
- 7 「自動的に新しいアップデートを確認する」を選択解除します。

Acrobat のインストールの検証

- 1 システム上の PDF ファイルに移動し、そのファイルをダブルクリックして Acrobat で開きます。PDF ファイルが正常に開いた場合は、Acrobat が正しくインストールされています。
- 2 PDF ファイルを正しく開くことができない場合は、Acrobat をアンインストールしてから再インストールします。

注意: Acrobat のインストール完了後に表示される Acrobat のすべてのダイアログボックスを閉じてから、Acrobat の自動アップデートを無効化してください。環境変数 Acrobat_PATH を、Acrobat.exe を指すように設定してください (例えば、C:\Program Files\Adobe\Acrobat 11.0\Acrobat\Acrobat.exe)。

ネイティブアプリケーションサポートの設定

- 1 前の手順で説明したように、Acrobat をインストールして検証します。
- 2 Adobe PDF プリンターをデフォルトのプリンターとして設定します。

Acrobat の信頼できるディレクトリリストへの一時ディレクトリの追加

OptimizePDF サービスでは、Adobe Acrobat を使用し、LiveCycle の一時ディレクトリおよび PDF Generator t の一時ディレクトリを Acrobat の信頼できるディレクトリリストに作成します。

LiveCycle の一時ディレクトリおよび PDF Generator の一時ディレクトリが信頼できるディレクトリリストに追加されない場合、OptimizePDF サービスの実行は失敗します。一時ディレクトリリストにディレクトリを追加するには、次の手順を実行します。

- 1 Acrobat を開き、編集/環境設定を選択します。
- 2 左側のカテゴリから、「セキュリティ (強化)」を選択し、「拡張セキュリティを有効にする」オプションを選択します。
- 3 LiveCycle の一時ディレクトリおよび PDF Generator の一時ディレクトリを信頼できるディレクトリリストに追加するには、「フォルダーパスの追加」をクリックし、ディレクトリを選択して「OK」をクリックします。

5.4.4 マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウントの設定

デフォルトでは、PDF Generator は、一度に 1 つの OpenOffice、Microsoft Word または PowerPoint ドキュメントのみを変換できます。マルチスレッド変換を有効にすると、OpenOffice または PDFMaker の複数のインスタンスを起動して PDF Generator で同時に複数のドキュメントを変換できます (PDFMaker は、Word 文書と PowerPoint ドキュメントの変換に使用されます)。

注意: マルチスレッドファイル変換は、Microsoft Word 2007 および Microsoft PowerPoint 2007 のみでサポートされています。Microsoft Excel 2003 および Microsoft Excel 2007 ではサポートされていません。

マルチスレッドファイル変換を有効にする必要がある場合は、[LiveCycle のドキュメント](#) から入手可能な『インストールの準備』または『アップグレードの準備』の「マルチスレッドファイル変換の有効化」の節で説明されているタスクを実行する必要があります。

Linux および Solaris ユーザーの場合、ユーザーを作成して、パスワードプロンプトが表示されないようにシステムを設定する必要があります。次の項では、ユーザーを作成し、追加の設定を行う方法の概要について説明します。

5.4.4.1 ユーザーアカウントの追加

- 1 管理コンソールで、サービス / LiveCycle PDF Generator 11 / ユーザーアカウントをクリックします。
- 2 「追加」をクリックし、LiveCycle サーバー上での管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。OpenOffice のユーザーを設定する場合は、最初に表示される OpenOffice のアクティベート用のダイアログを閉じます。

注意: OpenOffice のユーザーを設定する場合は、OpenOffice のインスタンス数を、この手順で指定したユーザーアカウント数よりも大きくすることはできません。

- 3 LiveCycle サーバーを再起動します。

5.4.4.2 Linux または Solaris での OpenOffice に必要な追加設定

- 1 上記の説明に従って、ユーザーアカウントを追加します。
- 2 /etc/sudoers ファイルで、追加のユーザー (LiveCycle サーバーを実行する管理者以外) のエントリを追加します。例えば、ユーザーを lcadm、サーバーを myhost として LiveCycle を実行している場合、user1 および user2 として動作させるには、/etc/sudoers に次のエントリを追加します。

```
lcadm myhost=(user1) NOPASSWD: ALL  
lcadm myhost=(user2) NOPASSWD: ALL
```

この設定により、lcadm は、ホスト myhost において user1 または user2 として、パスワードの入力を求められることなくすべてのコマンドを実行できるようになります。

- 3 ユーザーアカウントの追加で追加したすべてのユーザーが LiveCycle サーバーに接続できるようにします。例えば、user1 というローカルユーザーに LiveCycle サーバーに接続する権限を許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +local:user1@
```

詳しくは、xhost コマンドのドキュメントを参照してください。

- 4 /etc/sudoers ファイルで requiretty を有効にします。
- 5 サーバーを再起動します。

注意：アプリケーションサーバーを起動するセッションがオープンになっていることを確認してください。セッションを終了すると、一部の変換は間歇的に失敗する場合があります。

5.4.5 PDF Generator へのフォントの追加

LiveCycle にはフォントの中央リポジトリがあり、すべての LiveCycle モジュールがアクセスできます。サーバー上の LiveCycle 以外のアプリケーションで、追加フォントを使用できるように設定します。これにより、PDF Generator では、そのアプリケーションを使用して作成された PDF ドキュメントで追加フォントを使用できるようになります。

注意：指定したフォントフォルダーに新しいフォントを追加したら、アプリケーションサーバーを再起動します。

5.4.5.1 LiveCycle 以外のアプリケーション

次のリストには、PDF Generator でサーバー側の PDF 生成に使用できる LiveCycle 以外のアプリケーションが含まれています。

Windows 専用アプリケーション

- Microsoft Office Word
- Microsoft Office Excel
- Microsoft Office PowerPoint
- Microsoft Office Project
- Microsoft Office Visio
- Microsoft Office Publisher
- AutoDesk AutoCAD
- Corel WordPerfect
- Adobe Photoshop CS
- Adobe FrameMaker
- Adobe PageMaker
- Adobe Acrobat Professional

マルチプラットフォームアプリケーション

- OpenOffice Writer
- OpenOffice Calc
- OpenOffice Draw
- OpenOffice Impress

注意：これらのアプリケーションの他にも、各ユーザーが追加したアプリケーションが含まれている場合があります。

上記のアプリケーションのうち OpenOffice スイート (Writer、Calc、Draw および Impress) は、他のアプリケーションが Windows にのみ対応しているのに対して、Windows、Solaris および Linux プラットフォームに対応しています。

5.4.5.2 Windows 専用アプリケーションへの新しいフォントの追加

上記のすべての Windows 専用アプリケーションでは、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーにあるすべてのフォントにアクセスできます。これらのアプリケーションには、C:\Windows\Fonts に加えて、それぞれ固有のフォントフォルダーが存在する場合があります。

このため、LiveCycle フォントディレクトリにカスタムフォントを追加する場合、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーにそのフォントをコピーして、Windows 専用のアプリケーションでもこれらのフォントを使用できるようにする必要があります。

カスタムフォントの使用に際しては、使用許諾契約に基づくライセンスを取得して、そのフォントにアクセスするアプリケーションでの使用が許可されている必要があります。

5.4.5.3 その他のアプリケーションへの新しいフォントの追加

他のアプリケーションに PDF 作成のサポートを追加した場合、これらのアプリケーションのヘルプを参照して新しいフォントを追加します。Windows では、通常はカスタムフォントを C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーに追加すれば十分です。

5.4.6 HTML から PDF への変換の設定

HTML から PDF への変換プロセスは、Acrobat XI Pro の設定を使用するように設計されています。この設定は、PDF Generator の設定よりも優先されます。

注意：この設定は、HTML から PDF への変換プロセスを有効にするために必要です。設定が行われていない場合、この変換タイプは失敗します。

5.4.6.1 HTML から PDF への変換の設定

- 1 Acrobat のインストールおよび検証は、32 ページの「[5.4.3 Acrobat Professional の設定 \(Windows ベースのコンピューターのみ\)](#)」で説明されています。
- 2 [LiveCycle root]\plugins\x86_win32 ディレクトリにある pdfgen.api ファイルを探し、[Acrobat root]\Acrobat\plug_ins ディレクトリにコピーします。

5.4.6.2 HTML から PDF への変換における Unicode フォントのサポート

重要：入力用 zip ファイルにファイル名が 2 バイト文字の HTML ファイルが含まれている場合、HTML から PDF への変換は失敗します。この問題を回避するには、HTML ファイルに名前を付けるときに 2 バイト文字を使用しないようにします。

- 1 Unicode フォントを、使用しているシステムに応じて、次のいずれかのディレクトリにコピーします。

- Windows

[Windows root]\Windows\fonts

[Windows root]\WINNT\fonts

- UNIX

/usr/lib/X11/fonts/TrueType

/usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType

/usr/share/fonts/default/TrueType

```
/usr/X11R6/lib/X11/fonts/ttf
/usr/X11R6/lib/X11/fonts/truetype
/usr/X11R6/lib/X11/fonts/TrueType
/usr/X11R6/lib/X11/fonts/TTF
/Users/cfqauser/Library/Fonts
/System/Library/Fonts
/Library/Fonts
/Users/ + System.getProperty(<user name>, root) + /Library/Fonts
System.getProperty(JAVA_HOME) + /lib/fonts
/usr/share/fonts (Solaris)
```

注意： /usr/lib/X11/fonts ディレクトリが存在することを確認します。ディレクトリがない場合は、ln コマンドを使用して /usr/share/X11/fonts から /usr/lib/X11/fonts へのシンボリックリンクを作成します。

2 [LiveCycle root]/deploy/adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルにある cffont.properties ファイルで、フォント名マッピングを変更します。


- このアーカイブを展開し、cffont.properties ファイルを探して、エディターで開きます。
- Java フォント名のコンマ区切りリストで、フォントタイプごとに、Unicode システムフォントにマップを追加します。以下の例では、kochi mincho が Unicode システムフォントの名前です。

```
dialog=Arial, Helvetica, kochi mincho
```

```
dialog.bold=Arial Bold, Helvetica-Bold, kochi mincho ...
```

- プロパティファイルを保存して閉じ、adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルを再パッケージ化して再デプロイします。

注意： 日本語のオペレーティングシステムでは、cffont.properties ja ファイルでもフォントマッピングを指定します。これは、標準の cffont.properties ファイルよりも優先されます。

 リスト内のフォントは、左から右に検索され、最初に見つかったフォントが使用されます。HTML から PDF の変換ログでは、システム内で見つかったすべてのフォント名のリストが返されます。マップが必要なフォント名を特定するには、前述したいずれかのディレクトリにフォントを追加し、サーバーを再起動して変換を実行します。マッピングに使用するフォント名は、ログファイルから特定できます。

生成された PDF ファイルにフォントを埋め込むには、cffont.properties ファイル内の embedFonts プロパティを true に設定します (デフォルトは false)。

5.4.7 Microsoft Visio のデフォルトのマクロ設定の変更

マクロを含む Microsoft Visio のファイルを変換しようとすると、Microsoft Office Visio のセキュリティに関する通知ダイアログが表示され、変換がタイムアウトします。マクロが含まれているファイルを正常に変換するには、Visio のデフォルトのマクロ設定を変更する必要があります。

❖ Visio で、**ツール/セキュリティセンター/マクロの設定**をクリックし、次のいずれかのオプションを選択して、「OK」をクリックします。

- 警告を表示せずにすべてのマクロを無効にする
- すべてのマクロを有効にする

5.4.8 Network Printer Client のインストール

PDF Generator には、クライアントコンピューターに PDF Generator ネットワークプリンターをインストールするための実行ファイルが含まれています。インストールが完了すると、PDF Generator プリンターがクライアントコンピューターの既存のプリンターのリストに追加されます。その後、このプリンターを使用してドキュメントを送信し、PDF に変換することができます。

注意： Administration Console のネットワークプリンタークライアントのインストールウィザードでは、Windows オペレーティングシステムのみがサポートされています。ネットワークプリンタークライアントのインストールウィザードの起動には、32 ビット JVM を使用してください。64 ビット JVM を使用した場合は、エラーが発生します。

Windows で PDFG ネットワークプリンターのインストールが失敗する場合や、プリンターを UNIX または Linux のプラットフォームにインストールする場合は、各オペレーティングシステムのネイティブのプリンター追加ユーティリティを使用して、37 ページの「[5.4.8.2 Windows でネイティブのプリンターの追加ウィザードを使用した PDFG ネットワークプリンターの設定](#)」の説明に従って設定してください。

5.4.8.1 PDF Generator ネットワークプリンタークライアントのインストール

注意： Windows Server 2008 で PDF Generator ネットワークプリンタークライアントをインストールする前に、Windows Server 2008 にインターネット印刷クライアント機能がインストールされていることを確認してください。機能のインストールについては、Windows Server 2008 のヘルプを参照してください。

1 PDF Generator をサーバーに正常にインストールしたことを確認します。

2 次のいずれかを実行します。

- Windows クライアントコンピューターから、Web ブラウザーに次の URL を入力します。[host] は PDF Generator をインストールしたサーバーの名前、[port] は使用しているアプリケーションサーバーポートです。

```
http://[host]:[port]/pdfg-ipp/install
```

- Administration Console で、ホーム/サービス/ PDF Generator / PDFG ネットワークプリンターをクリックします。「PDFG ネットワークプリンターのインストール」セクションで、「ここをクリックしてください」をクリックして、PDFG ネットワークプリンターのインストールを起動します。

3 インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザーアカウントを使う」オプションを選択して、PDFG 管理者またはユーザーのロールを持つ LiveCycle ユーザーの資格情報を指定します。このユーザーには電子メールアドレスも必要です。このアドレスは、変換済みのファイルを受信する際に使用できます。このセキュリティ設定をクライアントコンピューター上のすべてのユーザーに適用するには、「すべてのユーザーに同じセキュリティ設定を使う」を選択して、「OK」をクリックします。

注意： ユーザーのパスワードが変更された場合、ユーザーは使用しているコンピューターに PDFG ネットワークプリンターを再インストールする必要があります。パスワードを Administration Console から更新することはできません。

インストールが終了すると、Adobe LiveCycle PDF Generator 11 が正常にインストールされたことを示すダイアログボックスが表示されます。

4 「OK」をクリックします。使用可能なプリンターのリストに「Adobe LiveCycle PDF Generator 11」という名前のプリンターが追加されます。

5.4.8.2 Windows でネイティブのプリンターの追加ウィザードを使用した PDFG ネットワークプリンターの設定

1 スタート/プリンターと FAX をクリックし、「プリンターの追加」をダブルクリックします。

2 「次へ」をクリックし、「ネットワークプリンター、または他のコンピューターに接続されているプリンター」を選択して、「次へ」をクリックします。

- 3 「インターネット上または自宅 / 会社のネットワーク上のプリンターに接続する」を選択し、次の PDFG プリンターの URL を入力します。[host] はサーバー名、[port] はサーバーを実行しているポート番号です。

```
http://[host]:[port]/pdfg-ipp/printer
```

- 4 インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザーアカウントを使う」を選択し、ユーザーの有効な資格情報を指定します。
- 5 「プリンタードライバーの選択」ボックスで、任意の標準的な PostScript ベースのプリンタードライバー (HP Color LaserJet PS など) を選択します。
- 6 適切なオプション (このプリンターをデフォルトに設定するなど) を選択してインストールを完了します。

注意: プリンターの追加の際に使用するユーザーの資格情報では、応答を受信するために、有効な電子メール ID を User Management で設定する必要があります。

- 7 電子メールサービスの sendmail サービスを設定します。サービスの設定オプションで有効な SMTP サーバーと認証情報を指定します。

5.4.8.3 プロキシサーバーのポート転送を使用するように PDF Generator ネットワークプリンタークライアントをインストールして設定する

- 1 CC プロキシサーバーで特定のポートについて LiveCycle サーバーへのポート転送を設定し、プロキシサーバーレベルで認証を無効にします (LiveCycle で独自の認証を使用するので)。転送を設定したポートでクライアントがこのプロキシサーバーに接続すると、すべての要求が LiveCycle サーバーに転送されます。

- 2 次の URL を使用して、PDFG ネットワークプリンターをインストールします。

```
http://[proxy server]:[forwarded port]/pdfg-ipp/install.
```

- 3 PDFG ネットワークプリンターの認証に必要な資格情報を指定します。
- 4 PDFG ネットワークプリンターがクライアントマシンにインストールされます。これにより、ファイアウォールで保護されている LiveCycle サーバーを使用した PDF 変換が可能になります。

5.4.9 ファイル制限機能の設定の変更

Microsoft Office のセキュリティセンター設定を変更して、PDFG が古いバージョンの Microsoft Office ドキュメントを変更できるようにします。

- 1 任意の Office 2010 アプリケーションで、「ファイル」タブをクリックします。「ヘルプ」の下の「オプション」をクリックします。オプションダイアログボックスが表示されます。
- 2 「セキュリティセンター」をクリックし、「セキュリティセンターの設定」をクリックします。
- 3 セキュリティセンターダイアログで、「ファイル制限機能の設定」をクリックします。
- 4 「ファイルの種類」リストで、PDFG に変換させるファイルの種類に対して、「開く」チェックボックスをオフにします。

5.4.10 監視フォルダーのパフォーマンスパラメーター

監視フォルダーを使用した PDF の変換を実行するための十分なディスク容量がないことを示す java.io.IOException エラーメッセージが発生しないように、Administration Console で PDF Generator の設定を変更できます。

PDF Generator のパフォーマンスパラメーターの設定

- 1 Administration Console にログインして、サービス / アプリケーションおよびサービス / サービスの管理を選択します。

- 2 サービスのリストで **PDFGConfigService** を探してクリックし、以下の値を設定します。
 - **PDFG Cleanup Scan Seconds** : 1800
 - **Job Expiration Seconds** : 6000
 - **Server Conversion Timeout** : デフォルト値の 270 を、450 などの大きい値に変更します。
- 3 「**保存**」をクリックして、サーバーを再起動します。

5.4.11 保護フィールドを含む Microsoft Word 文書に対して PDF 変換を有効にする

PDF Generator は保護フィールドを含む Microsoft Word 文書をサポートします。保護フィールドを含む Microsoft Word 文書に対して PDF 変換を有効にするには、次のようにファイルタイプ設定を変更します。

- 1 **Administration Console** で、**Services / PDF Generator / File Type Settings** に行き、ファイルタイプ設定プロファイルを開きます。
- 2 **Microsoft Word** オプションを展開し、「**Adobe PDF でドキュメントマークアップを保持 (Microsoft Office 2003 以降)**」オプションを選択します。
- 3 「**名前を付けて保存**」をクリックし、ファイルタイプ設定の名前を指定し、「**OK**」をクリックします。

5.5 Rights Management の最終設定

Rights Management では、SSL を使用するようにアプリケーションサーバーを設定する必要があります ([管理ヘルプ](#)を参照)。

5.6 LDAP アクセスの設定

5.6.1 User Management の設定 (ローカルドメイン)

- 1 Web ブラウザーを開き、[http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui) にアクセスしてログインします (20 ページの「[5.1.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス](#)」を参照)。
- 2 **設定 / User Management / ドメインの管理** をクリックし、「**新規ローカルドメイン**」をクリックします。
- 3 該当するボックスにドメイン ID とドメイン名を入力します ([管理ヘルプ](#)の「ローカルドメインの追加」を参照)。
- 4 (オプション) 「**アカウントロックを有効にする**」オプションの選択を解除して、アカウントロックを無効にします。
- 5 「**OK**」をクリックします。

5.6.2 User Management の LDAP 設定 (エンタープライズドメイン)

- 1 Web ブラウザーを開き、[http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui) にアクセスしてログインします (20 ページの「[5.1.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス](#)」を参照)。
- 2 **設定 / User Management / ドメインの管理** をクリックし、「**新規エンタープライズドメイン**」をクリックします。
- 3 「**ID**」ボックスにドメインの一意の ID を入力し、「**名前**」ボックスにドメインの識別名を入力します。

注意: LiveCycle データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意: LiveCycle データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください ([管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

- 4 「**認証を追加**」をクリックし、**認証プロバイダー**リストで「**LDAP**」を選択します。
- 5 「**OK**」をクリックします。
- 6 「**ディレクトリを追加**」をクリックし、「**プロファイル名**」ボックスに、LDAP プロファイルの名前を入力します。
- 7 「**次へ**」をクリックします。
- 8 「**サーバー**」、「**ポート**」、「**SSL**」、「**バインド**」の各ボックスに値を指定し、「**ページに次の情報を入力**」ボックスで、ディレクトリ設定オプション («**Sun ONE のデフォルト値**」など)を選択します。また、「**名前**」ボックスと「**パスワード**」ボックスで、匿名アクセスが無効な場合に LDAP データベースへの接続に使用する値を指定します ([管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
- 9 (オプション) 設定をテストします。
 - 「**テスト**」をクリックします。画面に、サーバーのテストが成功したか、または設定エラーが存在することを示すメッセージが表示されます。
- 10 「**次へ**」をクリックして、必要に応じて、「**ユーザー設定**」を設定します ([管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
- 11 (オプション) 設定をテストします。
 - 「**テスト**」をクリックします。
 - 「**検索フィルター**」ボックスで、検索フィルターを確認するか新しい検索フィルターを指定してから、「**送信**」をクリックします。画面に検索条件に一致するエントリのリストが表示されます。
 - 「**閉じる**」をクリックしてユーザー設定画面に戻ります。
- 12 「**次へ**」をクリックして、必要に応じて、「**グループ設定**」を設定します ([管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
- 13 (オプション) 設定をテストします。
 - 「**テスト**」をクリックします。
 - 「**検索フィルター**」ボックスで、検索フィルターを確認するか新しい検索フィルターを指定してから、「**送信**」をクリックします。画面に検索条件に一致するエントリのリストが表示されます。
 - 「**閉じる**」をクリックしてグループの設定画面に戻ります。
- 14 「**完了**」をクリックして新規ディレクトリページを閉じ、「**OK**」をクリックして終了します。

5.7 FIPS モードの有効化

LiveCycle には FIPS モードがあり、RSA BSAFE Crypto-C 2.1 暗号化モジュールを使用して、データ保護を連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 承認アルゴリズムに限定しています。

LiveCycle の設定中に Configuration Manager を使用してこのオプションを有効化しなかった場合、または有効化した設定を無効化する場合は、Administration Console からこの設定を変更できます。

FIPS モードを変更した場合は、サーバーを再起動する必要があります。

FIPS モードは Acrobat 7.0 より前のバージョンをサポートしていません。FIPS モードが有効で、パスワードによる暗号化およびパスワード削除のプロセスに Acrobat 5 の設定が含まれる場合、このプロセスは失敗します。

通常、FIPS が有効化されていると、Assembler サービスでは、どのドキュメントにもパスワードの暗号化が適用されません。この処理が試行されると、FIPSMODEException が発生し、FIPS モードではパスワードを暗号化できないことが示されます。また、ベースドキュメントがパスワードで暗号化されている場合、PDFsFromBookmarks エlement は FIPS モードではサポートされません。

FIPS モードのオンまたはオフ

- 1 Administration Console にログインします。
- 2 **設定/コアシステム設定/設定** をクリックします。
- 3 「**FIPS を有効にする**」を選択して FIPS モードを有効化するか、選択を解除して FIPS モードを無効化します。
- 4 「**OK**」をクリックして、アプリケーションサーバーを再起動します。

注意: LiveCycle ソフトウェアでは、コードを検証して FIPS の互換性を確認しません。FIPS 操作モードは、FIPS で承認されたライブラリ (RSA) の暗号化サービスで、FIPS で承認されたアルゴリズムが使用されるようにするために提供されています。

5.8 HTML 電子署名の設定

Forms の HTML 電子署名機能を使用するには、次の手順を実行します。

- 1 **[LiveCycle root]/deploy/adobe-forms-ds.ear** ファイルをアプリケーションサーバーに手動でデプロイします。
- 2 管理コンソールにログインし、**サービス/ LiveCycle Forms ES4** をクリックします。
- 3 「**HTML 電子署名が有効です**」を選択し、「**保存**」をクリックします。

5.9 Connector for EMC Documentum の設定

注意: LiveCycle が EMC Documentum をサポートしているのは、バージョン 6.0、6.5 および 6.7 SP1 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for EMC Documentum を LiveCycle の一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、Documentum リポジトリに接続するように、このサービスを設定します。

Connector for EMC Documentum の設定

- 1 **[appserverdomain]** フォルダーにある **adobe-component-ext.properties** ファイルを開きます (ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します)。
- 2 次の Documentum Foundation Classes JAR ファイルを指定する新しいシステムプロパティを追加します。
 - dfc.jar
 - aspectjrt.jar
 - log4j.jar
 - jaxb-api.jar
 - (Connector for EMC Documentum 6.5 のみ)
 - configservice-impl.jar
 - configservice-api.jar

新しいシステムプロパティは、次の形式にする必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの Content Server と Documentum Foundation Classes のインストールを使用して、次のいずれかのシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

- Connector for EMC Documentum 6.0 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=  
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar  
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar
```

- Connector for EMC Documentum 6.5 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=  
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,  
C:/ProgramFiles/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-impl.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-api.jar
```

注意：上記のテキストには、改行が含まれています。このテキストをコピー&ペーストする場合、改行を削除してください。

- Connector for EMC Documentum 6.7 SP1 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=  
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,  
C:/ProgramFiles/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-impl.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-api.jar  
C:/Program Files/Documentum/Shared/commons-codec-1.3.jar  
C:/Program Files/Documentum/Shared/commons-lang-2.4.jar
```

注意：上記のテキストには、改行が含まれています。このテキストをコピー&ペーストする場合、改行を削除してください。

- 3 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

```
http://[host]:[port]/adminui
```

- 4 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名：administrator

パスワード：password

- 5 サービス / LiveCycle 11 Connector for EMC Documentum / 環境設定 に移動して、以下のタスクを実行します。

- 必要な Documentum リポジトリ情報のすべてを入力します。
- Documentum をリポジトリプロバイダーとして使用するには、「リポジトリサービスプロバイダー」で「EMC Documentum リポジトリプロバイダー」を選択し、「保存」をクリックします。管理ヘルプのページの右上にあるヘルプリンクをクリックしてください。

- 6 (オプション) サービス / LiveCycle 11 Connector for EMC Documentum / リポジトリ証明書の設定 に移動して、「追加」をクリックし、Docbase 情報を指定して、「保存」をクリックします (詳しくは、右上隅の「ヘルプ」をクリックしてください)。

- 7 アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

- 8 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

http://[host]:[port]/adminui

9 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名：administrator

パスワード：password

10 サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理に移動して、以下のサービスを選択します。

- EMCDocumentumAuthProviderService
- EMCDocumentumContentRepositoryConnector
- EMCDocumentumRepositoryProvider

11 「開始」をクリックします。サービスのいずれかが正常に起動されない場合は、前の手順で実行した設定を確認します。

12 次のいずれかの操作を行います。

- Documentum Authorization サービス (EMCDocumentumAuthProviderService) を使用して、Workbench の Resources ビューで Documentum リポジトリのコンテンツを表示するには、この手順を続行します。Documentum Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle 認証が上書きされるので、Documentum の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
- LiveCycle リポジトリを使用するには、LiveCycle の上級管理者の資格情報 (デフォルトは **administrator** と **password**) を使用して Workbench にログインします。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 19 で指定した資格情報を使用してデフォルトリポジトリにアクセスし、デフォルトの LiveCycle 認証サービスを使用します。

13 アプリケーションサーバーを再起動します。

14 Administration Console にログインし、**設定 / User Management / ドメインの管理**をクリックします。

15 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意： (WebLogic および WebSphere のみ) LiveCycle データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100 文字、2 バイト文字で 50 文字、4 バイト文字で 25 文字です (管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意：LiveCycle データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください (LiveCycle の管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

16 カスタム認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダーリストで「**カスタム**」を選択します。
- 「EMCDocumentumAuthProvider」を選択し、「OK」をクリックします。

17 LDAP 認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダーリストで「**LDAP**」を選択し、「OK」をクリックします。

18 LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックします。
- 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。

- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。
- 「次へ」をクリックし、ユーザー設定を指定して「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「**User Management ヘルプ**」をクリックしてください。

19 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

20 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

21 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。

22 LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1 つ以上のユーザーを選択し、「**ロールをアサイン**」をクリックします。
- 1 つ以上の LiveCycle のロールを選択し、「**OK**」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「**User Management ヘルプ**」をクリックしてください。

23 Workbench を起動し、Documentum リポジトリ用の次の資格情報を使用してログインします。

Username : [username]@[repository_name]

Password : [password]

ログイン後は、Documentum リポジトリは、Workbench 内の Resources ビューに表示されます。

username@repository_name を使用してログインしない場合、Workbench では、デフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

24 (オプション) Connector for EMC Documentum の LiveCycle サンプルをインストールするには、Samples という名前の Documentum リポジトリを作成して、その中にインストールします。

Connector for EMC Documentum サービスの設定後の、Documentum リポジトリでの Workbench の設定については、**LiveCycle 管理ヘルプ**を参照してください。

5.9.1 Documentum リポジトリでの XDP MIME 形式の作成

ユーザーが Documentum リポジトリから XDP ファイルを取得し、保存できるようにするには、次のタスクのいずれかを実行する必要があります。

- ユーザーがアクセスする XDP ファイルが置かれている各リポジトリに、対応する XDP 形式を作成します。
- Documentum リポジトリにアクセスするときに Documentum 管理者アカウントを使用するように、Connector for EMC Documentum サービスを設定します。この場合、Connector for EMC Documentum サービスでは必要に応じて XDP 形式が使用されます。

Documentum 管理者アカウントを使用した Documentum Content Server での XDP 形式の作成

1 Documentum 管理者アカウントにログインします。

2 「**形式**」をクリックし、**ファイル / 新規作成 / 形式**を選択します。

- 3 次の情報を対応するフィールドに入力します。

名前 : xdp

デフォルトのファイル拡張子 : xdp

Mime タイプ : application/xdp

- 4 ユーザーが XDP ファイルを保存する他のすべての Documentum リポジトリについて、手順 1 ~ 3 を繰り返します。

Documentum 管理者アカウントを使用するための Connector for EMC Documentum サービスの設定

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

http://[host]/:[port]/adminui

- 2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

- 3 サービス / LiveCycle 11 Connector for EMC Documentum / 環境設定 をクリックします。

- 4 「Documentum プリンシパル秘密鍵証明書に関する情報」領域で、次の情報を更新し、「保存」をクリックします。

ユーザー名 : [Documentum Administrator user name]

パスワード : [Documentum Administrator password]

- 5 「リポジトリ証明書の設定」をクリックして、リストからリポジトリを選択します。リストにない場合は、「追加」をクリックします。

- 6 対応するフィールドで適切な情報を指定して、「保存」をクリックします。

リポジトリ名 : [Repository Name]

リポジトリ証明書のユーザー名 : [Documentum Administrator user name]

リポジトリ証明書のパスワード : [Documentum Administrator password]

- 7 ユーザーが XDP ファイルを保存するすべてのリポジトリについて、手順 5 ~ 6 を繰り返します。

5.9.2 複数の接続ブローカーのサポートの追加

LiveCycle Configuration Manager がサポートする接続ブローカーは 1 つのみです。LiveCycle 管理コンソールを使用して、複数の接続ブローカーのサポートを追加します。

- 1 「LiveCycle 管理コンソール」を開きます。

- 2 ホーム / サービス / LiveCycle 11 Connector for EMC Documentum / 環境設定 に移動します。

- 3 「接続ブローカーのホスト名または IP アドレス」で、別の接続ブローカーのホスト名のカンマで区切りられたリストを入力します。例えば、host1、host2、host3 と入力します。

- 4 「接続ブローカーのポート番号」で、対応する接続ブローカーのポートのカンマで区切りられたリストを入力します。例えば、1489、1491、1489 と入力します。

- 5 「Save」をクリックします。

5.10 Documentum リポジトリでの XDP MIME 形式の作成

ユーザーが Documentum リポジトリから XDP ファイルを取得し、保存できるようにするには、次のタスクのいずれかを実行する必要があります。

- ユーザーがアクセスする XDP ファイルが置かれている各リポジトリに、対応する XDP 形式を作成します。
- Documentum リポジトリにアクセスするときに Documentum 管理者アカウントを使用するように、Connector for EMC Documentum サービスを設定します。この場合、Connector for EMC Documentum サービスでは必要に応じて XDP 形式が使用されます。

Documentum 管理者アカウントを使用した Documentum Content Server での XDP 形式の作成

- 1 Documentum 管理者アカウントにログインします。
- 2 「形式」をクリックし、**ファイル／新規作成／形式**を選択します。
- 3 次の情報を対応するフィールドに入力します。
名前：xdp
デフォルトのファイル拡張子：xdp
Mime タイプ：application/xdp
- 4 ユーザーが XDP ファイルを保存する他のすべての Documentum リポジトリについて、手順 1 ～ 3 を繰り返します。

Documentum 管理者アカウントを使用するための Connector for EMC Documentum サービスの設定

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。
http://[host]/:[port]/adminui
- 2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
ユーザー名：administrator
パスワード：password
- 3 サービス／**LiveCycle 11 Connector for EMC Documentum**／**環境設定**をクリックします。
- 4 「Documentum プリンシパル秘密鍵証明書に関する情報」領域で、次の情報を更新し、「保存」をクリックします。
ユーザー名：[Documentum Administrator user name]
パスワード：[Documentum Administrator password]
- 5 「リポジトリ証明書の設定」をクリックして、リストからリポジトリを選択します。リストにない場合は、「追加」をクリックします。
- 6 対応するフィールドで適切な情報を指定して、「保存」をクリックします。
リポジトリ名：[Repository Name]
リポジトリ証明書のユーザー名：[Documentum Administrator user name]
リポジトリ証明書のパスワード：[Documentum Administrator password]
- 7 ユーザーが XDP ファイルを保存するすべてのリポジトリについて、手順 5 ～ 6 を繰り返します。

5.11 Connector for IBM Content Manager の設定

注意： LiveCycle が IBM Content Manager をサポートしているのは、バージョン 8.4 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM Content Manager サービスを LiveCycle の一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、IBM Content Manager データストアに接続するようサービスを設定します。

Connector for IBM Content Manager の設定

- 1 **[appserverdomain]** フォルダにある `adobe-component-ext.properties` ファイルを開きます。ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します。
- 2 次の IBM II4C JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。

- `cmb81.jar`
- `cmbcm81.jar`
- `cmbicm81.jar`
- `cmblog4j81.jar`
- `cmbsdk81.jar`
- `cmbutil81.jar`
- `cmbutilicm81.jar`
- `cmbview81.jar`
- `cmbwas81.jar`
- `cmbwcm81.jar`
- `cmgmt`

注意： `cmgmt` は JAR ファイルではありません。Windows では、このフォルダはデフォルトで `C:\Program Files\IBM\db2cmv8` にあります。

- `common.jar`
- `db2jcc.jar`
- `db2jcc_license_cisuz.jar`
- `db2jcc_license_cu.jar`
- `ecore.jar`
- `ibmjgssprovider.jar`
- `ibmjsseprovider2.jar`
- `ibmpkcs.jar`
- `icrm81.jar`
- `jcache.jar`
- `log4j-1.2.8.jar`
- `xerces.jar`
- `xml.jar`
- `xsd.jar`

新しいシステムプロパティは次のようになります。

[component id].ext=[JAR files and/or folders]

例えば、デフォルトの DB2 Universal Database Client および II4C インストールを使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

```
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/cmgmt,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjsseprovider2.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjssprovider.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmpkcs.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/xml.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbview81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmb81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xsd.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/common.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/ecore.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/jcache.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutil81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutilicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/icmr81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cu.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cisuz.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xerces.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmblog4j81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/log4j-1.2.8.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbstdk81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwas81.jar
```

- 3 アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

これで、IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use User credentials」をログインモードとして使用して接続できます。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。

(オプション) IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use Credentials From Process Context」をログインモードとして使用して接続するには、次の手順を実行します。

「Use Credentials from process context」ログインモードを使用した接続

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。
http://[host]/:[port]/adminui
- 2 上級管理者の資格情報を使用してログインします。インストール中に設定されたデフォルト値は、次のとおりです。
ユーザー名： administrator
パスワード： password
- 3 サービス / LiveCycle 11 Connector for IBM Content Manager をクリックします。
- 4 必要なりポジトリ情報のすべてを入力して「保存」をクリックします。IBM Content Manager リポジトリ情報について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。
- 5 次のいずれかのタスクを実行します。
 - IBM Content Manager Authorization サービス (IBMCMAuthProvider) を使用して IBM Content Manager データストアのコンテンツを Workbench の Processes ビューで使用するには、この手順を続行します。IBM

Content Manager Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle 認証が上書きされるので、IBM Content Manager の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。

- Workbench の Processes ビューで IBM Content Manager データストアのコンテンツを使用するために手順 4 で指定したシステム資格情報を使用するには、LiveCycle の上級管理者の資格情報（デフォルトは **administrator** と **password**）を使用して、Workbench にログインします。これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 4 で指定したシステム資格情報は、デフォルトトリボジトリにアクセスするためのデフォルトの LiveCycle 認証サービスを使用します。

6 Administration Console にログインし、**設定 / User Management / ドメインの管理** をクリックします。

7 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意： LiveCycle データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です (LiveCycle の管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意： LiveCycle データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください (管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

8 カスタム認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- **認証プロバイダー** リストで **カスタム** を選択し、**IBMCMAuthProviderService** を選択して、**OK** をクリックします。

9 LDAP 認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- **認証プロバイダー** リストで **LDAP** を選択し、**OK** をクリックします。

10 LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックします。
- 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。
- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。(オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

上記の設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

11 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

12 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

13 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

14 **設定 / User Management / ユーザーとグループ** をクリックします。

15 LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- 1 つ以上の LiveCycle のロールを選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

16 Workbench を起動し、IBM Content Manager データストア用の次の資格情報を使用してログインします。

Username : [username]@[repository_name]

Password : [password]

これで、IBMCMConnectorService オーケストレーション可能コンポーネントのログインモードが「**Use Credentials from process context**」と選択されている場合に、Workbench の Processes ビューで IBM Content Manager データストアを使用できます。

5.12 Connector for IBM FileNet の設定

LiveCycle が IBM FileNet をサポートしているのは、バージョン 4.0、4.5 および 5.0 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM FileNet を LiveCycle の一部としてインストールした場合は、FileNet オブジェクトストアに接続するように、このサービスを設定する必要があります。

Connector for IBM FileNet を設定するには、次のいずれかの手順を選択します。

- FileNet 4.x および CEWS トランスポートを使用して Connector for IBM FileNet を設定するには :
- FileNet 4.x および EJB トランスポートを使用して Connector for IBM FileNet を設定するには :

FileNet 4.x または FileNet 5.0 および CEWS トランスポートを使用して Connector for IBM FileNet を設定するには :

- 1** [appserverdomain]/config/config.xml ファイルを探し、そのバックアップコピーを作成します。
- 2** WebLogic Server Administration Console の「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウでサーバーの名前をクリックします。
- 3** 「Configuration」タブをクリックし、「Server Start」をクリックします。
- 4** Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 5** (**FileNet 4.x の場合のみ**) 「Arguments」ボックスで、次のテキストを入力して「保存」をクリックします。

```
-Dwaspl.location= <configuration files location>
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次の Java オプションを追加します。

```
-Dwaspl.location=C:/Progra~1/FileNet/AE/CE_API/wsi
```

- 6** [appserverdomain] フォルダーにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます (ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します)。
- 7** 次の FileNet Application Engine JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。

FileNet 4.x の場合、次の JAR ファイルを追加します。

- javaapi.jar
- log4j-1.2.13.jar
- soap.jar
- wasp.jar
- builtin_serialization.jar (FileNet 4.0 のみ)
- wsdl_api.jar

- jaxm.jar
- jaxrpc.jar
- saaj.jar
- jetty.jar
- runner.jar
- p8cjares.jar
- Jace.jar
- (オプション) pe.jar

FileNet 5.0 の場合、次の JAR ファイルを追加します

- Jace.jar
- javaapi.jar
- log4j.jar
- pe.jar
- stax-api.jar
- xlpScanner.jar
- xlpScannerUtils.jar

注意：pe.jar ファイルは、デプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用する場合にのみ追加します。新しいシステムプロパティには、次の構造を反映させる必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場
合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を
入れず、末尾で改行してください。

注意：次のテキストには、改行が含まれています。このテキストを、このドキュメント以外の場所にコピーする場合は、
新しい場所に貼り付けるときに改行を削除してください。

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforIBMFileNet.ext=  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/javaapi.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/log4j-1.2.13.jar
```

8 (FileNet Process Engine Connector のみ) 次の手順で、プロセスエンジンの接続プロパティを設定します。

- テキストエディターを使用してファイルを作成し、次のコンテンツを 1 行で入力します。末尾で改行してください。

```
RemoteServerUrl = cemp:http://[contentserver_IP]:[contentengine_port]/ wsi/FNCEWS40DIME/
```


- このファイルを WcmApiConfig.properties という名前で別のフォルダーに保存して、そのフォルダーの場所を
adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

例えば、このファイルを c:\pe_config\WcmApiConfig.properties として保存して、パス c:\pe_config を adobe-
component-ext.properties ファイルに追加します。

注意：ファイル名では大文字と小文字が区別されます。

9 カスタム JAAS 設定ファイルが使用されている場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 {weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule
    required authOnLogin=true;};
FileNetP8WSI {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
FileNetP8Engine
    {weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule required
    authOnLogin=true;};
FileNetP8Server
    {weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule required
    authOnLogin=true;};
```

 カスタム JAAS 設定ファイルが使用されているかどうかは、アプリケーションサーバーの start コマンドのプロパティ -Djava.security.auth.login.config の値で識別できます。

10 (FileNet Process Engine Connector のみ) この FileNet Process Engine Connector をデプロイメントで使用する場合、設定に応じて次のいずれかの手順を実行します。

- カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使用する場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
```

- カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使わない場合、テキストエディターを使用して次の内容を含むファイルを作成します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
```

このファイルを jaas.conf.WSI として保存して、その場所を、WebLogic Server start コマンドに次の Java オプションとして追加します。

```
-Djava.security.auth.login.config=<JAAS file location>
```

例えば、このファイルを C:\pe_config\jaas.conf.WSI として保存して、次の Java オプションを追加します。

```
-Djava.security.auth.login.config=C:/pe_config/jaas.conf.WSI
```

11 config.xml ファイルを開き、管理対象サーバーのユーザードメインの <credential-encrypted> 値を探します。このエレメントに値が設定されていない場合は、手順 1 で作成した config.xml ファイルのバックアップコピーを開き、<credential-encrypted> 値をコピーします。

12 新しい config.xml ファイルに値を貼り付けてから、このファイルを保存して閉じます。

13 アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

14 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

```
http://[host]:[port]/adminui
```

15 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

16 サービス / LiveCycle 11 Connector for IBM FileNet をクリックします。

17 必要なすべての FileNet リポジトリ情報を入力し、「リポジトリサービスプロバイダー」の下で「IBM FileNet リポジトリプロバイダー」を選択します。

オプションのプロセスエンジンサービスをデプロイメントで使用する場合、「プロセスエンジン設定」領域で「プロセスエンジンコネクタサービスを使用」を選択し、プロセスエンジンの各設定を指定します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

注意：この手順で指定する資格情報は、IBM FileNet リポジトリサービスを後で起動するときに検証されます。資格情報が無効な場合はエラーが発生し、サービスは起動されません。

18 「保存」をクリックし、サービス / アプリケーションおよびサービス / サービスの管理に移動します。

19 次の各サービスの横にあるチェックボックスを選択して「開始」をクリックします。

- IBMFileNetAuthProviderService
- IBMFileNetContentRepositoryConnector
- IBMFileNetRepositoryProvider
- IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合)

サービスのいずれかが正常に開始されない場合は、Process Engine 設定を確認します。

20 次のいずれかの操作を行います。

- FileNet Authorization サービス (IBMFileNetAuthProviderService) を使用して Workbench の Resources ビューで FileNet オブジェクトストアからコンテンツを表示するには、この手順を続行します。FileNet Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle 認証が上書きされるので、FileNet の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
- LiveCycle リポジトリを使用するには、LiveCycle の上級管理者の資格情報 (デフォルトは **administrator** と **password**) を使用して Workbench にログインします。この場合、手順 16 で指定した資格情報は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの LiveCycle 認証サービスを使用します。

21 アプリケーションサーバーを再起動します。

22 Administration Console にログインし、**設定 / User Management / ドメインの管理** をクリックします。

23 「**新規エンタープライズドメイン**」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

LiveCycle データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

24 カスタム認証プロバイダーを追加します。

- 「**認証を追加**」をクリックします。
- 「**認証プロバイダー**」リストで「**カスタム**」を選択します。
- 「**IBMFileNetAuthProviderService**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

25 LDAP 認証プロバイダーを追加します。

- 「**認証を追加**」をクリックします。
- 「**認証プロバイダー**」リストで「**LDAP**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

26 LDAP ディレクトリを追加します。

- 「**ディレクトリを追加**」をクリックし、「**プロファイル名**」ボックスに一意の名前を入力して、「**次へ**」をクリックします。
- 「**サーバー**」、「**ポート**」、「**SSL**」、「**バインド**」および「**ページに次の情報を入力**」オプションの値を指定します。「**バインド**」オプションで「**ユーザー**」を選択する場合は、「**名前**」と「**パスワード**」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「**BaseDN を取得**」を選択します。完了したら、「**次へ**」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「**次へ**」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「**次へ**」をクリックします。設定について詳しくは、ページの右上隅にある「**ヘルプ**」リンクをクリックしてください。

27 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

28 新しいエンタープライズドメインを選択し、「**今すぐ同期**」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

29 設定 / User Management / ユーザーとグループ をクリックします。

30 LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1 つ以上のユーザーを選択し、「**ロールをアサイン**」をクリックします。
- 1 つ以上の LiveCycle のロールを選択し、「**OK**」をクリックします。
- 「**OK**」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

31 Workbench を起動して、IBM FileNet リポジトリ用の次の資格情報を使用してログインします。

ユーザー名 : [username]@[repository_name]

パスワード : [password]

これで、FileNet オブジェクトストアが Workbench の Resources ビューに表示されます。**username@repository name** を使用してログインしない場合、Workbench では、手順 16 で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

32 (オプション) Connector for IBM FileNet の LiveCycle サンプルをインストールする場合、**Samples** という名前の FileNet オブジェクトストアを作成してその中にインストールします。

Connector for IBM FileNet を設定したら、FileNet リポジトリを使用した Workbench の機能の設定について、LiveCycle 管理ヘルプを参照することをお勧めします。

5.13 UNIX および Linux 用の追加インストール

UNIX および Linux システムでは、ConvertPDFservice と XMLFormService にいくつかのシステムライブラリを追加する必要があります。必要なライブラリのリストの『堅牢化とセキュリティ』ガイドの LiveCycle UNIX システムライブラリの依存関係を参照してください。

第 6 章：高度な実稼働環境の設定

ここでは、Adobe® LiveCycle® Output 11、Adobe® LiveCycle® Forms Standard 11 および PDF Generator の高度なチューニングについて説明します。この節に記載されている作業は、上級アプリケーションサーバー管理者が実稼働システムに対してのみ行ってください。

6.1 Output および Forms のプールサイズの設定

PoolMax の現在のデフォルト値は 4 です。実際に設定する値は、使用環境のハードウェア構成と予想される使用量によって異なります。

最適な使用方法としては、PoolMax の下限を使用可能な CPU の数以上に設定し、上限はサーバーの負荷パターンによって決めることをお勧めします。一般的に、上限はサーバー上にある CPU コアの数の 2 倍に設定します。

既存の PoolMax 値の変更

1 テキストエディターを使用して、WebLogic 起動スクリプトを編集します。

2 ConvertPdf の以下のプロパティを追加します。

- com.adobe.convertpdf.bmc.POOL_MAX=[new value]
- com.adobe.convertpdf.bmc.MAXIMUM_REUSE_COUNT=5000
- com.adobe.convertpdf.bmc.REPORT_TIMING_INFORMATION=true
- com.adobe.convertpdf.bmc.CT_ALLOW_SYSTEM_FONTS=true

3 XMLFM の以下のプロパティを追加します。

- com.adobe.xmlform.bmc.POOL_MAX=[new value]
- com.adobe.xmlform.bmc.MAXIMUM_REUSE_COUNT=5000
- com.adobe.xmlform.bmc.REPORT_TIMING_INFORMATION=true
- com.adobe.xmlform.bmc.CT_ALLOW_SYSTEM_FONTS=true

6.2 PDF Generator

PDF Generator では、一部の種類の入力ファイルについて、複数の PDF 変換を同時に行うことができます。これは、ステートレスセッションビーンを使用して実行されます。

6.2.1 EJB プールサイズの設定

以下の種類の入力ファイルについて個別のプールサイズを適用するために、4 種類のステートレスセッションビーンがあります。

- Adobe PostScript® および Encapsulated PostScript (EPS) ファイル
- 画像ファイル (BMP、TIFF、PNG、JPEG ファイルなど)
- OpenOffice ファイル

- Microsoft Office ファイル、Photoshop® ファイル、PageMaker® ファイル、FrameMaker® ファイルなど、その他すべての種類のファイル (HTML ファイルを除く)

HTML から PDF への変換時のプールサイズは、ステートレスセッションビーンでは管理されません。

PostScript および EPS ファイルと画像ファイルのデフォルトのプールサイズは 3 に設定され、OpenOffice とその他の種類のファイル (HTML を除く) のデフォルトのプールサイズは 1 に設定されます。

CPU の数や各 CPU 内のコアの数など、使用しているサーバーハードウェア構成に基づいて、PS/EPS と画像のプールサイズを別の値に設定できます。ただし、PDF Generator を正常に機能させるためには、OpenOffice とその他の種類のファイルのプールサイズを 1 のままにする必要があります。

この節では、サポートされるアプリケーションサーバーのそれぞれについて、PS2PDF (PS から PDF への変換) と Image2PDF (画像から PDF への変換) のプールサイズを設定する方法を説明します。

以下の説明は、次の 2 つの LiveCycle アプリケーション EAR ファイルがアプリケーションサーバーにデプロイされていることを前提としています。

- adobe-livecycle-weblogic.ear
- adobe-livecycle-native-weblogic-[platform].ear

この [platform] は、オペレーティングシステムに応じて、次のいずれかの文字列に置き換えられます。

- (Windows) x86_win32
- (Linux) x86_linux
- (SunOS™) sparc_sunos

PS2PDF および Image2PDF のプールサイズの設定

LiveCycle 管理ヘルプの「サービスの管理」の節にある、「Distiller サービスの設定」および「Generate PDF サービスの設定」を参照してください。

6.3 Windows での CIFS の有効化

LiveCycle をホストする Windows Server マシンを手動で設定する必要があります。

注意: サーバーには、静的 IP アドレスが必要です。

Windows マシンで、次の作業を行う必要があります。

6.3.1 NetBIOS over TCP/IP の有効化

LiveCycle サーバーに接続するクライアントの要求がサーバーホスト名で解決されるように、NetBIOS over TCP/IP を有効にする必要があります。

- 1 ローカルエリアの接続プロパティダイアログボックスの「全般」タブで、「インターネットプロトコル」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
- 2 インターネットプロトコル (TCP/IP) のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、サーバーに静的 IP アドレスがあることを確認します。「詳細設定」をクリックします。
- 3 TCP/IP 詳細設定ダイアログボックスで、「WINS」タブを選択して「NetBIOS over TCP/IP を有効にする」を選択します。

6.3.2 他の IP アドレスの追加

- 1 ローカルエリアの接続プロパティダイアログボックスの「全般」タブで、「インターネットプロトコル」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
- 2 インターネットプロトコル (TCP/IP) のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、サーバーに静的 IP アドレスがあることを確認します。「詳細設定」をクリックします。
- 3 TCP/IP 詳細設定ダイアログボックスで、「IP 設定」タブを選択して「追加」をクリックします。
- 4 静的 IP アドレスを指定して「追加」をクリックします。

6.3.3 ファイルとプリンターの共有の無効化 (Windows Server 2008 のみ)

- 「ネットワークの設定」に移動し、「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンター共有」の選択を解除して、「適用」をクリックします。

第7章：付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール

7.1 概要

LiveCycle には、インストールプログラム用にコマンドラインインターフェイス (CLI) が用意されています。CLI は、LiveCycle の上級ユーザーが使用したり、インストールプログラムのグラフィカルユーザーインターフェイス (GUI) がサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。CLI はコンソールモードで実行します。1つのインタラクティブセッションで、すべてのインストール操作を行うことができます。

CLI インストールオプションを使用してモジュールをインストールする前に、該当する準備ガイド (新規のシングルサーバーインストール、クラスターセットアップまたはアップグレード) に従って、LiveCycle の実行に必要な環境の準備が整っていることを確認します。LiveCycle のドキュメント一式は http://www.adobe.com/go/learn_lc_documentation_11_jp から入手できます。

インストール手順の概要については、6 ページの「3.1 事前準備」を参照してください。

インストールプロセスを開始したら、画面の指示に従ってインストールオプションを選択します。各プロンプトに応答しながらインストールを進めてください。

注意：前の手順で選択した内容を変更する場合は、back と入力します。quit と入力すれば、いつでもインストールをキャンセルできます。

7.2 LiveCycle のインストール

1 コマンドプロンプトを開き、実行可能なインストーラーが含まれるインストールメディアまたはハードディスクのフォルダーに移動します。

- (Windows) server¥Disk1¥InstData¥Windows_64¥VM
- (Linux) server/Disk1/InstData/Linux/NoVM
- (Solaris) server/Disk1/InstData/Solaris/NoVM

2 コマンドプロンプトを開いて、次のコマンドを実行します。

- (Windows) install.exe -i console
- (Windows 以外) ./install.bin -i console

注意：-i console オプションを指定せずにコマンドを入力すると、GUI ベースのインストーラーが起動します。

3 次の表の説明に従って、プロンプトに応答します。

プロンプト	説明
Choose Locale	インストールで使用するロケールを値 1 ~ 2 を入力して選択します。デフォルト値を選択するには、 Enter キーを押します。 English、または日本語を選択できます。デフォルトの言語は日本語です。
Choose Install Folder	Destination 画面で、 Enter キーを押してデフォルトディレクトリを使用するか、新しいインストールディレクトリの場所を入力します。 デフォルトのインストールフォルダーは次のとおりです。 (Windows) : C:\%Adobe%\Adobe LiveCycle ES4 (Windows 以外) : /opt/adobe/adobe_lifecycle_es4 ディレクトリ名にアクセント記号付きの文字を使用しないでください。アクセント記号付きの文字を使用すると、CLI によってアクセントが無視され、アクセント記号付きの文字が変更されてからディレクトリが作成されます。
LiveCycle Server License Agreement	Enter キーを押して、使用許諾契約のページに目を通します。 契約に同意する場合は、Y を入力し、 Enter キーを押します。
Pre-Installation Summary	選択したインストール内容を確認し、その内容でインストールを続行する場合は Enter キーを押します。 前の手順に戻って設定を変更するには、back と入力します。
Ready To Install	インストーラーによってインストールディレクトリが表示されます。 Enter キーを押すと、インストールプロセスが開始します。
Installing	インストール中、進行状況バーによりインストールの進行状況が示されます。
Configuration Manager	Enter キーを押すと、LiveCycle のインストールが完了します。 Configuration Manager を GUI モードで実行するには、次のスクリプトを呼び出します。 (Windows) : C:\%Adobe%\Adobe LiveCycle ES4\configurationManager\bin\ConfigurationManager.bat (Windows 以外) : /opt/adobe/adobe_lifecycle_es4/configurationManager/bin/ConfigurationManager.sh
Installation Complete	インストールの完了画面にインストールのステータスと場所が表示されます。 Enter キーを押すと、インストーラーが終了します。

7.3 エラーログ

エラーが発生した場合は、次のインストールのログディレクトリで `install.log` を確認できます。

- (Windows) [LiveCycle root]\log
- (Linux、Solaris) [LiveCycle root]/log

インストール中に発生するおそれのあるエラーについては、適切なトラブルシューティングガイドを参照してください。

7.4 コンソールモードでの LiveCycle のアンインストール

注意: コマンドラインオプションを使用して LiveCycle をインストールした場合は、コマンドラインからアンインストーラーを実行するだけで LiveCycle ES4 をアンインストールできます。サイレントアンインストールを実行する場合は、「-i console」フラグを省略します。

1 コマンドプロンプトを開き、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリに移動します。

注意: UNIX システムの場合は、ディレクトリ名にスペースが含まれているので、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリには手動で移動する必要があります。

- (Windows) `cd C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES4\Uninstall_Adobe LiveCycle ES4`
- (UNIX 系のシステム) `cd /opt/adobe/adobe_livecycle_es4/Uninstall_Adobe Livecycle ES4`

2 プロンプトで次のコマンドを入力し、Enter キーを押します。

- (Windows) `Uninstall Adobe LiveCycle ES4-i console`
- (Linux、Solaris) `./Uninstall Adobe Livecycle ES4 -i console`

3 画面の指示に従って操作します。

プロンプト	説明
LiveCycle ES4 のアンインストール	Enter キーを押すと、アンインストールが続行します。 quit と入力すると、アンインストールプログラムが終了します。
Uninstalling... Uninstall Complete	アンインストールが開始したら、残りのアンインストールプロセスが完了し、カーソルがプロンプトに戻ります。 一部の項目については削除されない可能性があります。また、LiveCycle のインストール後に作成されたフォルダーは削除されません。これらのファイルやフォルダーは手動で削除する必要があります。

第 8 章：付録 - Configuration Manager コマンドラインインターフェイス

LiveCycle には、Configuration Manager のコマンドラインインターフェイス（CLI）が用意されています。CLI は、LiveCycle の上級ユーザーが使用したり、Configuration Manager のグラフィカルユーザーインターフェイス（GUI）がサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。

8.1 操作の順序

Configuration Manager CLI は、GUI バージョンの Configuration Manager の操作と同じ順序で実行する必要があります。CLI の操作は以下の順序で実行してください。

- 1 LiveCycle を設定します。
- 2 CRX の設定
- 3 アプリケーションサーバーポートポートを検証します。
- 4 データベース接続を検証します。
- 5 アプリケーションサーバーを設定します。
- 6 アプリケーションサーバーの構成を検証します。
- 7 LiveCycle をデプロイします。
- 8 LiveCycle を初期化します。
- 9 LiveCycle を検証します。
- 10 LiveCycle モジュールをデプロイします。
- 11 LiveCycle モジュールデプロイメントを検証します。
- 12 PDF Generator のシステム準備設定を確認します。
- 13 PDF Generator に管理者ユーザーを追加します。
- 14 Connector for IBM Content Manager を設定します。
- 15 Connector for IBM FileNet を設定します。
- 16 Connector for EMC Documentum を設定します。
- 17 Connector for SharePoint を設定します。

8.2 コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル

Configuration Manager CLI には、LiveCycle 環境用に定義したプロパティを含むプロパティファイルが必要です。プロパティファイルのテンプレートである `cli_propertyFile_template.txt` は、**[LiveCycle root]/configurationManager/bin** フォルダにあります。このファイルのコピーを作成して、値を編集する必要があります。このファイルは、使用する Configuration Manager の操作に基づいてカスタマイズできます。次の節で、必要なプロパティとその値について説明します。

プロパティファイルは、インストールの状態に応じて作成する必要があります。次のいずれかの方法を使用します。

- プロパティファイルを作成し、インストールシナリオおよび構成シナリオに応じて値を設定します。
- プロパティファイル `cli_propertyFile_template.txt` をテンプレートとして使用し、使用する Configuration Manager 操作に基づいて値を編集します。
- Configuration Manager の GUI を使用し、GUI バージョンによって作成されたプロパティファイルを CLI バージョンのプロパティファイルとして使用します。[LiveCycle root]/configurationManager/bin/ConfigurationManager.bat/sh ファイルを実行すると、`userValuesForCLI.properties` ファイルが [LiveCycle root]/configurationManager/config ディレクトリに作成されます。このファイルを Configuration Manager CLI の入力として使用できます。

注意：CLI プロパティファイルでは、Windows パスのディレクトリ区切り文字 (¥) にエスケープ文字 (¥) を使用する必要があります。例えば、指定する Fonts フォルダが `C:¥Windows¥Fonts` である場合、Configuration Manager CLI スクリプトでは `C:¥¥Windows¥¥Fonts` と入力する必要があります。

注意：次のモジュールは、ALC-LFS-ContentRepository に依存します。`cli_propertyFile_template.txt` をテンプレートとして使用する場合は、ALC-LFS-ContentRepository を `excludedSolutionComponents` リストから削除するか、あるいは次の LFS を `excludedSolutionComponents` リストに追加してください。

- ALC-LFS-ProcessManagement
- ALC-LFS-CorrespondenceManagement
- ALC-LFS-ContentRepository
- ALC-LFS-MobileForms
- ALC-LFS_FormsManager

8.3 一般的な設定プロパティ

8.3.1 共通のプロパティ

共通のプロパティは以下のとおりです。

WebLogic および WebSphere 固有のプロパティ：アプリケーションサーバーの設定、LiveCycle のデプロイ、アプリケーションサーバートポロジの検証およびアプリケーションサーバー設定の検証操作に必要です。

LiveCycle Server 固有のプロパティ：LiveCycle の初期化および LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作に必要です。

以下の操作に必要なプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle を初期化します。
- LiveCycle コンポーネントをデプロイします。

プロパティ	値	説明
<code>targetServer.topologyType</code>	server または cluster	LiveCycle にデプロイするアプリケーションサーバートポロジの種類。
<code>targetServer.name</code>	文字列	アプリケーションサーバー (管理サーバー) ノードまたはクラスターに割り当てられた名前。
<code>targetServer.adminHost</code>	文字列 デフォルトは localhost です。	Admin サーバーがインストールされているサーバーのホスト名。

プロパティ	値	説明
targetServer.adminPort	整数値	管理サーバーが SOAP 要求をリスンするポートのポート番号。
targetServer.adminUserID	文字列	アプリケーションサーバーへのアクセスに使用する管理ユーザー ID。
targetServer.adminPassword	文字列	WebLogic 管理ユーザー ID に関連付けられているパスワード。
localServer.appServerRootDir	(Windows) WebLogic 11g C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3 (Linux、Solaris) WebLogic 11g /opt/Oracle/Middleware/wlserver_10.3	ローカルに設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイしたり、LiveCycle をデプロイするリモートサーバーと通信するために使用したりするディレクトリ)。
targetServer.appServerRootDir	デフォルト : (Windows) WebLogic 11g C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3 (Linux、Solaris) WebLogic 11g /opt/Oracle/Middleware/wlserver_10.3	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
LiveCycle サーバー固有のプロパティ		
LCHost	文字列	LiveCycle をデプロイするサーバーのホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle のデプロイ先の Web ポート番号。
excludedSolutionComponents	文字列。次の値がサポートされています。 ALC-LFS-Forms、 ALC-LFS-ConnectorEMCDocumentum、 ALC-LFS-ConnectorIBMFileNet、 ALC-LFS-ConnectorIBMContentManager、 ALC-LFS-DigitalSignatures、 ALC-LFS-DataCapture、 ALC-LFS-Output、 ALC-LFS-PDFGenerator、 ALC-LFS-ProcessManagement、 ALC-LFS-ReaderExtensions、 ALC-LFS-RightsManagement ALC-LFS-CorrespondenceManagement、 ALC-LFS-ContentRepository、 ALC-LFS-MobileForms、 ALC-LFS_FormsManager	(オプション) 構成しない LiveCycle モジュールを指定します。構成対象から除外するモジュールが複数ある場合はコマンドで区切ります。
includeCentralMigrationService	true: サービスを含める false: サービスを含めない	Central Migration Bridge Service を含めるまたは除外するためのプロパティ。
CRX Content レポジトリ 次のプロパティは、cli_propertyFile_crx_template.txt ファイルで指定されます。		
contentRepository.rootDir		CRX レポジトリのパス。

8.3.2 LiveCycle の構成プロパティ

以下のプロパティは LiveCycle の構成操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
AdobeFontsDir	文字列	Adobe サーバフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバからアクセスできるようにする必要があります。
customerFontsDir	文字列	カスタマーフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバからアクセスできるようにする必要があります。
systemFontsDir	文字列	システムフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバからアクセスできるようにする必要があります。
LCTempDir	文字列	一時ディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバからアクセスできるようにする必要があります。
LCGlobalDocStorageDir	文字列	グローバルドキュメントストレージのルートディレクトリ。 長期間有効なドキュメントを保存したり、それらをすべてのクラスターノードで共有したりするために使用する、NFS 共有ディレクトリのパスを指定します。 このパスは、デプロイ先のサーバからアクセスできるようにする必要があります。
EnableDocumentDBStorage	true または false デフォルト : false	永続ドキュメントについて、データベースへのドキュメントの保存を有効または無効にします。 データベースへのドキュメントの保存を有効にしても、GDS のファイルシステムディレクトリは必要です。

8.3.3 アプリケーションサーバの設定および検証のプロパティ

8.3.3.1 WebLogic の設定および検証のプロパティ

Configuration Manager では、必要に応じて、WebLogic アプリケーションサーバを LiveCycle で設定および検証できます。

以下の操作に適用されるプロパティは次の表のとおりです。

- アプリケーションサーバの構成
- アプリケーションサーバポートプロジの検証
- アプリケーションサーバ構成の検証
- データベース接続の検証

8.3.3.2 アプリケーションサーバーのプロパティ

プロパティ	値	説明
アプリケーションサーバー固有のプロパティセクションを設定する必要があります。詳しくは、「共通のプロパティ」を参照してください。		
jvm.initialHeapSize	デフォルト： 256	JVM の初期ヒープサイズ (MB)。
jvm.maxHeapSize	デフォルト： 2048	JVM の最大ヒープサイズ (MB)。
WebLogic および WebSphere クラスターのみ		
cache.useUDP	true	LiveCycle が UDP を使用してキャッシュを実装する場合は、値を true に設定します。 LiveCycle が TCP を使用してキャッシュを実装する場合は、値を false に設定します。
cache.udp.port	デフォルト： 33456	プライマリコンピューターが UDP ベースのキャッシュ通信に使用するポート番号。 cache.useUDP=true の場合にのみ設定します。
cache.tcpip.primaryhost	文字列	プライマリアプリケーションサーバーがインストールされているコンピューターのホスト名。 cache.useUDP!=true の場合にのみ設定します。
cache.tcpip.primaryport	デフォルト： 22345	プライマリアプリケーションサーバーコンピューターが TCP ベースのキャッシュ通信に使用するポートのポート番号。 cache.useUDP!=true の場合にのみ設定します。
cache.tcpip.secondaryhost	文字列	セカンダリアプリケーションサーバーがインストールされているコンピューターのホスト名。 cache.useUDP!=true の場合にのみ設定します。
cache.tcpip.secondaryport	デフォルト： 22345	セカンダリアプリケーションサーバーコンピューターが TCP ベースのキャッシュ通信に使用するポートのポート番号。 cache.useUDP!=true の場合にのみ設定します。
WebLogic サーバーのコアクラスパス構成		
classpath.targetServer.javaHome	文字列	ターゲットアプリケーションサーバーの構成では、ターゲットアプリケーションサーバーの実行で使用する Java Home の場所を指定する必要があります。 このパスは、構成するサーバーからアクセスする必要があります。
classpath.targetServer.pop3JarPath	文字列	ターゲットアプリケーションサーバーがアクセスできる Pop3 JAR ファイルのパス。このパスは、構成するサーバーからアクセスする必要があります。
データソース構成		

プロパティ	値	説明
datasource.dbType	次のいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • oracle • db2 • sqlserver 	LiveCycle で使用するよう設定するデータベースの種類。
datasource.dbName	文字列	データベースの名前。
datasource.dbHost	文字列	データベースがあるサーバーのホスト名または IP アドレス。
datasource.dbPort	整数値	LiveCycle がデータベースとの通信に使用するデータベースポート。
datasource.dbUser	文字列	LiveCycle がデータベースへのアクセスに使用するユーザー ID。
datasource.dbPassword	文字列	データベースユーザー ID に関連付けられているパスワード。
datasource.target.driverPath	文字列	アプリケーションサーバーの lib ディレクトリ内の JDBC ドライバー。 このパスは、設定するサーバーからアクセスできる、有効なパスである必要があります。
datasource.local.driverPath	文字列	ローカル JDBC ドライバー。この値は、直接データベース接続のテストにのみ使用します。

8.3.4 LiveCycle のデプロイプロパティ

LiveCycle のデプロイプロパティは LiveCycle のデプロイ操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
詳しくは、62 ページの「 8.3.1 共通のプロパティ 」を参照してください		
deployment.includeIVS	false	IVS EAR ファイルをデプロイメントに含めるかどうかを指定します。 IVS EAR ファイルは実稼働環境に含めないようにすることをお勧めします。

8.3.5 LiveCycle の初期化プロパティ

LiveCycle の初期化プロパティは LiveCycle の初期化操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
詳しくは、62 ページの「 8.3.1 共通のプロパティ 」を参照してください		

8.3.6 LiveCycle コンポーネントのデプロイプロパティ

以下の操作に適用されるプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle コンポーネントのデプロイ
- LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証
- LiveCycle サーバーの検証

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、「共通のプロパティ」を参照してください		
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。

8.3.7 PDF Generator 用の管理者ユーザーの追加

以下のプロパティは、PDF Generator 用の管理者ユーザーを追加する場合にのみ適用されます。これらのプロパティは、cli_propertyFile_pdfg_template.txt にあります。

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCServerMachineAdminUser	文字列	LiveCycle をホストする運用システムの管理者ユーザーのユーザー ID。
LCServerMachineAdminUserPasswd	文字列	LiveCycle をホストする運用システムの管理者ユーザーのパスワード。

8.3.8 Connector for IBM Content Manager の設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。
jboss.clientjar.location	文字列	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。

プロパティ	値	説明
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureIBMCM	true または false	Connector for IBM Content Manager を設定するには、true を指定します。
IBMCMClientPathDirectory	文字列	IBM Content Manager クライアントのインストールディレクトリの場所。
DataStoreName	文字列	接続する IBM Content Manager サーバーのデータストアの名前。
IBMCMUsername	文字列	IBM Content Manager 管理者ユーザーに割り当てるユーザー名。このユーザー ID は、IBM Content Manager へのログインに使用されます。
IBMCMPassword	文字列	IBM Content Manager 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、IBM Content Manager へのログインに使用されます。
ConnectionString	文字列	IBM Content Manager に接続するための接続文字列内に使用される追加の引数 (オプション)。

8.3.9 Connector for IBM FileNet を設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。
jboss.clientjar.location	文字列	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureFileNetCE	true または false	Connector for IBM FileNet を設定するには、true を指定します。
FileNetConfigureCEVersion	文字列	設定する FileNet クライアントのバージョン。FileNetClientVersion4.0 または FileNetClientVersion5.0 を指定します。
FileNetCEClientPathDirectory	文字列	IBM FileNet Content Manager クライアントのインストールディレクトリの場所。
ContentEngineName	文字列	IBM FileNet Content Engine がインストールされているマシンのホスト名または IP アドレス。

プロパティ	値	説明
ContentEnginePort	文字列	IBM FileNet Content Engine が使用するポート番号。
CredentialProtectionSchema	CLEAR または SYMMETRIC	保護のレベルを指定します。
EncryptionFileLocation	文字列	暗号化ファイルの場所。これは、CredentialProtectionSchema 属性に対して SYMMETRIC オプションを選択した場合にのみ必要です。 パス区切り文字には、スラッシュ (/) または二重の円記号 (\\) を使用します。
DefaultObjectStore	文字列	Connector for IBM FileNet Content Server のオブジェクトストアの名前。
FileNetContentEngineUsername	文字列	IBM FileNet Content Server に接続するためのユーザー ID。 読み取りアクセス権限を持つユーザー ID では、デフォルトのオブジェクトストアへの接続が許可されます。
FileNetContentEnginePassword	文字列	IBM FileNet ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、デフォルトのオブジェクトストアに接続する際に使用されます。
ConfigureFileNetPE	true または false	Connector for IBM FileNet を設定するには、true を指定します。
FileNetPEClientPathDirectory	文字列	IBM FileNet クライアントのインストールディレクトリの場所。
FileNetProcessEngineHostname	文字列	プロセスルーターのホスト名または IP アドレス。
FileNetProcessEnginePortNumber	整数値	IBM FileNet Content Server のポート番号。
FileNetPERouterURLConnectionPoint	文字列	プロセスルーターの名前。
FileNetProcessEngineUsername	文字列	IBM FileNet Content Server に接続するためのユーザー ID。
FileNetProcessEnginePassword	文字列	IBM FileNet Content Server に接続するためのパスワード。

8.3.10 Connector for EMC Documentum の設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。

プロパティ	値	説明
jboss.clientjar.location	文字列	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureDocumentum	true または false	Connector for EMC Documentum を設定するには、true を指定します。
DocumentumClientVersion	文字列	設定する EMC Documentum クライアントのバージョン。DocumentumClientVersion6.5 または DocumentumClientVersion6.0 を指定します。
DocumentumClientPathDirectory	文字列	EMC Documentum クライアントのインストールディレクトリの場所。
ConnectionBrokerHostName	文字列	EMC Documentum Content Server のホスト名または IP アドレス。
ConnectionBrokerPortNumber	文字列	EMC Documentum Content Server のポート番号。
DocumentumUsername	文字列	EMC Documentum Content Server に接続するためのユーザー ID。
DocumentumPassword	文字列	EMC Documentum Content Server に接続するためのパスワード。
DocumentumDefaultRepositoryName	文字列	MC Documentum Content Server のデフォルトリポジトリの名前。

8.3.11 Connector for Microsoft SharePoint の設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。
jboss.clientjar.location	文字列	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureSharePoint	true または false	Connector for Microsoft SharePoint を設定するには、true を指定します。
SharePointServerAddress	文字列	SharePoint Server のホスト名または IP アドレス。
SharePointUsername	文字列	SharePoint Server に接続するためのユーザー ID。

プロパティ	値	説明
SharePointPassword	文字列	SharePoint Server に接続するためのパスワード。
SharePointDomain	文字列	SharePoint Server のドメイン名。
ConnectionString	文字列	SharePoint Server に接続するための接続文字列内に使用される追加の引数 (オプション)。

8.3.12 コマンドラインインターフェイスの使用

プロパティファイルを設定したら、[LiveCycle root]/configurationManager/bin フォルダに移動する必要があります。

Configuration Manager CLI のコマンドの詳細な説明を表示するには、ConfigurationManagerCLI help<command name> と入力します。

8.3.12.1 LiveCycle の構成 CLI の使用

LiveCycle の構成操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

8.3.12.2 CRX CLI の使用の設定

CRX リポジトリの設定では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureCRXRepository -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

8.3.12.3 アプリケーションサーバートポロジの検証 CLI の使用

アプリケーションサーバートポロジの検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerTopology -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password>：コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

8.3.12.4 データベース接続の検証 CLI の使用

データベース接続の検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateDBConnectivity -f <propertyFile> -datasource_dbPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

- `-datasource_dbPassword <password>` : コマンドラインでデータベースユーザーパスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの `datasource.dbPassword` プロパティが上書きされます。

8.3.12.5 アプリケーションサーバーの設定 CLI の使用

アプリケーションサーバーの設定操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureApplicationServer -targetServer_AdminPassword <password> -f <propertyFile> [-skip  
<configurationsToSkipList>]
```

説明 :

- `-targetServer_AdminPassword <password>` : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの `targetServer_AdminPassword` プロパティが上書きされます。
- `-f <propertyFile>` : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- `-skip <configurationsToSkipList>` : 構成しないアプリケーションサーバーコンポーネントを指定できるオプションのパラメーターです。構成対象から除外するコンポーネントが複数ある場合はコンマで区切ります。有効なオプションは、`Datasource` および `Core` です。

8.3.12.6 アプリケーションサーバー設定の検証 CLI の使用

アプリケーションサーバー構成の検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerConfigurations -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明 :

- `-f <propertyFile>` : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- `-targetServer_AdminPassword <password>` : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの `targetServer.adminPassword` プロパティが上書きされます。

8.3.12.7 (WebSphere および WebLogic のみ) LiveCycle のデプロイ CLI の使用

LiveCycle のデプロイ操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明 :

- `-f <propertyFile>` : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要 : LiveCycle のデプロイ操作を完了したら、アプリケーションサーバーを再起動する必要があります。

8.3.12.8 設定済みの EAR ファイルの手動デプロイ

設定済みの EAR ファイルを手動でデプロイするための詳細手順は、JBoss アプリケーションサーバーへのデプロイを参照してください。

8.3.12.9 LiveCycle の初期化 CLI の使用

LiveCycle の初期化操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
initializeLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f<propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

8.3.12.10 LiveCycle サーバーの検証 CLI の使用

LiveCycle サーバーの検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleServer -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

説明：

- -f<propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -LCAdminPassword <password>：コマンドライン上で管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

8.3.12.11 LiveCycle コンポーネントのデプロイ CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycleComponents -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

説明：

- -f<propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -LCAdminPassword <password>：コマンドライン上で管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

8.3.12.12 LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証 CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleComponentDeployment -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

説明：

- -f<propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -LCAdminPassword <password>：コマンドライン上で管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

8.3.12.13 PDF Generator のシステム準備設定を確認します。

PDF Generator のシステム準備設定の確認操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
pdfg-checkSystemReadiness
```

8.3.12.14 PDF Generator の管理者ユーザーの追加

PDF Generator の管理者ユーザーの追加操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
pdfg-addAdminUser -f <propertyFile>
```

説明：

- `-f <propertyFile>`：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

8.3.12.15 Connector for IBM Content Manager の設定

Connector for IBM Content Manager の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

`IBMCM-configurationCLI -f <propertyFile>`

説明：

- `-f <propertyFile>`：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要： `[LiveCycle root]¥configurationManager¥bin¥` ディレクトリにある `cli_propertyFile_ecm_ibmcm_template.txt` という名前の `<propertyFile>` を修正します。

- 1 `[LiveCycle root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic` の `adobe-component-ext.properties` ファイルを次の `[appserver root]/users_projects/domain/[appserverdomain]` ディレクトリにコピーします。
- 2 アプリケーションサーバーの再起動
- 3 LiveCycle 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
 - IBMCMAuthProviderService
 - IBMCMConnectorService

8.3.12.16 Connector for IBM FileNet の設定

Connector for IBM FileNet の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

`filenet-configurationCLI -f <propertyFile>`

説明：

- `-f <propertyFile>`：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要： `[LiveCycle root]¥configurationManager¥bin¥` ディレクトリにある `cli_propertyFile_ecm_filenet_template.txt` という名前の `<propertyFile>` を修正します。

Connector for IBM Content Manager の設定を完了するには、次の手順を手動で実行してください。

- 1 `[LiveCycle root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic` の `adobe-component-ext.properties` ファイルを次の `[appserver root]/users_projects/domain/[appserverdomain]` ディレクトリにコピーします。
- 2 カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使用する場合、カスタム JAAS ファイルを探し、そのファイルに `[LiveCycle root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic` ディレクトリにある `jaas.conf.WSI` ファイルの内容を追加します。そうしない場合は、`jaas.conf.WSI` ファイルの場所を WebLogic Server の `start` コマンドに次の Java オプションとして追加します。
`-Djava.security.auth.login.config=[LiveCycle root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic/jaas.conf.WSI.`
- 3 (**FileNet 4.x の場合のみ**) Java オプション `-Dwasplocation=[FileNetClient root]/wsi` をアプリケーションサーバー起動オプションに追加します。
- 4 アプリケーションサーバーを再起動します。
- 5 LiveCycle 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
 - IBMFileNetAuthProviderService

- IBMFileNetContentRepositoryConnector
- IBMFileNetRepositoryProvider
- IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合)

8.3.12.17 Connector for EMC Documentum の設定

Connector for EMC Documentum の設定操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
documentum-configurationCLI -f <propertyFile>
```

説明:

- -f <propertyFile>: 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要: [LiveCycle root]¥configurationManager¥bin¥ ディレクトリにある cli_propertyFile_ecm_documentum_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

Connector for EMC Documentum の設定を完了するには、次の手順を手動で実行してください。

- 1 [LiveCycle root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic の adobe-component-ext.properties ファイルを次の [appserver root]/users_projects/domain/[appserverdomain] ディレクトリにコピーします。
- 2 アプリケーションサーバーの再起動
- 3 LiveCycle 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
 - EMCDocumentumAuthProviderService
 - EMCDocumentumRepositoryProvider
 - EMCDocumentumContentRepositoryConnector

8.3.12.18 Connector for Microsoft SharePoint の設定

Connector for Microsoft SharePoint の設定操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
sharepoint-configurationCLI -f <propertyFile>
```

説明:

- -f <propertyFile>: 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要: [LiveCycle root]¥configurationManager¥bin¥ ディレクトリにある cli_propertyFile_ecm_sharepoint_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

8.4 使用例

C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES4¥configurationManager¥bin から次のコマンドを入力します。

```
ConfigurationManagerCLI configureLiveCycle -f cli_propertyFile.txt
```

cli_propertyFile.txt には、作成済みのプロパティファイルの名前を指定します。

8.5 Configuration Manager CLI のログ

エラーが発生した場合は、`[LiveCycle root]\configurationManager\log` フォルダにある CLI ログで確認できます。生成されるログファイルには、命名規則に基づいて `lcmCLI.0.log` のような名前が付けられます。ファイル名の数字（ここでは 0）は、ログファイルがロールオーバーされるたびに増加します。

8.6 次の手順

Configuration Manager CLI を使用して LiveCycle の設定とデプロイを行った場合は、この時点で次のタスクを実行できます。

- デプロイメントの確認（20 ページの「[5.1.3 デプロイメントの確認](#)」を参照）
- Administration Console へのアクセス（20 ページの「[5.1.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス](#)」を参照）。
- LDAP にアクセスするための LiveCycle モジュールの構成（39 ページの「[5.6 LDAP アクセスの設定](#)」を参照）。

第9章：付録 - WebLogic Server の手動設定

注意：ここでは、LiveCycle のアプリケーションサーバーを手動で設定する方法について説明します。Configuration Manager には、これらの手順を自動で実行するためのオプションが用意されています。このオプションの選択を解除した場合は、この付録で説明する手順を実行する必要があります。

アプリケーションサーバーの自動設定方法について詳しくは、13 ページの「4.3 LiveCycle の構成およびデプロイ」を参照してください。

ここでは、WebLogic Administration Server、Node Manager および管理対象サーバーを既に起動していることを前提としています。

9.1 サブレットコンテナ用の認証資格情報の設定

ここで、サブレットコンテナ用に認証資格情報を設定する必要があります。

サブレットコンテナ認証を変更するには：

- 1 WebLogic Administration Server は、クラスターの管理サーバー上で実行してください。
- 2 コマンドプロンプトを開き、次のスクリプトを実行して環境を設定し、WebLogic スクリプトツールを起動します。
 - (Windows) [appserver root]\common\bin\wlst.cmd
 - (Linux、UNIX) [appserver root]/common/bin/wlst.sh
- 3 WLST で以下のコマンドを入力し、サブレットコンテナの認証を更新します。

```
connect(' [WebLogic username]', '[WebLogic password]', '[WebLogic URL]')
edit()
startEdit()
cd('SecurityConfiguration')
cd(' [domain name]')
set('EnforceValidBasicAuthCredentials', 'false')
activate()
exit()
```

注意：WebLogic URL は、t3://hostname:[port] の形式で指定します。[port] のデフォルト値は 7001 です。

- 4 WebLogic Administration Server を再起動します。

9.2 クラスパスおよびサーバー起動引数の変更

LiveCycle では、データベースの JDBC ドライバー、および電子メールサポート用の pop3 JAR ファイルを、WebLogic Server 用に正しく設定する必要があります。

注意：(MySQL のみ) <http://dev.mysql.com/downloads/connector/j/> から、mysql-connector-java-5.1.14-bin.jar ドライバーをダウンロードしてください。

管理対象サーバーのクラスパスの変更

- 1 Web ブラウザーの URL 行に http://[hostname]:[port]/console と入力して、WebLogic 管理コンソールにアクセスします。ここで、[port] は、安全ではないリスニングポートです。デフォルトでは、このポート番号は **7001** です。

- 2 ログイン画面で、WebLogic ユーザー名とパスワードを入力して「**Log In**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 「Domain Structure」で、「**Environment** / **Servers**」をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5 サーバーの設定ウィンドウで、「**Configuration**」タブ / 「**Server Start**」タブをクリックします。
- 6 「**Class Path**」ボックスに、以下の順序で JAR ファイルの場所とファイル名を入力します。
 - pop3.jar
 - weblogic.jar (WebLogic Server JAR ファイル)
 - tools.jar (WebLogic Server JAR ファイル)
 - データベース用の JDBC ドライバーファイル (ojdbc6.jar など)

例えば、WebLogic 11g を使用している Windows 環境では次のように入力します。

```
C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES4
\lib\weblogic\pop3.jar; [WL_HOME]\wlserver_10.3\server\lib\weblogic.jar;C:\Program Files\JRockit Real
Time\jrrt-4.0.0-1.6.0\lib\tools.jar; C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES4\lib\db\ojdbc6.jar
```

例えば、WebLogic 11g を使用している UNIX 環境では次のように入力します。

```
opt/adobe/adobe_livecycle_ES4/lib/weblogic/pop3.jar: [WL_HOME]/wlserver_10.3/server/lib/weblogic.jar:/o
pt/jrrt-4.0.0-1.6.0/lib/tools.jar:opt/adobe/adobe_livecycle_ES4/lib/db/ojdbc6.jar
```

注意：上記の例では、Oracle JDBC ドライバーファイルを指定します。別のデータベースを使用している場合は、そのデータベースに合わせてこの JAR ファイルを指定します。

- 7 「**Arguments**」ボックスに、以下の引数をスペースで区切って入力します。

```
-Dadobeidp.RootDirectory=[appserverdomain]
-Dfile.encoding=utf8
-Djava.net.preferIPv4Stack=true
-Djava.security.policy=[WL_Home]\server\lib\weblogic.policy
-DentityExpansionLimit=10000
```

IPv6 を使用している場合は、-Djava.net.preferIPv4Stack=true を、-Djava.net.preferIPv6Stack=true に置き換えてください。

[WL_Home] は、次の例のように、WebLogic ホームディレクトリに置き換えてください。

```
Djava.security.policy=/opt/Oracle/Middleware/weblogic10.3/server/lib/weblogic.policy
```

[AppServerdomain] は、次の例のように、ドメインディレクトリに置き換えてください。

```
-Dadobeidp.RootDirectory=/opt/Oracle/Middleware/user_projects/domains/base_domain/
```

- 8 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。

9.3 WebLogic Server スタックスレッドタイムアウトの増加

デプロイ方法によっては、LiveCycle EAR ファイルが大きくなる可能性があります。EAR ファイルのデプロイメントタイムアウトを回避するには、WebLogic Server スタックスレッドタイムアウトの最大値を増やす必要があります。この値は、WebLogic Administration Server が長時間実行中のスレッドをアクティブなままとして扱う時間です。このしきい値に達した後、WebLogic Server はこのスレッドを削除しようとします。

- 1 Web ブラウザーの URL 行に http://[hostname]:[port]/console と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2 WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。

- 4 「Domain Structure」で、**Environment** / **Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5 「Configuration」タブで、「**Tuning**」タブをクリックします。
- 6 「**Stuck Thread Max Time**」ボックスに 1200 と入力し、「**Save**」をクリックします。
- 7 「Domain Structure」で、ドメインの名前をクリックします。
- 8 「Configuration」タブで、「**JTA**」タブをクリックします。
- 9 「**Timeout Seconds**」ボックスに 300 と入力します。
- 10 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。

9.4 Solaris の管理対象サーバーの開始引数の設定

WebLogic Server を手動で設定する場合、Solaris では、管理対象サーバーで 64 ビット機能を使用するために追加のサーバー開始引数が必要です。この設定を変更しないと、Sun JDK では既定で 32 ビットしかサポートされません。

- 1 Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2 WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Login**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 「Domain Structure」で、**Environment** / **Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5 「**Configuration**」タブ / 「**Server Start**」タブをクリックします。
- 6 「**Arguments**」ボックスで、現在の内容の末尾に `-d64` を付加します。
- 7 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 8 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

9.5 JVM 引数の設定

管理対象サーバーで JVM でのメモリ割り当ての増加

- 1 Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2 WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Login**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 「Domain Structure」で、**Environment** / **Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Server Start**」タブをクリックします。
- 6 「**Arguments**」ボックスで、現在の内容の末尾に次の情報を付加します。
 - (64 ビット JVM を使用する Solaris) `-Xms256m -Xmx1792m -XX:MaxPermSize=512m`
注意：Solaris でのみ、MaxPermSize パラメータの設定が必要です。
 - (Windows、Linux 64 ビット) `-Xms256m -Xmx1792m`
- 7 アプリケーションサーバーがサービス拒否攻撃を受けないようにするには、次の JVM 引数を追加します。

```
-DentityExpansionLimit=10000
```

- 8 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 9 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

注意： Correspondence Management Solution をインストールする場合、最大ヒープサイズを 4096 (4 GB) に設定することをお勧めします。

9.6 データベース接続の設定

ここでは、LiveCycle データベース用の JDBC データソースを設定する方法について説明します。

9.6.1 Oracle データベース接続の設定

WebLogic Server および LiveCycle デプロイメントで Oracle 11g データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

WebLogic 11g 上での Oracle 用の新しいデータソースの作成

- 1 Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2 WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 「Domain Structure」で **Services / JDBC / Data Sources** をクリックして、右側のウィンドウで「**New**」をクリックし、ドロップダウンメニューから「**Generic Data Source**」を選択します。
- 5 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - 「**JNDI name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - **Database Type** リストで「**Oracle**」を選択し、「**Next**」をクリックします。
 - 「**Database Driver**」リストで、「**Oracle's Driver(Thin) for Instance Connections; Versions:9.0.1 以降を選択**」します。
- 6 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 7 「**Next**」をクリックし、LiveCycle のインストールの準備で作成した Oracle データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name : 作成したデータベースの名前。

Host Name : Oracle を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port : データベースのポート。デフォルトのポートは 1521 です。

Database User Name : Oracle データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 8 「**Next**」をクリックし、「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注意： テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**Next**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更しません。

- 9 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「**Finish**」をクリックします。

接続プールの設定

- 1 「Domain Structure」で、**Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP_DS**」をクリックします。
- 2 次の画面で、「**Configuration**」タブをクリックし、「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

WebLogic 11g 上の Rights Management に使用する Oracle 用の新しいデータソースの作成

注意: この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

- 1 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2 「Domain Structure」で、**Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 3 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Name**」ボックスに、RM_DS と入力します。
 - 「**JNDI name**」ボックスに EDC_DS と入力します。
 - **Database Type** リストで「**Oracle**」を選択し、「**Next**」をクリックします。
 - **Database Driver** リストで、「**Oracle's Driver (Thin) for Server Connections; Versions: 9.0.1,9.2.0,10,11**」を選択します。
- 4 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**One-Phase Commit**」を選択します。
- 5 「**Next**」をクリックし、LiveCycle のインストールの準備で作成した Oracle データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name : 作成したデータベースの名前。

Host Name : Oracle を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port : データベースのポート。デフォルトのポートは 1521 です。

Database User Name : Oracle データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 6 「**Next**」をクリックし、「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注意: テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**Next**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
- 7 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「**Finish**」をクリックします。

接続プールの設定

- 1 「Domain Structure」で、**Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「**RM_DS**」をクリックします。
- 2 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックし、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Initial Capacity**」ボックスに 1 と入力します。
 - 「**Maximum Capacity**」ボックスに 20 と入力します。

- 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 3 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
 - 4 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

9.6.2 MySQL データベース接続の設定

WebLogic Server および LiveCycle デプロイメントで手動インストールした MySQL データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

MySQL 用の新しいデータソースの作成

- 1 Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2 WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 「**Domain Structure**」で、「**Services** / **JDBC** / **Data Sources**」をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 5 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - 「**JNDI name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - **Database Type** リストで「**MySQL**」を選択し、「**Next**」をクリックします。
 - **Database Driver** リストで、「**MySQL's Driver (Type 4) Versions:using com.mysql.jdbc.Driver**」を選択します。
- 6 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 7 「**Next**」をクリックし、LiveCycle のインストールの準備で作成したデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name : 作成したデータベースの名前。

Host Name : MySQL を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port : データベースのポート。デフォルトのポートは 3306 です。

Database User Name : MySQL データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 8 「**Next**」をクリックし、「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注意 : テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**Next**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 9 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「**Finish**」をクリックします。

接続プールの設定

- 1 「**Domain Structure**」で、「**Services** / **JDBC** / **Data Sources**」をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP_DS**」をクリックします。
- 2 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。

5 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

6 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

Rights Management に使用する MySQL 用の新しいデータソースの作成

注意：この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

1 Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。

2 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「New」をクリックします。

3 次の画面で、以下のプロパティを設定します。

- 「Name」ボックスに、RM_DS と入力します。
- 「JNDI name」ボックスに EDC_DS と入力します。
- **Database Type** リストで「MySQL」を選択し、「Next」をクリックします。
- **Database Driver** リストで、「MySQL's Driver (Type 4) Versions:using com.mysql.jdbc.Driver」を選択します。

4 「Next」をクリックし、「Supports Global Transactions」と「One-Phase Commit」を選択します。

5 「Next」をクリックし、LiveCycle のインストールの準備で作成した MySQL データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name : 作成したデータベースの名前。

Host Name : MySQL を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port : データベースのポート。デフォルトのポートは 3306 です。

Database User Name : MySQL データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

6 「Next」をクリックし、「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注意：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「Next」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

7 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「Finish」をクリックします。

接続プールの設定

1 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「RM_DS」をクリックします。

2 次の画面で、「Configuration」タブをクリックし、「Connection Pool」タブをクリックし、以下のプロパティを設定します。

- 「Initial Capacity」ボックスに 1 と入力します。
- 「Maximum Capacity」ボックスに 20 と入力します。
- 「Capacity Increment」ボックスに 5 と入力します。
- 「Statement Cache Size」ボックスに 80 と入力します。
- 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

3 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

9.6.3 DB2 データベース接続の設定

WebLogic Server および LiveCycle デプロイメントで DB2 データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

WebLogic 11g 上の DB2 の新しいデータソースの作成

- 1 Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2 WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 5 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - 「**JNDI name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - **Database Type** リストで「**DB2**」を選択します。
 - **Database Driver** リストで、「**IBM's DB2 Driver (Type 4) for JDBC and SQLJ; Versions: 8.x; 9.x**」を選択します。
- 6 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 7 「**Next**」をクリックし、次の画面で、LiveCycle のインストールの準備で作成したデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name : 作成したデータベースの名前。

Host Name : DB2 を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port : データベースのポート。デフォルトのポートは 50000 です。

Database User Name : DB2 データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 8 「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注意 : テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**Next**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更しません。
- 9 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
- 10 「**Finish**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。

接続プールの設定

- 1 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP_DS**」をクリックします。
- 2 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

WebLogic 11g 上の Rights Management に使用する DB2 用の新しいデータソースの作成

注意: この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

- 1 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 3 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Name**」ボックスに、RM_DS と入力します。
 - 「**JNDI name**」ボックスに EDC_DS と入力します。
 - **Database Type** リストで「**DB2**」を選択します。
 - **Database Driver** リストで、「**IBM's DB2 Driver (Type 4) for JDBC and SQLJ; Versions: 8.x; 9.x**」を選択します。
 - 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**One-Phase Commit**」を選択します。
- 4 「**Next**」をクリックし、LiveCycle のインストールの準備で作成した DB2 データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name: 作成したデータベースの名前。

Host Name: DB2 を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port: データベースのポート。デフォルトのポートは 50000 です。

Database User Name: DB2 データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password:** ユーザーに関連付けられたパスワード。
- 5 「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注意: テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**Next**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
- 6 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
- 7 「**Finish**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。

接続プールの設定

- 1 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「**RM_DS**」をクリックします。
- 2 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3 「**Maximum Capacity**」ボックスに 20 と入力します。
- 4 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

9.6.4 SQL Server データベース接続の設定

WebLogic Server および LiveCycle デプロイメントで SQL Server データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

SQL Server 用の新しいデータソースを WebLogic 11g に作成するには：

- 1 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 3 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Name**」ボックスに IDP_DS と入力します。
 - 「**JNDI name**」ボックスに IDP_DS と入力します。
 - **Database Type** リストで「**MS SQL Server**」を選択します。
 - **Database Driver** リストで、「**Microsoft's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions:2005, 2008**」を選択します。
- 4 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 5 「**Next**」をクリックし、LiveCycle のインストールの準備で作成した SQL Server データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name：作成したデータベースの名前。

Host Name：SQL Server を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port：データベースのポート。デフォルトのポートは 1433 です。

Database User Name：SQL Server データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password**：ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 6 「**Next**」をクリックし、「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注意：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**Next**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
- 7 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
- 8 「**Finish**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。

接続プールの設定

- 1 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP_DS**」をクリックします。
- 2 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

WebLogic 11g 上の Rights Management に使用する SQL Server 用の新しいデータソースの作成

注意：この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

- 1 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。

- 3 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Name**」ボックスに、RM_DS と入力します。
 - 「**JNDI name**」ボックスに EDC_DS と入力します。
 - **Database Type** リストで「**MS SQL Server**」を選択します。
 - 「**Database Driver**」ボックスで、「**Microsoft's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions:2005, 2008**」を選択します。
 - 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**One-Phase Commit**」を選択します。
- 4 「**Next**」をクリックし、LiveCycle のインストールの準備で作成した SQL Server データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

Database Name : 作成したデータベースの名前。

Host Name : SQL Server を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

Port : データベースのポート。デフォルトのポートは 1433 です。

Database User Name : SQL Server データベースに作成したユーザーの名前。

Password と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。
- 5 「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注意 : テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**Next**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
- 6 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「**Finish**」をクリックします。

接続プールの設定

- 1 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2 「Domain Structure」で、**Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「**RM_DS**」をクリックします。
- 3 次の画面で、「**Configuration**」をクリックし、「**Connection Pool**」タブをクリックし、以下のプロパティを設定します。
 - 「**Initial Capacity**」ボックスに 1 と入力します。
 - 「**Maximum Capacity**」ボックスに 20 と入力します。
 - 「**Capacity Increment**」ボックスに 5 と入力します。
 - 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 4 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 5 WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

Windows ログインの LiveCycle データベースユーザーへのマップ

注意 : ユーザーアカウントを作成し、Windows ドメインに関連付けておく必要があります。

- 1 Microsoft SQL Server Management Studio を使用して、LiveCycle データベースをホストするデータベースサーバーに接続します。
- 2 認証モードを「**Windows 認証**」に設定します。
- 3 セキュリティ/ログインで Windows ドメインユーザーに対して新しいアカウントを作成し、「**Windows 認証**」を選択します。

4 ログイン - 新規作成画面で「**ユーザーマッピング**」をクリックして、新しいユーザーのデータベースおよびデフォルトスキーマを設定します。

5 データベースロールとして「**db_owner**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

ユーザーが作成できたかを確認するには、ナビゲーションツリーで LiveCycle データベースを展開して、**セキュリティ/ユーザー**をクリックします。新しいユーザーが表示されます。

Windows 上での統合セキュリティの設定

1 Web ブラウザーの URL 行に `http://[host]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。

注意: Windows ドメインユーザーを使用して、アプリケーションサーバーを起動します。WebLogic Server をサービスとして実行している場合は、Windows ドメインユーザーアカウントを使用して起動する必要があります。

2 WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。

3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。

4 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP_DS**」をクリックします。

5 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックし、「**Properties**」ボックスに `integratedSecurity=true` と入力します。

注意: この値を true に設定した場合は、統合セキュリティを使用するように SQL Server を設定する必要があります (『[LiveCycle のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』を参照)

6 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「**RM_DS**」をクリックします。

7 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックし、「**Properties**」ボックスに `integratedSecurity=true` と入力します。

8 アプリケーションサーバーがインストールされているコンピューターの Windows システムパス (C:\¥Windows) に `sqljdbc_auth.dll` を追加します。

注意: `sqljdbc_auth.dll` ファイルは、Microsoft SQL JDBC 3.0 ドライバーのインストールディレクトリ (デフォルトは `[DriverInstallDir]/sqljdbc_3.0/enu/auth/x64`) と同じ場所にあります。

9.7 データソースのセキュリティ保護

WebLogic 上にデプロイされた LiveCycle を使用している場合、必要に応じて JNDI アーティファクトへのアクセスを保護することができます。限られた一連のユーザーに対して JNDI へのアクセスを制限する手順については、この [TechNote](#) を参照してください。

9.8 次の手順

この後、LiveCycle EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイする必要があります (89 ページの「[WebLogic への手動デプロイ](#)」を参照)。

第 10 章：WebLogic への手動デプロイ

この章では、LiveCycle モジュールを手動で WebLogic にデプロイする方法について説明します。この章の内容は、LiveCycle を WebLogic に自動的にデプロイしない場合にのみ適用されます。LiveCycle をアプリケーションサーバーに自動でデプロイする方法については、「13 ページの「4.3 LiveCycle の構成およびデプロイ」」を参照してください。

インストールのこの段階では、既に LiveCycle ファイルをインストールし、Configuration Manager を実行してデプロイ可能な LiveCycle アーカイブを設定し、WebLogic を手動で設定しています。ここで、デプロイ可能な LiveCycle アーカイブを手動でデプロイする必要があります。

10.1 LiveCycle モジュールのデプロイについて

LiveCycle をデプロイする前に、次のタスクが完了していることを確認してください。

- 必要なソフトウェアとファイルがインストールしてあり、作業を行うディレクトリの場所を確認している。このタスクを完了していない場合は、『[LiveCycle のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』を参照してください。
- Configuration Manager を実行し、システムおよびアプリケーションサーバーの要件に従って LiveCycle モジュールを設定およびアセンブリしている。デプロイメントにモジュールを追加するには、Configuration Manager を実行して変更を行い、更新した EAR ファイルを再デプロイします。

LiveCycle を初めてデプロイする場合は、製品をデプロイした後に、Configuration Manager を使用してデータベースを初期化します。

外部 Web サーバーを使用している場合は、Web サーバーのマニュアルを参照して、アプリケーションサーバーへのアクセスに必要な設定について確認してください。

10.1.1 デプロイ可能なコンポーネントの概要

デプロイメントプロセス中に、次の EAR ファイルをデプロイします。

- adobe-livecycle-native-weblogic-[OS].ear
- adobe-livecycle-weblogic.ear
- adobe-workspace-client.ear

Configuration Manager を使用して LiveCycle を設定すると、これらのファイルは **[LiveCycle root]/configurationManager/export/** ディレクトリに置かれます。

10.2 WebLogic Server へのデプロイ

LiveCycle コンポーネントを WebLogic Server にデプロイするには、WebLogic Server Administration Console を使用して、コンポーネントの EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイします。

WebLogic Server へのデプロイを開始する前に、アプリケーションサーバーを起動します。必須のコンポーネントをデプロイしたら、サービスを起動する前にアプリケーションサーバーを停止して再起動します。

EAR ファイルをデプロイするには：

- 1 Web ブラウザーの URL 行に `http://<ホスト名>:7001/console` と入力して WebLogic Server Administration Console にアクセスします。
- 2 WebLogic Server 設定の作成時に使用したユーザー名とパスワードを入力して、「**Log In**」をクリックします。
- 3 Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4 「Domain Structure」で、「Deployments」をクリックし、右側のウィンドウで「**Install**」をクリックします。
- 5 Install Application Assistant ウィンドウで、インストールする EAR ファイルの場所に移動します。
- 6 EAR ファイルを選択し、「**Next**」をクリックします。
- 7 「Install this deployment as an application」を選択し、「**Next**」をクリックします。
- 8 「**Next**」をクリックして、デフォルトの設定を受け入れて、「**Finish**」をクリックします。
- 9 Change Center で、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 10 右側のウィンドウで、今インストールしたアプリケーションのチェックボックスを選択します。
- 11 「**Start**」をクリックし、メニューから「**Servicing all requests**」を選択します。
- 12 右側のウィンドウで「**Yes**」をクリックし、Change Center で「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 13 89 ページの「[10.1.1 デプロイ可能なコンポーネントの概要](#)」に記載されている各 EAR ファイルについて、手順 5～12 を繰り返します。
- 14 デプロイが完了したら、WebLogic を再起動します 90 ページの「[10.3 WebLogic Server の再起動](#)」を参照してください。

10.3 WebLogic Server の再起動

すべての設定変更を完了した後、その変更を有効にするには WebLogic を再起動します。再起動する必要があるのは、WebLogic 管理対象サーバーと WebLogic Administration Server です。Node Manager は再起動の必要はありません。

10.3.1 WebLogic 管理対象サーバーの停止

管理対象サーバーがシャットダウンしたことを確認するには、「Control」タブの一番下のテーブルを参照します。このテーブルには、すべてのサーバーのリストが表示され、それぞれの現在の状態が示されます。

- 1 WebLogic Server Administration Console の「Domain Structure」で、ドメイン名をクリックします。
- 2 「**Control**」タブをクリックし、停止するサーバーの横にあるチェックボックスを選択します。
- 3 「**Shutdown**」をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。
 - When work completes**：選択されたサーバーが正常に停止され、管理対象サーバーは処理中のすべての要求を完了するようサブシステムに通知します。正常に停止する処理では、現在処理中の特定のアプリケーションを完了するための時間が WebLogic Server のサブシステムに与えられます。
 - Force Shutdown Now**：強制的な停止が開始され、管理対象サーバーは処理中の要求を直ちに破棄するようサブシステムに指示します。
- 4 WebLogic Server Administration Console のプロンプトで、「**Yes**」をクリックしてコマンドの実行を確認します。

10.3.2 WebLogic Administration Server の停止

- 1 コマンドプロンプトで、`[appserverdomain]\bin` に移動します。

- 2 次のコマンドを入力します。
 - (Windows) stopWebLogic.cmd
 - (Linux、UNIX) /stopWebLogic.sh
- 3 WebLogic のユーザー名とパスワードを入力します (WebLogic のインストール時にセキュリティを有効にした場合)。

10.3.3 WebLogic Administration Server の起動

- 1 コマンドプロンプトで、[appserverdomain]\bin に移動します。
- 2 次のコマンドを入力します。
 - (Windows) startWebLogic.cmd
 - (Linux、UNIX) /startWebLogic.sh
- 3 WebLogic のユーザー名とパスワードを入力します (WebLogic のインストール時にセキュリティを有効にした場合)。

10.3.4 WebLogic 管理対象サーバーの起動

- 1 <http://localhost:7001/console> に移動して、WebLogic Server の設定時に使用したユーザー名とパスワードを入力してログインします。
- 2 Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 3 「Domain Structure」で、**Environment** / **Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバーをクリックします。
- 4 次の画面で、「Control」タブをクリックし、起動する管理対象サーバーの横にあるチェックボックスを選択します。
- 5 「Start」をクリックして、「Yes」をクリックします。

10.4 次の手順

Configuration Manager を実行して、データベースの初期化と、コンポーネントおよび LiveCycle アーカイブファイルのデプロイを行う必要があります。必要に応じて、コンポーネントおよびアーカイブファイルのデプロイメントを検証することもできます 13 ページの「[4.3 LiveCycle の構成およびデプロイ](#)」を参照してください。

第 11 章：付録 - SharePoint サーバーでの Connector for Microsoft SharePoint の設定

Connector for Microsoft SharePoint を使用すると、LiveCycle と SharePoint の両方の開発の観点で、ワークフローを統合できます。このモジュールには、LiveCycle サービスと、この 2 つのシステム間のエンドツーエンドの接続を容易にするサンプルの SharePoint の機能が含まれています。

このサービスによって、SharePoint リポジトリでの検索、読み取り、書き込み、削除、更新およびチェックイン/チェックアウトが可能になります。SharePoint のユーザーは、SharePoint 内からの承認プロセスなどの LiveCycle プロセスの開始、ドキュメントの Adobe PDF への変換、PDF 形式やネイティブ形式のファイルの権限の管理が可能です。さらに、SharePoint コンテキスト内から、LiveCycle プロセスの SharePoint ワークフロー内からの実行を自動化できます。

11.1 インストールと設定

LiveCycle のインストールを設定した後に、次の手順を実行して SharePoint サーバーでコネクタを設定します。

11.1.1 SharePoint サーバーの必要システム構成

SharePoint サイトを実行するサーバーが次の要件を満たしていることを確認してください。

- Microsoft SharePoint Server 2007 または 2010
- Microsoft .NET Framework 3.5

11.1.2 インストールに関する考慮事項

インストールの計画にあたって、次の点に注意してください。

- Microsoft SharePoint Server 2007 を使用している場合、SharePoint サーバーに Connector for Microsoft SharePoint をインストールすると、インストールプロセスによって Windows IIS Server が停止し、再起動します。
- インストールを実行する前に、他のサイトや Web アプリケーションが IIS Server 上のサービスを使用していないことを確認します。インストールを行う前に、IIS の管理者に問い合わせてください。
- (SharePoint サーバー 2010 のファームインストールの場合) SharePoint 管理サービスは、SharePoint サーバーファームの一元管理サーバーで実行されています。(SharePoint サーバー 2010 スタンドアロンインストールの場合) SharePoint 管理サービスは、SharePoint サーバーで停止します。

11.2 SharePoint Server 2007 でのインストールと設定

11.2.1 Web パーツのインストーラーの抽出

LiveCycle サーバーをインストールしたときに、SharePoint サーバーの Web パーツのインストーラー (Adobe LiveCycle Connector-2007.zip) が `[LiveCycle root]\plugins\sharepoint` フォルダー内に作成されています。SharePoint をホストしている Windows サーバー上のフォルダーにこのファイルをコピーしてから、抽出します。

11.2.2 バッチファイルの編集

Web パーツのインストーラーから抽出されたフォルダー内に、バッチファイル (Install.bat) があります。使用している SharePoint サーバーに適切なファイルおよびフォルダーのパスを使用して、このバッチファイルを更新する必要があります。

- 1 Install.bat ファイルをテキストエディターで開きます。
- 2 ファイル内で次の行を探して編集します。

```
@SET GACUTIL.exe="C:\Program Files\Microsoft SDKs\Windows\v6.0A\Bin\ gacutil.exe"  
@SET TEMPLATEDIR="c:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\ web server extensions\12\TEMPLATE"  
@SET WEBAPPDIR="C:\Inetpub\wwwroot\wss\VirtualDirectories\<port>"  
@SET SITEURL="http://<SharePoint Server>:<port>/SiteDirectory/<site name>/"  
@SET STSADM="C:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\ web server extensions\12\bin\stsadm.exe"
```

- **GACUTIL.exe** : GAC ユーティリティがあるフォルダーにパスを変更します。
- **TEMPLATEDIR** : システム上の IIS Server のテンプレートのディレクトリパスを変更します。
- **WEBAPPDIR** : システム上の IIS Server の WEBAPPDIR のパスがバッチファイル内のデフォルト値と異なる場合に変更します。
- **SITEURL** : LiveCycle の機能をアクティブにする、システム上の SharePoint サイトの URL を変更します。
- **STSADM** : STSADM ユーティリティがあるフォルダーへのパスを変更します。

注意 : LiveCycle の機能は、SharePoint サーバーの Web アプリケーションにインストールされます。LiveCycle の機能は、URL を指定したサイトでのみアクティブになります。他の SharePoint サイトについては、各サイトのサイトの設定ページで後から LiveCycle の機能をアクティブにすることができます。詳しくは、SharePoint のヘルプを参照してください。

- 3 ファイルを保存して閉じます。

11.2.3 バッチファイルの実行

編集されたバッチファイルがあるフォルダーに移動してから、Install.bat ファイルを実行します。

バッチファイルが実行されている間は SharePoint サイトで他のサービスを使用できないことに注意してください。

バッチファイルを実行すると、次の作業が行われます。

- AdobeLiveCycleConnector.dll および AdobeLiveCycleWorkflow.dll のファイルが登録されます。これらの動的ライブラリによって、LiveCycle の機能が SharePoint サーバーと統合されます。
- 以前にインストールされていた SharePoint コネクタがアンインストールされます。
- テンプレートファイルが WSS \TEMPLATE ディレクトリにコピーされます。
- リソースファイルが WEBAPPDIR\App_GlobalResources ディレクトリにコピーされます。
- LiveCycle の機能が、Web サーバーの拡張機能とあわせてインストールされてアクティブになります。
- インストーラーが閉じて、プロンプトに戻ります。

11.2.4 サービスモデル設定の IIS Web アプリケーションのフォルダーへのコピー

SharePoint Connector 固有の設定を、IIS Server の Web アプリケーションのホームディレクトリにコピーする必要があります。これによって、LiveCycle の機能が Web アプリケーションに追加されます。

- 1 LiveCycle の機能のインストーラーを抽出したときに作成された **sharepoint-webpart** フォルダーに移動します。
- 2 AdobeLiveCycleConnector.dll.config ファイルをテキストエディターで開きます。

- 3 <system.serviceModel> タグと </system.serviceModel> タグの間の内容 (開始タグと終了タグを含む) をコピーしてから、ファイルを閉じます。
- 4 バッチファイルで指定したコンピューター上の IIS サービスの Web アプリケーションのホームディレクトリに移動します。そのフォルダーは、通常は C:\Inetpub\wwwroot\wss\VirtualDirectories<port> です。
- 5 web.config ファイルのバックアップコピーを作成してから、元のファイルをテキストエディターで開きます。
- 6 コピーした内容を </configuration> タグの前に追加します。
- 7 ファイルを保存して閉じます。

11.3 SharePoint Server 2010 および SharePoint server 2013 でのインストールと設定

11.3.1 環境変数の編集

stsadm.exe のパスを PATH 環境変数に追加します。stsadm.exe のデフォルトのパスは C:\Program Files\Common Files\MicrosoftShared\Web Server Extensions\14\BIN です。

11.3.2 Web パーツのインストーラーの抽出

LiveCycle Server をインストールしたときに、SharePoint サーバーファイルの Web パーツのインストーラー (Adobe LiveCycle Connector-2010.zip と Adobe LiveCycle Connector-2013.zip) が [LiveCycle root]\plugins\sharepoint フォルダー内に作成されます。

- Microsoft SharePoint 2010 を使用している場合は、SharePoint をホストする Windows server 上のフォルダーに Adobe LiveCycle Connector-2010.zip ファイルをコピーし、コピーされたファイルを解凍します。
- Microsoft SharePoint 2013 を使用している場合は、SharePoint をホストする Windows server 上のフォルダーに Adobe LiveCycle Connector-2013.zip ファイルをコピーし、コピーされたファイルを解凍します。

11.3.3 Connector のインストールとアクティベート

- 1 (オプション) コネクタをインストールする前に SharePoint Server のコンテキストメニューのオプションを選択します。詳細な手順については、95 ページの「11.3.4 機能の有効化または無効化」を参照してください。
- 2 次のコマンドをリストの順序どおりに実行して、Connector for SharePoint Server をインストールします。変更がすべてのサーバーに適用されたことを確認するために、各コマンドの後に stsadm -o enumsolutions を実行します。

resultant.xml に <state>pending</state> タグが追加されるまで、stsadm -o enumsolutions を繰り返し実行します。

```
install.bat -create
install.bat -add
install.bat -deploy
install.bat -install
```

注意: install.bat の -deploy コマンドの場合は、resultant.xml に <LastOperationResult>DeploymentSucceeded</LastOperationResult> タグが追加されるまで、stsadm -o enumsolutions を繰り返し実行します。

- 3 SharePoint Web アプリケーションからコネクタをアクティベートします。コネクタをアクティベートするには、次の手順を実行します。
 - a ブラウザーで SharePoint Web アプリケーションを開きます。

- b 「サイトの設定」をクリックします。
- c 「Site Collection Features」をクリックします。
- d Adobe LiveCycle Connector 機能および Adobe LiveCycle Workflow 機能について「アクティベート」をクリックします。

11.3.4 機能の有効化または無効化

コンテキストメニューのオプションを変更し、SharePoint サイトの他の機能を無効にすることができます。一連のオプションをデフォルトのまま SharePoint Connector をインストールした場合、SharePoint Server で次のオプションを有効にします。

- Adobe PDF に変換
- Acrobat Reader による注釈機能を有効化
- Adobe ポリシーで保護
- Adobe LiveCycle プロセスを起動

Elements.xml ファイルを変更してこれらのオプションを変更したり、別の機能の有効/無効を切り替えたりすることができます。Elements.xml を変更するには、次の手順を実行します。

- 1 Adobe LiveCycle Connector-2010.zip ファイルまたは Adobe LiveCycle Connector-2013.zip ファイルを展開した内容が含まれるフォルダーに移動します。
- 2 Elements.xml ファイルのバックアップを作成します。Elements.xml のデフォルトの場所は <展開した Adobe LiveCycle Connector-2010/2013.zip ファイルが含まれるディレクトリ>\TEMPLATE\FEATURES\LiveCycle\Elements.xml です。
- 3 Elements.xml ファイルをテキストエディターで開きます。
- 4 無効にする機能の CustomAction 要素を削除するかコメントにします。

Document Server の機能	CustomAction 要素の ID	説明
Reader Extensions	LiveCycle.ApplyReaderExtensions	PDF ドキュメントでの Reader Extensions を有効にします
Rights Management	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPdf	PDF ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDoc	Microsoft Word ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToXls	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPpt	Microsoft PowerPoint ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDocx	Microsoft Word ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToXlsx	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPptx	Microsoft PowerPoint ドキュメントの権限保護を実行します

	LiveCycle.RightsManagement.Apply PolicyToDwg	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.Apply PolicyToDxf	AutoCAD ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.Apply PolicyToDwf	AutoCAD ドキュメントの権限保護を実行します
PDF Generator	LiveCycle.GeneratePDFFromPdf	サイトの設定でファイルの種類として標準の OCR が使用された場合に、画像から作成された PDF をテキストベースの PDF に変換します
	LiveCycle.GeneratePDFFromDoc	Microsoft Word ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPs	PostScript ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromEps	EPS ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPrn	PRN ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromDocx	Microsoft Word 2007 ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPpt	Microsoft PowerPoint ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPptx	Microsoft PowerPoint ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromXls	Microsoft Excel ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromXlsx	Microsoft Excel ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromBmp	BMP ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromGif	GIF ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpeg	JPEG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpg	JPG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTiff	TIFF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTif	TIF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPng	PNG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpf	JPF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpx	JPX 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJp2	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJ2k	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJ2c	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpc	JPEG 2000 画像から PDF を生成します

	LiveCycle.GeneratePDFFromHtm	HTM ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromHtml	HTML ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromSwf	SWF ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromFlv	Flash ビデオファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTxt	テキストファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromRtf	リッチテキスト形式のファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromMpp	Microsoft Project ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPub	Microsoft Publisher ドキュメントから PDF を生成します
LiveCycle プロセスを 起動	LiveCycle.InvokeGenericLiveCycleProcessOnALL	LiveCycle プロセスを起動します
Adobe Forms ライ ブラリ	AdobeFormsLibrary	フォームデータのレポジトリとして SharePoint を設定します。 CustomAction、ListTemplate および ListInstance の各要素を削除します。
LiveCycle ユーザータ スク	LiveCycleUserTasks	ユーザータスクのリストを表示します。 ListTemplate 要素を削除します。
LiveCycle グループタ スク	LiveCycleGroupTasks	グループタスクのリストを表示します。 ListTemplate 要素を削除します。

5 Elements.xml を保存して閉じます。

11.3.5 Microsoft SharePoint Server 2010 のコネクタおよび Microsoft SharePoint Server 2013 のアンインストール

- 1 SharePoint Web アプリケーションから SharePoint Connector のアクティベートを解除します。SharePoint Connector のアクティベートを解除するには
 - a ブラウザーで SharePoint Web アプリケーションを開きます。
 - b 「サイトの設定」をクリックします。
 - c 「Site Collection Features」をクリックします。
 - d **Adobe LiveCycle Connector** 機能および **Adobe LiveCycle Workflow** 機能について「アクティベートの解除」をクリックします。
- 2 コマンドプロンプトで、次のコマンドを順番どおりに実行します。変更がすべてのサーバーに適用されたことを確認するために、各コマンドの後に stsadm -o enumsolutions を実行します。resultant xml に <state>pending</state> タグが追加されるまで、stsadm -o enumsolutions を繰り返し実行します。

```
Install.bat -uninstall  
Install.bat -retract  
Install.bat -delete
```

注意： Install.bat の -retract コマンドの場合は、resultant.xml に
<LastOperationResult>RetractionSucceeded</LastOperationResult> タグが追加されるまで、stsadm - o
enumsolutions を繰り返し実行します。